

---

# 恋姫無双～全ては我が主のために～

東条 優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫無双〜全ては我が主のために〜

### 【Nコード】

N1752Q

### 【作者名】

東条 優

### 【あらすじ】

これは『魔女』の気まぐれにより、北郷一刀のいる恋姫無双の世界に飛ばされた一人の少年の物語。さあ、この外史はどんな結末を迎えるのか、一緒に見てみない？

## 第1話「プロローグ」(前書き)

はじめまして。

更新は土日を中心に行いたいと思っています。  
では、始まり始まり。

## 第1話「プロローグ」

「起きて下さい。」

誰かの声がする。

「起きて下さい。」

優しい声がする。

「仕方がないですね。」

はあく、と溜息を誰かがした。

「起きろつつてんだろおおおお!!」

グサリと腹部に激痛が走り、完全に俺は目を覚ました。

「痛い痛い痛い!!」

「あ、起きたようですね。」

ニコニコと笑顔を浮かべ、俺の顔を覗き込む女がいた。

年は10代だろうか。幼さが残った容姿に肩の辺りまで伸びた栗色の髪、くりつとした瞳は見るものすべてを吸い込みそうなほど透き通っている。

すこし白っぽい肌色の肌にピンクのフリフリドレスを身に着けているその姿は、非現実的なほど美しく、俺は今までに見てきたどの女性より綺麗と心のそこから思った。

しばらく見とれていると、俺は声をかけられた。

「それじゃあ、抜きますからね。」

グチュ、グチュ、ブシャ……。

腹の辺りに再び激痛が走り、俺の頬に血の雫が1、2滴落ちてくる。再び、女のほうを見ると、手には槍と剣を足し合わせたようなものを持っている。

もちろん、その剣先は真っ赤に染まっている。

「動いてもいいですよ。」  
女が言う。

俺はゆっくりと体を起こし、自分の腹を見ていると、そこはぱっくりと裂けており、血は勢いが弱まることなく流れ続けている。

「ここでは死にませんから、心配しないで。」  
女はそう言って、西洋風の豪華な椅子に座って言う。そして改めて、俺は室内にいることに気がついた。

部屋にある家具はすべて西洋風のものであり、部屋の四隅には大きな葉を持った観葉植物が置かれている。部屋の中央にあるガラスでできたテーブルの上には、ランプが置いてあり、部屋全体を明るく照らしている。

「君は誰だ？ここは何処なんだ？どうして俺は死なないんだ？」  
困惑して次々と質問する俺に、目の前の女は黙って最後まで聞くと、一つ一つに答えていった。

「私はウィッチ||リリス・クロノア。呼ぶときはリリスって呼んでください。」

そう言って、リリスは妖艶な笑みを浮かべる。

「俺は一之瀬隼人だ。まあ隼人って、呼んでくれ。」

「分かりました、隼人様。あ、傷をふさがないと・・・。」

そう言っ、彼女は自身の人差し指をくるくると回しながら、言葉を出していく。

それは呪文を唱えるように、だけれども詩を詠うように一定のリズムで流れていく。

すると、どうだろう。先ほど俺が受けた傷が見る見る塞がっていくではないか。

「これって・・・。」

「ええ、お察しのとおり、『魔法』ですよ。そして私は『魔女』なんです。」

リリースはそう言っ、再び人差し指を回すと、俺の右横にリリースが座っているのと同様の椅子が現れる。更にその椅子の横には小さな丸テーブルも現れる。

手で椅子を指差し、座るように目で訴えられたので、大人しく従う。リリースはパチンと指を鳴らすと丸テーブルの上に紅茶とクッキーが置かれる。

「まあ、硬くならないで。紅茶でも飲んでリラックスして。」

そういっ俺に入れたてであろう、湯気が出ている紅茶を勧める。俺はティーカップを持ち、鼻に近づけると、いい香りがする。ローズヒップティーというやつだろう。十分に香りを楽しんだ後、口に含む。

「・・・美味しい。」

「お口にあって嬉しいです。」  
にこりとリリースは微笑み、自身も紅茶を出して、口に含む。

「質問のほうですが・・・ここはどこか？といわれましたね。ここは幻想世界。隼人様がいた2010年の世界とは離れた世界。ここは魔女以外の誰にも干渉することはできない隔離された世界です。」  
つまりは魔女の領地というわけです、と付け加える。

「そして隼人様が死なないのも、この空間にいるからです。あ、私の言うことを素直に聞いてくれれば死ぬことはありませんから安心してください。」

まあ、言うこと聞かないなら死んじゃいますけど。リリースはそう目で訴え、俺を刺した武器を持ち、ゆらゆらと揺さぶる。

「滅茶苦茶だなあ・・・で、俺を呼び出した理由は何なんだ？」

「隼人様には歴史を変えて頂きたい。そこでご主人様には三国時代、それも女の子たちが活躍する世界に向かってもらいます。」

三国時代って歴史の時間に習ったあの戦乱の時代か。でも、女？

「あ、あのー、どうして俺が？」

「ふふ、隼人様は私の選んだお気に入りだからですよ。向こうでのことは大丈夫ですよ。隼人様のいた世界の記憶、知識は引き継がれますし、私たち魔女もサポートしますから。それに今ならオプション機能もいろいろつけちゃいますから。」

「オプション機能？」

「ええ、隼人様には1つだけ能力をつけてあげますよ。何がいいですか？何でもいいですよ。」

「・・・じゃあ、不死身に。」

「それは無理ですよ。」  
即答で却下される。

「それではバランスが崩れてしまいます。」  
要するに反則すぎる能力はダメってことか。さっき何でもって言ったじゃん！・・・あっ、ごめんなさい。謝ってるから、その手元の得物を揺らさないで。

「じゃあ、結界なんてどうだ。」

「三国志という導術のようなものですか？」

リリスはそう言って、炎や氷を出したりする。

「まあ、そんな感じかな。でも、他の技は並でいいから、結界においては群を抜くようにしてほしいんだけど。」

「大丈夫ですよ。そのくらいなら。」

ニコニコと笑顔で了解するリリス。

「能力も決まったところで、隼人様の『ゲーム盤』の駒としての役割を教えますね。」

ゲーム盤、即ち三国時代での俺の役割を言われる。

「隼人様には先ほど歴史を変えて欲しいといいましたが、具体的にはどうするのか、といいますと・・・。」

一呼吸置いて、話し出す。

「一番手っ取り早いのは、三国、蜀、魏、呉の王を殺すことですね。」

「殺すって!?!」

リリスのとてもない提案に、思わず席を立ち上がり驚きの声を上げてしまう。



「まあまあ、落ち着いてください。これはほんの一例ですから。」  
両方の手の平を胸の前に押し出ししながら、席に座るように促される。

「そもそも思ったのだが、何故、俺は歴史を変えなきゃいけないんだ？」

席に座りながら、突っかかっていた疑問を言う。

「そうですね。では、お話します。その前にこれを見てください。」  
リリースがそういうと、脳裏に映像が流れ込む。

そこにはさまざまな女性たちが写っており、笑ったり、泣いたり、表情は様々だが、どの映像も幸せそうだった。

そしてすべての映像には一人の青年が写っていた。年はほとんど自分と変わらないぐらいだろう。

俺は始めてみる映像なのだが、客観的に見てもこの青年を中心に動いているのだと分かった。

すべての映像が終わる。

「今のはアカシックレコードといいまして、私のような魔女は、管理人達よりも位が上なので様々な外史を持ち出し可能ですから、すこし見ていただきました。」

「今のって・・・。」

「ええ、隼人様もお気づきのとおり、映像の少年、北郷一刀は隼人様と同じ世界から来た人ですよ。」

やはり、同じ世界にいたような雰囲気をなんとなくだが感じていた。

「でも、疑問に思いませんでしたか？」

『魔女』が、ウィッチ||リリス・クロノアが笑みを浮かべて言う。

「彼がどの外史にも存在していることに。」

その瞳には相手を射抜くような鋭い光が見え隠れする。

「彼と隼人様は同じ世界の人間ですよ。偶然、外史に来たはずなのに、何故だか彼はいつも外史に介入する。」

左手が形のよい顎に添えられる。

「はじめは誰しもが偶然だと思ったのです。ですが、その後の外史には全て、彼がやってくる。」

猫のような笑みで弧が描かれていく。

「おかしいと思いませんか？」

そう、その笑みは本当に純粹過ぎて、とてつもなくどす黒いものだった。それは表裏一体。

「何が言いたいんだ？」

場の空気は一気に凍りつき、目の前の女が、嫌でも『魔女』であることを刻み付けられる。

額には玉のような汗が流れ始め、ゆっくりと落下していく。

「簡単なことですよ。外史を裏でコントロールしているやつがいるのですよ。」

リリスはきっぱりとそう言いきる。

「もう、いい加減、北郷が活躍する世界は飽きてきたのです。『魔女』にとっては退屈は唯一の死因ですから。」

そして、リリスは足を組み、言葉をつなげる。

「ではここで問題です。私は今までの外史に飽き飽き。だが、何者かによって、北郷一刀は毎回のように出てくる。そこで私は元凶たる、コントロールするやつを消し去りたい。じゃあどうしたらいいでしょうか？」

「・・・北郷一刀を殺害、もしくはそいつ以上に活躍する人間がでてくればいい。」

「そうなのです。北郷を英雄にしたい黒幕は何らかのアクションを起こすはず。そして、餌を仕掛ける役目が隼人様、あなたなのですよ。」

「前者にしようが、後者にしようが私たちにとってはどちらでもいい。ですから、よろしく願いますね、隼人様。」

それは『魔女』の顔ではなく、はじめに出会ったときの清しいほどの笑顔だった。

そして、俺の意識はゆっくりと泥沼に沈み込むように薄れていった。

一之瀬隼人の意識が無くなって、すぐにリリスの元には新たな客人が来ていた。

黒髪を腰のあたりまで伸ばしたストレートヘアは漆黒のドレスと合

わさって、より怪しげにだが、芸術品のような美しさも出していた。

「いいの、彼をあのまま行かせちゃって。彼にはおかしい記憶が混ざっちゃったみたいよ。それに元の記憶も滅茶苦茶じゃない。」

客人は無表情に淡々と言う。

「別にいいの。そんなの私には関係ないからね。彼がどうなろうと、黒幕を引き釣り出してくれさえすれば、すべてOKよ。それに．．．」

「それに．．．？」

客人が聞き返すと、くすくすと笑いながらリリースは答える。

「そっちのほう面白そうじゃない。あなたもそう思うでしょ。召喚の魔女、フロージュ卿。」

「それもそうね。しばらくは退屈せずにすみそうだわ。」

くすくす、くすくす．．．

しばらく、笑い声は響き続けた。

## 第1話「プロローグ」(後書き)

いかがでしたか？

気軽に感想・アドバイスをしてください。

作者のやる気にもつながります。

次回もお楽しみに。

## 第2話「邂逅」

後漢王朝。

それは政治腐敗による権威失墜が長い乱世の時代。

中国全土を統一した秦もわずか30年足らずで滅び、漢の時代の幕は上がったが幾つかの時が流れた頃から、少しずつ歯車が狂い始める。

要因はその前からあったが、切っ掛けとなったのは歳若い皇帝が生まれた事だろう。

皇帝の務めとして早い段階で奥方を貰う。

すると当然の帰結として外戚がまた現れ、歳若い皇帝を差し置いて権力を行使し我が物顔でのさばり歩く。

その状況に怒りを覚えた皇帝は唯一の味方と言える宦官達を使い、成人する頃にはクーデターを起こす。

宮廷は外戚と宦官が跋扈し、政権争いが続いては繰り返される皇帝崩御。

その負の螺旋と言えるループ現象が200年も連綿と続けられる中では、真っ当な政治を出来る者が居る筈が無く、時は既に『誰が悪い』と言う単純なものではなくなっていた。

この物語はその後漢末期、売官が盛んに行われ、極度な政治腐敗によって苦しむ民衆が、とある占師によって予言された内容に希望を

求めた頃から始まる。？

占師、曰く、

『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流星。』

『その流星は天の御遣いを乗せ、乱世を鎮静す。』

だが、占師の言葉はそれで終わらなかった。

『その流星と対をなす、その弱い輝きは、欠けた月を補うように舞い降りてくるだろう。』

『それは天の使いなのか、はたまた鬼なのか。』

この予言は瞬く間に大陸全土に広がっていった。

そして、予言は当たることになる。

満月の晩、夜空に一筋の流星が流れた。

たまたまそれを見ることが出来たものは、天の使いが来たことに、歓喜した。

だがもう一つ、流星は流れたのだ。

彼らが最初の流星に見入っている間に、月はまるで、無理矢理押し潰されるように太い三日月になっていく。

その広がった隙間から光が溢れ出す。

それはまるで欠けた月を補うように。

そして、その光は人知れず、大地に降り立った。

その様子を見たものは一人しかいなかった。

「面白いじゃない。」

覇道を突き進む者、曹孟徳であった。

俺は誰なのだろう。

||||| お前は一之瀬隼人。ここでは姓を「流<sup>る</sup>」名を「浪<sup>ろう</sup>」と名乗ればいい。

君は誰なの。

||||| 俺のことは気にしないでいいさ。

ここはどこなのだろう。

||||| ここは三国志の世界。それもまだ始まったばかりの。

俺は何をすればいいのだろうか。

||||| お前のやりたいようにすればいい。あ、もう時間のよ  
うだ。さあ、頑張ってきて。



目を覚ますと、視界には夜空が入ってきた。空には無数の星たちがきらめいている。

仰向けの体制のまま首を左に向けると、荒野が広がっていた。右に向けても同じだ。

しばらく頭がボォっとしていたが、徐々に目覚めてくる。

ゆっくりと立ち上がり、流浪は思考を開始した。

彼の名前は流浪。何故こんなところにいるか分からない。というより、名前以外何も思い出せないでいた。

身なりを見てみると、漆黒の外套、上衣、下衣を身に着けており、腕には栗色の宝玉と黒の宝玉、金色に輝く宝玉の3つが埋め込まれた腕輪をつけていた。

更に彼の足元には、大きなへの字型の何かが包帯で何十にも巻かれているのが置いてあった。

何を思ったわけではなく、流れるような動作でそれを持ち上げる。程よい重さで、流浪は何故だか懐かしさを感じてしまう。

（何故だろう・・・分からない。）

「とりあえず、どこかで食べ物を・・・。」

こんな右も左も分からぬ状況で、空腹感がやってくるとは、流浪自身も呆れてしまっていた。

（どこへ行ったらいいのだろうか？とりあえずまっすぐ行けば、どこかに辿り着くだろう。）

そう思い、への字型の物を右手に持ち、歩き始めた。

「おい、兄ちゃん待ちな。」

流浪は一向に景色の変わらない荒野を歩いていると、後ろから唐突に話しかけられた。

流浪が振り返ると、そこには中柄の男を先頭に両サイドに小さな男と、大きな男が一人づつ、その後ろにたくさん男たちがいた。

その数、少なく見積もっても50はくだらないだろう。

その手にはそれぞれ剣やら槍やら武器が握られており、顔をニヤつかせている。

「金目のものをよこしな。そうすれば命だけは見逃してやるよ。」  
真ん中のリーダー格らしい男が剣をちらつかせながら言う。どうやら賊のようである。

「金目のもの・・・。」

流浪は身の回りを探ってみるが、何一つ金目のものはない。いや、あるにはある。3つの宝玉がついている腕輪、売れば結構な価値だろう。

「これでしたら・・・。」

そういつて腕輪を手首からはずそうとするが、

「？」

全然外れようとしめない。その間にも賊は苛立ち始めていた。

「ふざけてんのか！？もういい、お前ら、やっちなえ！！」

ついに堪忍袋が切れた男の合図を機にいつせいに男たちが襲い掛かってきた。

その刹那、

すさまじい速度で空気が横から切り裂かれていく。

それは、一瞬の出来事。

一直線に数名の男たち目掛けて、突っ込み、

ボキ、リ・・・

そんな音を立てて、男たちは数メートル先に飛ばされていった。

「なっ!？」

残されたものは目を見開く。

そこには真っ白な包帯が。

それはとてつもなく長く、舞うように落ちていく。

そしてすべてが落ちたとき、身の丈ほどある大鎌を右手に持った流浪がいた。

その大鎌は死神の鎌を連想させる。

それを振り回しながら、一人、また一人となぎ倒していく。

「嘘だろ・・・。」

最後の一人、リーダー格の男は恐怖で頬を引きつらせながら言う。  
だが、そんなこといまさら言っても嘘でもなんでもない。全ては真実。

それを納得した男は、最後にこう言った。

『化け物』と。そこで、男は倒れた。

流浪はしばらくの間、呆然と立ち尽くしていた。

（何故、鎌を扱えたのだろうか。）

その答えは返ってこない。

そして流浪は、歩き出した。食い物を得るために。だが、体は言うことを聞いてくれないようだ。

「あ、やばい。」

少し歩いたところではたと倒れてしまう。

薄れ行く意識の中、誰かの声がした。  
だけでも、流浪は何を言っているのか、分からなかった。

「衛生兵、この者の治療を。春蘭と秋蘭は賊の始末を。」  
少女は足元で倒れている少年を指差し、指示を出す。

「分かりました。華琳様。」  
2人の将は賊のほうへ向かい、衛生兵が治療を終えたのを見ると、  
少女も賊のほうへ向かう。

「春蘭、秋蘭、報告を。」  
「はっ、賊の始末は完了しました。ただ・・・少しおかしなところが。」  
黒髪の女性が言う。

「おかしなところ？」  
「賊は誰一人として、殺されておらず、どれも半殺しの状態でした。」  
今度は隣の水色の髪の女性が発言する。

「面白いじゃない・・・。」  
少女は流浪が倒れている方向を見る。

「この曹孟徳、気に入ったわよ。何が何でも、あなたを手に入れるわ。」

そして少女は不敵な笑みを浮かべるのであった。

## 第2話「邂逅」(後書き)

いかがだったでしょうか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

### 第3話「霸道を歩む少女」

ガタン、ガタン。  
揺れている。

「起きたようね。」

流浪は目を開けると、見知らぬ女性がいた。金髪をサイドでまとめた女性である。

「あなたは・・・。」

「あら、人に名前を聞くときは自分から名乗るものよ。」  
ふふっ、と笑う女性。

「姓は「流」名は「浪」と申します。」

「私は曹猛徳。近くの邑、陳留で刺史をしているものよ。」

「ねえ、流浪。あなたこれから予定はあるかしら？」  
にこりと微笑みながら、尋ねてくる曹猛徳。

「いえ、特にはないです。」

「そう、なら一緒に来てもらえるかしら。」

そういつて、一路は陳留へと向かう。



「好きなだけ食べていいわよ。」

今、流浪は陳留の食堂へときていた。しゃれたお店で、値段もけっこうするような高級料理店だ。

席には曹操に夏侯姉妹も座って食事をしている。帰り道に名前を覚えてもらっていた。

「いいのですか。結構高そうですけど。」

「気にしないでいいわよ。それにお腹も空いているのでしょう。」  
すべてお見通しよ、という目で見る曹操。

「では、お言葉に甘えさせていただきます。」

流浪はそう言って、料理を一口食べる。その瞬間、曹操がにやりとした気がした。

一通り、食事を食べ終え、流浪たちは雑談に花を咲かせていた。

「それで、流浪はあんなところで何をしてたんだ？」

黒髪の女性、夏侯惇が尋ねてきた。

流浪は、いつの間にか荒野にいたこと。そして賊と戦ったところまでを話した。

「ねえ、流浪、荒野ってどのあたりかしら？」

変なところに興味を持つんですね、と思いながらも口には出さず、質問に答える流浪。

「俺が倒れたところから、一刻（2時間）ほど南にいったところだと思います。」

「・・・。」

それを聞いて真剣な眼差しになる曹操。

「流浪、あなたには記憶のないことは分かったわ。ということは、まだ誰にも仕えていないのよね。」

「ええ、まあ。」

「じゃあ、私のところに仕えなさい。」

その言葉が出た瞬間、ちよつと待ってください、と夏侯惇が声を上げる。

「このような得体の知れない者を仲間にするなど・・・。」

「元讓殿、心配には及びません。俺は仕えるつもりはないですから。」

「なつ、華琳様を愚弄する気か!!」

（あれ、逆効果だったかな。曹操さんを馬鹿にしたつもりはなかったんだけど。）

「春蘭、落ち着きなさい。それで流浪、理由を教えてくれるかしら？」

「曹猛徳殿、あなたは確かに魅力的な人です。ですが、『今』はあなたの下で仕えるつもりはありません。いえ、あなたにはまだ私を使えない。ですから・・・。」

そう言って、席を立ち、出口へ向かう。

「俺は、お断りしたのです。」

その瞳は何者にも揺るがすことのできない。

そして、王の素質ある曹操はそれを認識できる、だからこそ・・・

彼女は強行手段に出た。

「春蘭、秋蘭、彼を捕らえなさい。」

「はっ!!」

その合図とともに、夏侯惇、夏侯淵の二人が各々の得物を持ち、ここが食堂であることを忘れているかのように流浪に襲い掛かった。

流浪は出口へ走りこみ、外に出る。

そこへ間髪いれずに、夏侯淵の放った矢が飛んでくるが、流浪は自身の包帯に巻かれた大鎌を使い、弾く。

外には人が集まってきて逃げることができない状況になっていた。

（はぁ、どうしてこうなったのだろう。）

溜息をつきながら目の前の2人と対峙する。

「曹猛徳殿、彼女らに勝てば、見逃してもらえますか？」

「いいわよ。」

店の入り口からこちらを見ていた曹操。

「では、流浪、いざ・・・参る!!」

その言葉とともに、巻かれていた包帯は流れるように大鎌から離れていき、その姿を現す。

太陽の光が大鎌に反射して、そんじゃそこの鎌ではないことを印象付けさせた。

そして動き出す。流浪は舞うように、体を捻りながら・・・

「なっ!!」

姿が消えた。否、

「姉者、危ない!!」

「・・・っ!!」

いつの間にか、流浪は夏侯惇の背後に立ち、その首筋に鎌を突き立てている。少しでも流浪が手を引くと、首が飛んでいく格好だ。

「終わりましたよ。曹猛徳殿。」

「何を言って・・・。」

曹操は驚きのあまり目を見開く。

そう、終わっていたのだ。

首筋に鎌を突きつけられた夏侯惇、そして、

「いつの間に・・・。」

夏侯淵の得物は氷付けにされており、使い物にならなくなっていた。

「では、」

流浪は鎌を下ろすと、何事もなかったかのように、歩きは始める。

そして、曹操の横を通り抜けようとしたとき、

「曹猛徳殿、殺気はちゃんと隠してください。」

と流浪は呟いた。

「・・・。」

曹操は反応しない。直ぐにても自身の得物で襲いかかる積りだった

のだが、完全に見切られていた。

「確かに、俺はまだあなたに仕えない。でも、いずれあなたが俺を使えるようになる 때가くる。その時は俺はあなたに喜んで仕えましょう。」

流浪はその後、何も言わずに歩いていく。残された曹操は生まれて初めて恐怖を感じた。それと同時に、

「ますます興味が沸いてきちゃったじゃない。」  
その呟きは誰にも聞こえることはなかった。

曹操一行と別れた流浪は、どこへいくでもなく、北上していた。

ただ、流浪は曹操の事を思い出していた。

（あの少女は前にも何処かで出会った気がする。それがいつだったか  
かとは思えない。）

『ねえ、■■■■。私は■■■■って言うの。』

流浪の脳裏で、優しい少女の声が響く。

（彼女は誰なのだろうか？・・・分からない。）

流浪がそんな思考に至っていると、前方に怪しげな集団が列になって進んでいた。

全ての人間が黄色い布を被っていた。

流浪は怪しいと思いながらも、一刻も早く村に辿り着きたかったのだ、彼らの後をつける事にした。

一刻ほど歩くと、冀州に入り、すぐに村に辿り着いた。  
流浪は宿に泊まろうと思うが手元にお金がない。

そこで流浪は、働いて宿代を稼ぐ事にした。  
？  
たまたま人数不足だという店で働かせてもらい、現在は、宅配を頼まれている。

流浪は目的地の宿に行く途中、途中で疑問に思う事があった。

（やけに、黄色の布を被った人達が多い。）

彼らが巷では黄巾軍と呼ばれている。だが、そんな事を知らない流浪は、

（新しい流行だろうか？）  
と思っているのであった。

ようやく、目的地の宿に着き、部屋をノックする。

「はいはい。」  
ガチャリとドアノブが捻られ、ドアが開く。

そこから、ひょっこりと顔を出したのは、ロングヘアーの女性だった。

「お届けものです。」

「ありがとうございます。」

そう言ってドアが閉じられる。部屋からは女の子がきゃっきゃっ騒いでいるのが聞こえてくる。

勿論、流浪は彼女を知らない。彼女こそ、アイドルユニット「数え役萬☆姉妹」（かぞえやくまん・しすたあず）の長女であり、黄巾軍首謀者の張角だとは。

### 第3話「覇道を歩む少女」 (後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。



#### 第4話「黄巾の乱」

この村に来てから、数日が経ち、お金も溜まってきたので、今までの給料を貰い、仕事を辞めた流浪。

そろそろ村を出ようかと思ったのだ。

その宿へ行く道中、

「お、そこのお兄さん。いい物が入ってるよ。」  
商人のおじさんに、流浪は声をかけられていた。

流浪は商人の元へいくと、商人はオススメの品があると言って、とある物を見せた。

「こ、これは。」

ゴクリと流浪は息を飲む。値段は手持ちのお金でギリギリ買える値段。

（それでも欲しい。）

上半身は純白の白。

それに紅い袴。

それはまさに至高の逸品。

その名は、巫女服。

「生きてて良かったあああ!!」

流浪の魂の叫びが響き渡った。

流浪は珍しくスキップなんかしちゃって、宿を出て行くこうとしている。

彼が浮かれているのは巫女服ロマンに出会えたからである。

その巫女服は現在、手持ちの布袋の中に眠っている。

そして、幸せいっぱい元気いっぱいの流浪は勢いよくドアを開け放ち、目の前の光景に空いた口が塞がらなかった。

ドアを開けたら、そこは戦場になっていた。

黄色の布を頭に巻いた人たちと様々な色の鎧に身を包んだ兵士たちがぶつかり合っている。

流浪は自身の得物を右手に持ち、いつでも振るえるようにする。その状態で無関係だといわんばかりの戦場から離れるために動いていく。

流浪はそのまま村から立ち去るつもりだった。

でも、それは一人の男の言葉で叶わぬものとなった。

「張三姉妹を助けてくれ・・・。」

それは死ぬ間際に残した黄巾軍の一人の男の言葉。本来ならばそれは弱弱しく伝わることはないだろう声。

戦争とはそういうものだ。死ぬ間際に言った言葉など、誰の耳にも届かない。

でも、届いてしまった。それも流浪という男の耳に。

だから、流浪は男の傍に行き、張三姉妹の特徴を教えてもらい走り出した。

戦場の奥深くへと。

「何でこんなところに呂布がいるのよっ!？」

「そんなことより走って、ちい姉さん。」

「お姉ちゃん、疲れちゃうよお。」

敗走している張三姉妹だったが、旅芸人である彼女らが武に優れて

いる兵士たちを振り切れることなど不可能に近いことだった。

「・・・見つけた。」

そしてさらにその可能性をゼロにするかのように、最も出会いたくないのが出てきていた。

彼女の名は呂布。董卓軍所属、第一師団師団長。呂奉先。

褐色の肌には模様が浮かんでおり、赤い髪がピョコンと二本跳ねているのが特徴的なその女性は、自身の得物である、戟を震わせながら確実に彼女たちとの距離を縮めにかかっていた。

そして距離は縮まっていき、一番後ろにいた張角に戟が振り下ろされる。

死を覚悟した張角は恐怖のあまり目を閉じてしまう。

それは確実に振り落とされていき、

ガキン・・・

金属同士がぶつかり合い、甲高い音が鳴り響いた。

そして、張角が目を開いたとき彼女の視界は真っ白になった。

「包帯・・・？」

張角が呟く間にも、包帯は重力に従い、落ちて行く。

そこには、一人の少年が張角に背を向けて立っていた。その姿は上から下まで漆黒であった。

更に驚くべく事に呂布の戟を、重い打撃を受け止めたのは、これまた大きな鎌だった。それも片手で鎌を持っている。

「悪いですね。急遽、参戦させていただきます。」

鎌と戟を押し合いながら、両者は言葉を交し合う。

「お前は・・・誰？」

「俺はただの巫女さん大好きな少年です。」

「そう・・・。」

「ええ。」

それを皮切りにガンと呂布は力一杯、戟を鎌に叩きつけ、距離を取る。

「どなたか存じませんが、ありがとうございます。」  
長女の張角がお礼を述べる。

「それは俺にではなく、貴女たちのファンに言ってください。俺は頼まれただけです。それに、これも我が主への手土産に出来そうですから。」

そして、流浪は張三姉妹に手を翳<sup>かざ</sup>す。  
すると彼女達を囲む様に直方体の結界が現れる。

「・・・導術っ!!」

「これで、貴女たちは一刻半の間は姿がだれにも見えなくなります。その間になるべく遠くに逃げてください。あ、それと・・・。」

流浪は彼女らを囲んである結界内にある布袋を指さす。

「それを持っててください。中身は大事なもののなので乱暴に扱わないでください。」

「あ、アンタは大丈夫なの？」

次女の張宝が心配そうに尋ねる。

「俺のことは気にしないでください。それよりも荷物を頼みましたよ。」

そう言って、再び呂布と討ちあう。

「行きましょう。」

三女の張梁は姉たち二人の手を取り、駆け出す。

流浪は横目でそれを確認すると、鎌を持つ力を一層強める。

「お前……変なやつ。」

「そうでしょうか？ 呂布殿」

「……恋でいい。」

「そうですか。なら俺のことは流浪と呼んでください。生憎、俺の真名は主にもまだ伝えていませんので。」

二人は再び距離をとり睨み合う。

そこに更なる援軍がやってくる。

「恋、大丈夫か。」

「華雄、助太刀に参ったぞ。」

やってきたのは、董卓軍所属の将、張遼、華雄の戦場では文字通り無双の強さを誇る武将二人である。

「助かる・・・張角達を追って。」

「任せときいや。」

張遼率いる軍が後を追おうと流浪の横を通り過ぎようとするが、

「ぐはああああ！！」

先頭を突き進んでいた兵士達が次々に倒れていく。

そこには鎌を振り回している流浪の姿が。そして一通り片付けると自身の後ろに鎌の先で直線を引く。

「悪いですが、ここから先には誰一人通すわけには行きませんか。」

流浪は再び鎌を構える。その様子は修羅のごとく。

「我が名は流浪、いざ参る。」

それは、鉄壁の守りの守護神か、それとも冷酷な鬼か。4人は舞い、ぶつかり合う。

「兄ちゃん、どんだけもつねん。」

張遼は息を切らせながら言う。

「ここまでの将がいたとは……。」

華雄も苦笑交じりに言いながらも、必死に流浪の攻撃を受け止める。

「……。」

呂布は無言で流浪と何十合も討ち続けている。

兵士達も将を援護しようとするが、その度に流浪に鎌を振るわれて、身動きが取れなくなっていた。そのため、ほかの兵士達は彼女ら3人の後ろからその戦いを見つめるしかなかった。その戦いが一刻半にまで続こうとしていた。

そしてそれらを一身に引き受け続けていたのは流浪ただ一人であった。

流浪の息も若干ながら上がってきている。

それは当然だ。彼は一切休むことなく、華雄、張遼、呂布の一騎当千のつわもの達と戦っている。

それは奇跡に近く、本人である流浪が一番分かっていた。

だけれども、流浪は約束してしまったから。

それを達成するためには自身の命さえも出し惜しみしない。

流浪とはそういう男なのかもしれない。

そして、決着がついた。



「これで終わりです。」

呂布の喉元には鎌が押し当てられていた。

その時、ちょうど一刻半が経過した。

カラン、カラン、カラン・・・

得物が地面に落ちていく。

それは戦いの終了を意味する。

「参りました。降伏します。」

それを言ったのは呂布ではなく、流浪だった。

そして彼は全身の力が抜けたように前のめりに倒れる。

それを呂布は受け止めた。

流浪はすやすやと気持ちのよさそうに眠っていた。

#### 第4話「黄巾の乱」 (後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。  
次回もお楽しみに。

## 第5話「平穩」

『ねえ、■■■■。私は■■■■って言うの。』  
この少女は誰なのだろう。

『私とあなたはずっと■■■■よ。』  
少女は優しい笑みを浮かべながらこちらに手を伸ばしてくる。

俺はその手を掴んだ。彼女の手は、柔らかくお日様のように暖かかった。

「うう……。」

ゆっくりと流浪は重いまぶたを開ける。

初めに彼の視界に飛び込んできたのは白い天井。  
そして、お腹の上には数枚の毛布。

流浪は視線を右にずらす。

そこには椅子があり、呂布が座って、寝息を立てていた。

その呂布の膝にも毛布が掛けられようとしていた。

流浪は更に下へと視線を延ばす。

目が合う。

目が遇った。

「あ、起きたのですか。」

そこには毛布をいそいそと掛けるロリっ娘の姿があった。

「俺は・・・なんで恋さんが。」

「あなたも恋殿から真名を許されているのですか。むむむう・・・」

ジト目で俺をにらむ少女。

「あ、あのお・・・君は？」

「お前に名乗る名など無いのですよ。」

（あれ、怒ってる！？）

「あの・・・何か怒らせちゃいましたか？」

「ちんきゅーは怒ってなんかいいのです。あ、名前を言ってしまいました。」

ますます睨みをきかせる陳宮。

「ねね・・・どうしたの？」

先ほどまで寝ていた呂布が目をこすりながら言う。

「恋殿、起こしてしまいましたか。」

「いい・・・、ねねのせいじゃない。」

「恋さん、俺は何でここにいますか？」

「・・・拾った。」

「あなたは恋殿に助けられたのです。ありがたく思うのですよ。」  
呂布の隣に行き陳宮は胸を張る。

「ありがとうございます。」  
素直に頭を下げる流浪。

そして、流浪は起き上がり、漆黒の外套、上衣を身に着ける。

下衣はもともときていたままである。上衣が脱がされていたのは、  
手当てをされていたからだ。そのため上半身には包帯が少し巻かれていた。

流浪は室内を見渡す。

「あの、俺の鎌を知りませんか？」

「鎌ですか・・・。」

陳宮も周囲を見渡すが見つからない。

すると、突然扉が勢いよく開かれた。

「おーい、兄ちゃん、起きとるかー!!！」

黄巾の乱の時にいた張遼は開口一番、大声で叫ぶと、流浪が起きて  
いるのを見て、ずかずかと近づく。

「ウチは張遼。字は文遠な、よろしゅうな。」

「俺は流浪。よろしく願います。」

自己紹介を交わし、じろじろと流浪を観察する張遼。

「本当にこの兄ちゃんがうちら三人とやりおったとは今でも信じら

れへんわ。」

ふと、流浪の視界にあるものが入ってきた。

鎌だ。

流浪の。

「あの、それ。」

「ああ、この鎌やろ。ちよいと見せてもらったわ。それにしても刃が完全に潰れとったでえ。そんなんじゃ何も斬れんやろ。うちが職人に頼んで研いでもらおうかあ？」

張遼が鎌を流浪に渡しながら提案する。

「いえ、その必要はないと思うんです。何となくですが。」

「そうなんか。兄ちゃんがそういうならいいんやけど・・・。」

「では、これで・・・。」

流浪はそう言って、ここから立ち去ろうとする。

「ちよい待ちや。」

張遼が呼び止める。

「兄ちゃんはどこにも所属してないんやろ？」

「ええ（あれ、なんかこの展開前にも・・・。）。」

「だったら、うちのところに所属しいや。」

「・・・それがいい。」

張遼の言葉に呂布も賛同する。

「いえ、自分は仕えるつもりはありません。」

「そない言うなら、うちかて無理にとは言わへんけど、せめて客将としてでも居てくれへんか？」

「客将ですか・・・？」

「そうや。ここ都の洛陽は店も立ち並んで栄えとる。すぐにはここから出るつもりはないんやろ。」

「ここは洛陽だったのですか。」

「兄ちゃん、今気づいたんか。董卓の拠点っていったら結構有名なんやと思うんやけどなあ。」

「俺には記憶がありませんので。」

「そうなんか。えらい苦労しとるみたいやなあ。まあ、荷物も無いみたいやし、少しは買い物ぐらいするやろ。客将としてくれれば飯にも困らん、寝床も確保できる、一石二鳥やろ？」

しばらく考え込む流浪。だが、あることに気がついた。

「金持ってない・・・。」

そう、流浪は荷物を全て張三姉妹に預け、現在無一文の状態。

「お言葉に甘えさせていただきます。」

ぺこりと頭を下げる流浪。

「ほな、月に報告しに行つて来るわあ。」

流浪が洛陽に滞在することが決まり、上機嫌で部屋を出て行く張遼。

その後、流浪は客将として過ごすことになったのだが、タダで居座らせてもらうのは気が引けたようで、手伝いとして、洛陽の警羅を任された。

そして、現在呂布と陳宮と共に、見回りをしていたのだが．．

ジュル．．．

呂布が先ほどから食べ物の出店を見るたび、喉を鳴らしている。

「恋殿、ささっどうぞ。」

その度に陳宮は買ってきては呂布に渡している。

「そういえば、流浪殿は欲しいものはないのですか？」

陳宮が隣を歩いている流浪に尋ねる。

「特には．．．。」

ぴたりと流浪の足が止まる。

「？」

陳宮は流浪の目線を追っていく。そこには．．

クリスマスツリーのような形状。

無数の鈴なり、それと同じ数の鈴。

それはまさしく巫女の七つ道具の一つ、御祓いでも使う『鈴』。

巫女服と合わせれば最強になる、この魅惑のアイテムに流浪は釘付けになってしまった。

「．．．。」

ジト目になる陳宮と状況に未だ気づいていない呂布。



「陳宮さん。」

「何なのですか？」

「お金を貸してください!!」

目にも留まらぬ速さで陳宮の前で土下座をする流浪。記憶の無い彼が何故、土下座を知っているかという、遺伝子的に覚えてたんじやないかなあ。

人目もはばからぬその行動に、陳宮はあたふたとし、周囲の人たちの視線に耐え切れず、お金を貸すのでした。

「♪♪♪♪」

ご機嫌な流浪。

「・・・流浪・・・嬉しそう。」

「はぁ・・・。」

そんな流浪につられてか笑顔な呂布と思いがけぬ出費にテンション馱々下がりの陳宮。

そして一同は警邏を終え、城の門をくぐるのだった。

世界は平穩で、このまま続くと思われていた。

だが、価値あるものほど取り扱いに注意する必要がある。

高価な壺は落ちれば粉々に割れるように。

同じように平穩ほど壊れやすいものは無い。

だけでもすでに、それは落ちかけていた。

反董卓連合ができるのはこれから数日後のことだった。

## 第5話「平穩」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしています。

次回もお楽しみに。

## 第6話「流浪と優しき暴君」

大陸全土は騒がしかった。

河北の雄、袁紹が反董卓連合結成の檄文を、各地で割拠する諸侯に飛ばしたのが原因だった。

檄文には董卓が暴政を振るっているということが書かれているものだった。

その情報は中心地である洛陽にも伝わってきた。

洛陽内ではあわただしく出兵の準備が行われていた。

そして、軍備がある程度終わったその夜、洛陽の城内では宴が行われていた。

表向きは客将の流浪をもてなすことになっているが、実際は兵達の士気の向上を図るものであることは言わずもがな誰しもが感じていた。

大広間には豪勢な着物で見るからに豪族の娘といった感じの董卓を始め、緑の髪を三つ編みにして眼鏡をかけた少女の賈馥、呂布、張遼、華雄にその他武官、文官、さらには一般の兵士までもが集まっ

ていた。

宴が盛り上がる中、大広間から外に出て一人、月を見ながら徳利とっくりを傾けているものがいた。

流浪である。

「あのお・・・。」

流浪はちびちびと酒を飲んでいると、後ろから声を掛けられていた。振り返ると、そこには董卓が申し訳なさそうに立っていた。

「もしかして・・・迷惑でしたか？」

「そんなことはありませんよ。俺はこう言ったことに慣れて、というより、こういうことをした経験が無いのでどうすればいいかわからなかっただけですよ。」

流浪はそう言って、安心してもらうために董卓の頭を撫でる。

「へうへう。」

「仲穎殿もどうですか？」

そういつて彼は徳利を見せる。

「はい、喜んで。」

二人で月を見ながら、少しの間お酒を飲み、流浪は口を開いた。

「あなたはこれからどうするつもりですか？」

隣で董卓が息を飲むのが流浪の耳には届いたか届いていないのかは誰もわからない。

「・・・。」

返答は返ってこない。それでも流浪は話し続ける。

「『このまま』戦っても負けてしまいますよ。」

残酷なことを可憐な少女に突きつける。

「確かに、ここには華雄さんに張遼さん、恋さんの強者たちがいる。さらに賈馱さんや陳宮さんのような優秀な軍師もいる。」  
宴で盛り上がっている声が彼らのいるところまで聞こえてくる。

「ですが、まだ勝つためには駒が足りない。それは一番あなたが分かっているはずですよ、仲穎殿。」

彼女は、逃げ出すことも泣き寝入りすることも自暴自棄にもなっていない。

「このままでは、全員死んでしまいますよ。」

残酷な言葉が更に少女の胸を抉る。

「・・・分かっています。」

それは小さな声だ。掠れてかろうじて聞こえるぐらい。

でも、はっきりとした強い意志が込もっていた。

「足りない駒は私。そうですね、流浪さん。」

彼女はまだ立ち向かっていなかったのだ。

「ええ、その通りです。」

流浪は笑みを浮かべて言う。

「皆さんは仲頼殿に生きてもらいたいから戦うんです。だから、貴女は何が何でも生き残ってください。貴女が生き残れば勝ち、貴女が死ねば負け。最初からそういう試合ゲームなのですよ。」  
流浪はそういつて酒を自分の杯さかずきにつぐ。

「ですから、貴女は生きてください。そして俺は、貴女の大事な人達を全力で守ります。そして誰一人、欠けさせませんから安心してください。」

それは優しい笑み。全てを包み込むような暖かさがある。

「それって・・・。」

「俺も参加しようと思っただけです。我が主の力も拝見できそうですし。」

「みんなを・・・よろしくお願いします。」

流浪は自分の杯を掲げる。それにコツンと董卓が自分の杯を当てる。

月夜に照らされた二人は、とても神秘的である。

そんなこんなで日は進み、反董卓連合は？水関に迫っていた。

「ついに来たか。将は誰だ？」

？水関の守将の華雄は城壁に上り、外の様子を見ていた。

「斥候の話では、平原の相、劉備だそうです。」

傍にいた董卓軍兵士が報告する。

「劉備・・・聞いたこと無い名前やなあ。」

張遼が言う。

「では一気に殲滅、連合軍に我らの力を見せつけようではないか！  
！」

「ちよい待ちいや。うちの任務はこの防衛や。出陣して、兵を  
消耗させるのは避けるべきや。」

二人が言い争う中、漆黒に身を包んだ男は冷静に外を見ている。

「敵軍から2人、将らしき者が出て来ました！！」

董卓軍兵士が慌てて報告する。

「あれが、天の御遣い・・・。」

手には包帯に包まれた大鎌を持っているその男は流浪であった。

『俺は天の御遣いの北郷一刀だ。守将、華雄そんな所でビビって  
ないで、姿を表せ。』

『我が名は関雲長。？水関にいる華雄に告ぐ！！そんなところで亀  
のように縮こまっていないで、私と一騎打ちしろ！！それとも、恐  
怖で足がすくんで、そこから動けないのか？』

関羽がそういう終わると、連合軍側の兵士が笑い始めた。

「ふざけおって・・・。今すぐ貴様らを八つ裂きにしてやる！！」  
「落ち着きいや・・・。」



頭に血が上った華雄は張遼の制止を振り切ると一人で、出陣してしまふ。

それを冷静に見ていた流浪は張遼の元まで歩く。

「張遼さん、貴女は恋さんがいる虎牢関まで全兵士を連れて引き上げてください。」

「兄ちゃんはどういすんのや？」

「俺は、ここに残りますよ。」

約束しましたから、誰も欠けさせないと。

「まあ、生きて帰ってきます。死にたくないですし。」  
では、と流浪は手を上げ、華雄の後を追う。

残された張遼は撤退の準備を始めるのであった。

？水関の門が開いていく。

中から出てきたのは怒り狂った華雄と、漆黒の衣に身を包んだ流浪であった。

劉備軍の陣内で誰だあの男は、とざわめき始める。

「我が名は華雄。関雲長とかいったな。貴様の首を取り、董卓様への手土産にするぞ。」

「我が名は関羽。一刀両断にし、我れらに勝利を!!」

華雄、関羽はそれぞれの得物を手にし、ぶつかり合う。

華雄は斧、金剛爆斧こんごうばくふを、関羽は長い柄の先に湾曲した刃を取り付けた、青龍偃月刀せいりゅうえんげつとうで打ち合っていく。

それが5合ほど続いたとき、華雄の動きに一瞬の隙が生じる。それを関羽は見逃さなかった。

「はああああ!!」

横薙ぎに振られ、華雄の上半身と下半身を真つ二つに・・・

「!!」

「なっ!!」

することは無かった。

「愛紗、下がれ!!」

一刀の叫び声が響き、とっさに後ろに下がる関羽。

そこには、先ほどまで関羽がいた場所を刈り取った流浪がいた。しかし右手からは血が出てきている。

「お前っ!!」

華雄が驚きの声を上げるが、流浪は左手でそれを制止し、苦笑いを浮かべて言う。

「ちょっと切れただけですよ。それよりも、貴女には何としても生き残っていただきます。」

流浪はそういつて、組んでいた導術を展開する。

2つの結界と、2つの術を組み合わせた独自のオリジナル術式だ。

それは華雄を覆い始め、そして、一瞬で消え去ってしまった。

「な、何をしたのだ!？」

その場の全員が啞然とする。

「なぁに、視覚できなくする結界、衝撃を無効化する結界、それに風の術と爆発の術を組み合わせて遠くに飛ばしただけのことです。」別に隠すことでもない、というように淡々と解説する流浪。

「それよりも第2戦といきましょうか。」

流浪は鎌を構えて言う。その目はこの状況を楽しんでいるようだった。

## 第6話「流浪と優しき暴君」 (後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスを待ちしています。

次回もお楽しみに。

## 第7話「正義と悪」

突然の乱入者、流浪により、連合軍側に混乱が現れ始めていた。

それは後方に陣を敷いていた曹操軍の元へも情報が伝わっていた。

「曹操様、連合軍本陣へ向け、董卓軍が攻めて来ています。至急、援軍をお願いします。」

袁紹の放った伝令兵が言った。

「敵兵力はどのくらいかしら？」

曹操は玉座に座って、足を組んで報告を聞き、特別関心無さそうに尋ねた。

「そ、それが・・・。」

伝令兵が言い淀む。

「華林様が聞いておられるのだ。早く答えぬか。」  
曹操の右隣にいた夏侯惇が威圧する。

「て、敵は一人だけです。」

「へ!?!」

伝令兵の言葉に曹操を除く武将達が驚く。

袁家も落ちたものだ、この場にいる誰もが思うなか、曹操だけは一切笑うことなく真剣な表情だった。

「それで、そいつの名前か特徴はないのかしら？」

「はっ、名前は分かっておりませんが・・・。」

伝令兵の口が動く。

「全身を黒で統一して、大鎌を持った男だそうです。」

「「!!」」

夏侯惇と夏侯淵の頬がピクリと動く。

そして、曹操は、

「フッフ、アハハ、面白すぎるわ!!」

笑っていた。それは心のそこから面白いというように。

「いいわ、援軍を出しましょう。この曹操、自ら出るわ。」  
そう言って、曹操は準備を始めるのだった。

それは同様に、別の諸侯にも伝わっていた。  
後の呉を作った孫策である。

「へえ、あの曹操が援軍を。」  
軽く驚いたように言う孫策。

「で、どうするのじゃ？ 儂らは。」  
少し年配の女性が聞く。

「私達はこれから手薄になった？ 水関を攻め落としましょう。」  
眼鏡をかけた女性、軍師の周瑜が言う。

「そうね、私としてはその男と戦ってみたかったのだけど、今は功績を挙げるのが先よね。」

「では、？ 水関を落とすぞ!!」

「応!!」

兵士達は高らかに拳を上げた。

「その男を止めろおおおお!!」  
兵士達の怒声が鳴り響く。

そんな中、流浪は舞っていた。

踊っていた。

歌っていた。

「劉備様をお守りしろおお!!」  
「援軍はまだなのか!!」

流浪は鎌を振るう。

「ぐへええっ!!」

数名の兵士達が吹き飛ばされる。

そしてまた鎌を振るう。

それは舞を見ているように優雅で。

踊るようにステップを踏み、

「敵はたったの一人だぞ!!」

歌うように導術を唱えていく。

「な、なんなんですよ!?!このザマわ!!」

反董卓連合の中心人物である女性、袁紹は苛立って地団太を踏んでいた。

「雄々しく、勇ましく、華麗に迎撃じゃなかったのかしら?北郷一刀。」

「いや、こんなはずではなかったんですけど。」

北郷一刀は頭をかきながら言う。

(こんなことは歴史上無かったはずだ。それにあの流浪とかいう男、いったい何者なんだ?)

北郷一刀は予期せぬ事態に対応するため頭をフル回転させるなか、唐突に袁紹が声を張り上げた。

「もういいですわ。この袁紹自ら、討ち取って差し上げますわ。」  
そう言って、自身の金髪縦ロールを翻して戦場へ行った。

「劉備さんですね。貴女に怨みはないですが、お相手して頂きます。」



流浪はバッサバッサと兵士をなぎ倒していき、蜀軍の本陣にまで来ていた。

それも流浪は大将を狙うためだけにここまでしたのである。

（大将たちを先に戦闘不能にすれば、士気も一気に下がりますからね。）

天真爛漫そうな女性、劉備は口を開く。

「あなたはどのように戦っているのですか？」

すでに劉備の周りにいた兵士達は全て倒れている。誰一人として死んではないがしばらくは動けないだろう。

「どうして、ですか。そうですね、約束を守るためですよ。」

「約束……。」

「ええ、笑うなら笑ってもいいですよ。約束しただけで、こんな敵地のご真ん中にたった一人でやってきて、愚の骨頂ですよね？ 変ですよね？ おかしいですよね？」

流浪は苦笑しながら言う。

「でもですね、それでも守りたいのですよ。私だけでなく恋さんも張遼さんも華雄さんも。それをほかの人間に共有してもらおうとは思いません。ですから、貴方達は貴方達なりの正義で俺達の悪を打ち壊してください。その代わり、俺は全力で貴方達『悪』を潰しますから。」

そう、悪か正義かなんて決めるのは自分しだい。

あいつは悪だ、なんて言っても、言われた人から見れば、そっちこ

そ悪だろ、と思うように。

だから自分こそ正義だと、流浪は自分を奮い立たせる。

「だから、ね。」

それは優しい目。まるで子供に言い聞かせるように。

でも、とても歪である。

歪な笑み。

「そうですか。ならこの劉備玄德、全力で生かして頂きます。」  
そう言って、自身の武器である宝剣、靖王伝家せいおうでんかを構える。

「お止めください、桃香様!!」

黒髪の綺麗な女性、関羽が言うが、その声は届かない。

彼女は今すぐにでも生きたいのだが、足を流浪の導術により、凍ら  
されていて身動きが取れないでいた。

同じように、意識がある者も身動きがとれずに嘆いていた。

そして、両者は動いた。

全ての人たちが、劉備の敗北を想像し、それは現実のものに．．

「え?」

ならなかった。

その場にいる全員がその光景を受け入れることができなかった。

援軍でやってきたばかりの曹操でさえ、その光景を見て信じられなかった。

何かが飛んできた。

それはヒュン、ヒュンと風を切り裂いていく。

それは数百の矢。矢の嵐。

それが全て、一箇所に集まっていく。

そして、そこにいた者がスローモーションのように倒れていく。

落ちていく。流浪が。

それは舞うように、

真っ赤な鮮血を散らしながら。

さながら桜が散るように。

紅の花びらが。

流浪が手放した鎌に映し出されていく。

「流浪さん!!」

目に涙を浮かべ、劉備は走る。

倒れていく中、流浪は痛みをこらえ、神聖な勝負を汚した者を見た。

観た。

視た。

そこには、高らかに笑う袁紹の姿があった。

## 第7話「正義と悪」 (後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第8話「記憶の魔女」

「おーほっほっほお！！我らに刃向かう不屈き者を討伐して差し上げましてよ。」

高らかに袁紹は笑いながら、自身の行動に酔いしれている。

「さあ、劉備、その逆賊にどどめをなさい。」

「そ、そんなあ……。」

劉備は涙をぬぐいながら言う。

「そんなことできませんよお……。」

「桃香様……。」

「桃香お姉ちゃん……。」

「劉備様……。」

関羽や張飛を始めとし、劉備軍の兵士達が劉備の気持ちを察して、唇を噛む。

彼女は優しすぎる。各国の諸侯から言わせれば甘すぎるぐらいに。

それでも、その優しさこそ、民が、関羽や張飛などの有能な武将が、彼女を慕う一番の要因になっている。

だからこそ、劉備の気持ちを察する彼女らは心臓が張り裂けるぐらい苦しかった。

「この私の言うことが聞けないと言うの。なら、この私がその逆賊を処刑します。」

それは正しい判断。

敵の、それもこれだけ被害をもたらした流浪を殺すことは至極当然のことだ。

「ま、待ってください。確かにこの人は、敵ですけど、それでも命までは……。」

必死に庇おうとする劉備の腕を誰かが掴んだ。

血で真っ赤に染められた腕で、流浪は弱い力だが握り締める。

戦場では袁紹の言うことこそ、正解。だから、それを一番知っている流浪はもういいよ、と目で訴えた。

その意志を受け取った劉備は再び涙をこぼして、崩れ落ちた。

流浪は自身を殺そうとする袁紹を視る。

彼女は刀を手に取り、息も絶え絶えの流浪を見下し、蔑む。

「さあ、死になさい。お馬鹿な逆賊さん。」

馬鹿にしたような口調で刀を振り下ろす。

そう、これで全ては終わりになる。

誰も介入できないし、しようもしない。

そう、人間達は。

「でも、私は手が出せるのよねえ〜♪」

どこからともなく声がした。

それは小学生低学年の女子が出すような女の子の声。

それと同時に不可思議なことが起こった。

袁紹の刀が流浪に触れる寸前、先端から灰のように散っていったのだ。

さらに流浪の腕に付いている腕輪の金色の宝玉が妖しく輝きだしたのだ。

「な、何なのですよ!？」

「何なのですよ、だって、おかしい、キャハハハハア!！」  
袁紹よりも甲高い笑い声が鳴り響く。

そして、その姿が現れた。



クリーム色に近い黄色のさらさらとした髪は肩の辺りまで伸びている。

フリフリの白のゴシッククロリータを着ているが、彼女にはあまり似合っておらず、不協和音を奏でている。

「私を袁紹と知っての狼藉ですの。」  
顔を真っ赤にして早口で言う袁紹。

「貴方のことなんか知らないわよ。というよりも知りたいとも思わないわ。変なドリル頭さん。」  
キャハハとお腹を抱えて笑い飛ばす少女。

それは凄惨な笑みだ。

そして、笑いは急に止まり、その表情は一気に冷めたものへと豹変した。

「あんま、調子にノンなよ。人間の分際で。」

地面を指差すと、どんという音と共に地面がへこんだ。

「お前もあれみたいになねり潰すぞ。」

「ひいっ!!」

その豹変振りに袁紹は腰を抜かしてしまう。

少女は周りを見渡し、自分に敵意を向けるものがないのを確認すると、倒れている流浪の元へ向かう。

「うん、傷はたくさんあるようだけど、まだ間に合いそうだわ。」  
そう言って、流浪を見て、あはっと少女は笑う。

それはまるで新しい玩具を買ってもらった子供のように。

「きゃああああ！！あなた面白い記憶を持ってるみたいねえ。貴方はまだ気づいてないみたいだけど。うんうん、美味しそうよ。これは一流料理人が作るディナーのようだわあ。この記憶は、ちよつぴり辛いわ。こっちは舌がとろけそうなくらい。あ、でもこっちもジューシーで美味しそう。うわあ、これはすごいわ。甘い甘い豪華なパフェのようね。」

その様子に一同は啞然とする。

先ほどのまでの醜悪な様子は無く、今では見た目相応の女の子にしか見えない。

「あ、でもこの記憶は・・・私好みで最高に醜悪じゃない。醜い、歪だわ。でも、私にとっての一番の宝物になりそうだわあ。あはあん。」

完全に自分の世界に入り込んでいたが、少女は劉備を見て、彼女に近づく。

「あなたなのね、彼を守ってくれたのは。最高に感謝するわ。本当にありがとう。貴方の名前は？」

少女は心のそこから感謝を述べる。興味の無い人間の名前を聞いたのが何よりの証拠である。

「わ、私は、姓は劉、名は備、字は玄德、真名は桃香です。」

「私の名前はシャロンよ。よろしくね、桃香。」

二人は軽い自己紹介を済まし、シャロンが流浪を肩に担ぐ。

真っ白なゴシッククロリータに血がついて赤く染め上げても、彼女は一切気にする様子は無い。

「さようなら、桃香、そしてお馬鹿なドリルさん。あ、それと、曹操とか言うお嬢さん、流浪をよろしくね。」  
そういつて、彼女は消えた。

文字通り、流浪共々消えた。

虎牢関へ向かう道中、張遼は前方に誰かがいるのを見つけた。

敵かと思うが、そいつの担いでいるものを見て、冷静さを失った。

「どうして、お前が、兄ちゃんがそんなに血まみれになってるんや。あんたはうちに生きて帰る言ったやんか。」

「死んでなんかいないわよ。早く治療してやんなさい。」  
その少女、シャロンは張遼目掛け、流浪を放り投げる。

「おっとお！」  
なんとかキャッチする張遼。

「ありがとな．．．。」

張遼がそう言った時には既にシャロンの姿は無かった。

「シャロン、遅かったじゃない？」

ここは『魔女』の作り出した幻想世界。

西洋風の家具が揃えられた室内には先に二人の『魔女』が来ていた。

「どうせ、寄り道でもしてたんじゃないの。」

アハハと栗色の髪の少女、リリスは笑う。

「で、収穫はあったの？」

無表情に尋ねる黒髪の女性、フロージュ卿。

「あんたたちが言ってた子に会ってきたのよ。それにしてもとんでもないのを外史に放っちゃったみたいね。うーん、とっても美味しかったわ。」

ぺろりと唇を舌尖で舐め、シャロンは言う。

「また、シャロンの悪い癖が出てきたようね。」

「さすがは記憶の魔女、シャロンⅡウィッチ・メモリア。羨ましい。だって退屈することは無いじゃない。」

「まあ、死にかけてたから助けてあげたけど、いいの？しっかり魔女がサポートしてあげなくて？」

「別にいいわよ。」

リリスはどうでもいい、というように言う。

「別に彼がこの外史で失敗しようともた別の外史に飛ばせばそれですむことよ。」

優雅に紅茶を飲みながら、彼女は言う。

「まあ、干渉するのは貴方達に任せるわ。フロージュ卿、シャロン。」

「あはっ。」

それは楽しそうと、笑みを零すシャロンと気が向いたらね、という感じのフロージュ卿がそこにいた。

第8話「記憶の魔女」(後書き)

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## 第9話「流浪の策」

流浪は衛生兵の治療により、何とか一命をとりとめたが、それでも、すぐには戦場に出るなど不可能になっていた。

だが、そんなことなどお構いなしに連合軍は流浪たちのいる虎牢関へ向かい行軍を行っていた。

「・・・ここは、守らないと。」

呂布は自分に言い聞かせるように言う。

ここを落とされれば、流浪は良くて敵方の捕虜、悪くて処刑されると呂布達はすでに予想していた。

だからこそ、一番いて欲しかった流浪は戦闘不能という状態に、兵士達の不安は徐々に高まっていた。

そんな、彼女らの下にある客人が来ていた。

「呂布様、表に、于吉と名乗る道士が面会を求めています。」

「・・・今、忙しい。邪魔。」

呂布は構ってる場合ではないと部下と目も合わせずに言う。

「そ、それが、その于吉という男、流浪殿の怪我を治しに来た、と言っておられます。」

部下のその言葉にピクリと反応する呂布。

「・・・それ、本当？」

「はい。」

「・・・ すぐに通してあげて。」

「これは、酷い怪我ですね。でも、大丈夫でしょう。私が煎じたこの薬を飲めば、数時間で動けるようになりますよ。」

于吉はそういつて紙袋を呂布に渡す。中には粉薬が3袋入っていた。

「2袋はおまけですよ。彼には役に立ってもらわないと困りますし。」  
「  
ククク、と微笑しながら言う。

「・・・ 何か、お礼がしたい。」

「いいですよ。私はこれから用がありますし。それでは。」  
すたすたと、帰っていく于吉。

「・・・ 流浪、飲んで。」

呂布は早速、もらった薬を流浪に飲ませるのであった。

それから数時間ほど経つと流浪は、先ほどまでの傷は嘘のように癒え、現在はぴんぴんとしている。

「おゝ、兄ちゃん、元気になっとるな。」  
「・・・ 良かった。」



「お、お前にはまだまだやってもらうことがあるから、へばってもらっては困るのですよ。」

思い思いの言葉を流浪にかけていく。

「そういえば、あの子は？」

「うん？ ああ、黄色の髪の子かいな、あっという間に消えたなあ。」

「そんなことより、敵さんを追い返す対策をたてへんとなあ……。」

「それなら……。」

流浪は？ 水関での敵方の情報を呂布たちに伝える。

その情報を元に陳宮が作戦を立てていく。

「いいや、それじゃあ、たぶん勝てないです。というより、この戦いで勝つのは非常に厳しい。むしろ兵の損害が多いに出るでしょうね。」

「んで、俺達は原点に返って考え直しましょう。俺達の目的、それは仲穎殿の命を守ること。おそらく、ここを突破され、俺達が『動けない状況』になれば、確実に彼女は殺されるでしょうね。」  
流浪は淡々と言っていく。

「そこで、こんな案はどうでしょうか？」

流浪は悪魔のような笑みを浮かべて言った。

『先陣をきるのはおそらく、袁紹・袁術の両軍で間違いありません。流浪さんに惨敗を決した彼女達が黙っているはずなのです。』  
陳宮の予想通り、先陣をきったのは袁紹・袁術の両軍であった。

迎え撃つのは兵を率いた呂布と張遼。

真紅の呂旗と紺碧の張旗を掲げ、出陣する。

黄巾の乱時に一人で黄巾党3万を撃退した呂布、数々の武勲を立てている張遼。

この二人にとって袁紹・袁術の烏合の衆な軍を倒すことなど造作も無いことだった。

「撤退しましょうよ。」

「美羽様、ここは撤退するのがよろしいかと。」

ボブカットの青い髪的女性、顔良と袁術の側近、張勲が言う。

「むむむ、悔しいですが撤退ですわ。」

「妾たちも撤退するのじゃ!!」

袁紹と袁紹の従姉妹である袁術も納得し、敗走し始める。

それを深追いせずに、二人は引き返してくる。

『おそらく、袁紹・袁術達が敗走したら、それに乗じて、名声を上げた孫策達が表れるが、相手にする必要は無い。』  
流浪の言ったとおりに、袁紹・袁術の敗走と入れ替わりに孫策の軍がやってくる。

張遼の軍がそれを牽制しつつ、その隙に呂布達が、流浪のいる、関所の入り口にやってくる。

「恋さん、この護符を体に張っている間は、姿が見えなくなります。貴女は一旦、敵に姿を見せて、護符を使って、劉備軍の近くまで行って下さい。」

「・・・分かった。指示通りにする。」

流浪の言葉にコクリと頷く呂布。

「陳宮さん、君も恋さんに付いて行ってください。」

「ねねでいいのです。」

「え？」

「だから、ねねと呼んでいいのです。流浪殿に真名を預けただけなのです。」

そっぽを向きながら、顔を茹蛸のように赤くして陳宮は言う。

「ねねさん、恋さんをよろしく願います。あ、それとこの札を2枚ずつ兵士達に渡してください。」

「任せるですよ。」

陳宮は胸を張って、呂布と共に移動を開始する。

「呂布たちが動いたぞ。」

「戦線を離脱してるのか？」

その様子を見た連合軍側の兵士が言う。

唯でさえ相手にしたくない呂布が、戦線を離脱してくれるのは、連合軍側にとっては、願ったり叶ったりなので、誰もそれを追うことはしない。

呂布は人目の無いところまでくると、兵士達に護符を配り、各々体に張っていく。

そして、劉備軍本陣へ向け、行軍を開始するのであった。

張遼は孫策軍を軽くいなしながら後退を続ける。

自身の得物、飛龍ひりゅうえんげつとう偃月刀を振りながら、張遼は思い出す。

『呂布さんたちが、戦線を離脱したら、それを見た、曹操軍が張遼さんのところに来ると思います。彼女は被害を少なく、優秀な将を取りたいようですから、邪魔な呂布さんがいなくなれば、きつと来ます。』

「そのとおりになつとるぞ、兄ちゃん。」

張遼は改めて流浪の凄さを知る。

曹操軍がこの機を見逃さん、というように猛突進で進軍してきていた。

「だったら、うちは兄ちゃん、あんたの作戦に乗らしてもらおうわあ。」

張遼は後退していたのを止め、一気に前進へと動きを変える。

突然の攻撃への転換に孫策軍は不意をつかれ、陣形が崩れていく。

歴戦の戦士たる張遼にとってこの好機を見逃す訳もなかった。

孫策の軍を突破し、曹操軍を引き付ける。

そして、ある程度、孫策軍と距離が取れたところで、動きを止めた。

『これは曹操さんじゃなきゃ駄目なんです。孫策さんは今は、袁術さんの客将、扱いですから。』

「うちらは魏に降る。その代わり、部下の命だけは助けてもらえんか？それに、あんさん達に耳寄りな情報も持ってきたんや。」  
張遼は武器を、手放し、それに続き、兵士達も武器を手放す。

「で、耳寄りな情報って何なのかしら？」

金髪少女、魏の王である曹操が、側近を2名つれて前に出てきた。

「その前に、部下の命は助けてくれるかどうか、それは曹操さん、あんた次第やなあ。」

「いいわ、部下といわず張遼、貴女の命も保障するわ。」

「それは助かるわ。じゃあ、うちからの伝言やで……。」

『あなたはこれを伝えてください。後は、俺が何とかしますから。』  
張遼の脳裏に頼もしい表情をした流浪が浮かび上がる。

「曹孟徳殿……。」

「あなたとの約束を果たすときが来たか、今こそ確認させてもらいますよ。」

それは張遼の口から出る別人の言葉。

「私が貴女に仕えるかどうか、いや、使えるかどうかを。」

その言葉の真の意味を知るのは、曹操、夏侯惇、夏侯淵の3人のみ。

「流浪……ね。」

「そや。」

「そんなわけ無いです。華林様。あの男は？水関で重傷を負ってい

たはず。これは罠かと。」

夏侯淵が曹操に耳打ちする。

そこに、慌てた伝令兵が走ってきた。

「呂布が兵を率いて劉備様の本陣付近に突然、現れました。」

続けざまに他の伝令兵が駆け込んで来る。

「虎牢関にまたしても、あの漆黒の男が一人で現れ、現在、孫策軍と交戦中ですが、・・・押されています。」

「決まり・・・ね。これは罠ではないわ。行くわよ!!」  
曹操の号令が響き渡った。

## 第10話「我が主になりし人」

「敵襲だあああああ！！！」

劉備軍の陣営に驚愕の声が響き渡り、そこは一気に、殺し合いの場になった。

襲撃を仕掛けたのは呂布。

彼女は流浪からもらった護符を劉備軍付近に行くと、剥がしたため、劉備軍からしてみれば突然の奇襲になったのだ。

もちろん、これもすべて流浪の出した作戦である。

『これは、劉備軍を相手にするのが一番いいんです。今、彼らは？  
水関での俺からの襲撃にあい、兵力を予想以上に消耗しています。』

呂布は次々と劉備軍の兵士を蹴散らしながら、本陣へ向かう。

流浪の言ったとおり、出てくる兵士は少なく、呂布にとっては楽に戦えていた。

「・・・誰？」

そんな時に、呂布はただならぬ気配を感じ後ろを振り向いた。

そこには、3人の女性がいた。

「我が名は関羽。字名は雲長。呂布奉先、覚悟！！」  
黒髪の綺麗な女性、青龍偃月刀せiryuうえんげつとうを構えた関羽が言う。

「鈴々は張飛と言うのだ。お前を成敗してやるのだ。」  
小さな子供、手には巨大な蛇矛を持ち、それを軽々と振り回しながら張飛が言う。

「我が名は趙雲、主様の命により、貴様を捕まえにきた。」  
他国からも「神槍」と噂される趙雲は、自身の得物である直刀槍を  
構えながら名乗る。

そして3人は同時に襲い掛かった。  
前から、右から、左からあらゆる方向から、呂布に敵意をぶつけて  
くる。

彼女達は本来ならこのような戦いを好まない。  
それでも3対1という状況に追い込まなければ、呂布奉先という武  
将に勝てないのだ。

否、それでも勝つことは限りなくゼロに近い。

「・・・邪魔、お前達に興味ない。」

呂布は3人の攻撃を乱雑に、だが、確実に押し返していく。

あるときは受けながし、あるときは勢いをそのまま相手に押し返し、  
隙あらば怒涛の攻撃を繰り返していく。

そして、呂布は機が熟すのを待つ。  
静かに。そして、そのときが来た。

『しかも、彼らは名声を何としてでもこの戦いで得たいはず。きつ  
とそれは、恋さん、貴女を討つことで得られると考えているはずで  
す。それと同時に・・・』

「・・・ねね。」

「はいなのです。総員やっちゃうのです。」



呂布に呼ばれ、陳宮が呂布が率いてきた兵士達に合図を送る。

兵士は赤の札と黄色の札を取り出し、赤の札を自分の体に張り、黄色の札を丸めて上空に向けて一斉に投げ捨てた。

呂布と陳宮も赤の札を体に張っていく。

その途端、上空で黄色の札は輝きだし、大きなドーム状の結界を作り出す。

それと同時に兵士達の体についていた赤の札も灰のように散っていく。

そしてドームに囲まれた範囲にいた劉備軍の兵士の身動きが取れなくなった。

金縛りにあったような感覚に襲われているのだ。

「何を．．．したのだ．．．!?」

趙雲が苦しげに聞く。

「貴方達に教える義理はないのですよ。」

『兵が不足している今、彼らにとっては恋さんほどの人材が仲間になることを何よりも望んでいるはず。それをうまく使えばいいんです。そしてその交渉相手は．．．』

「．．．そんなことより．．．天の御遣い．．．出して。」

『北郷一刀、天の御遣いです。』

全ては順調に計画通りに進んで行く。  
それも、ひとつの約束のために。

そして最後の舞台へと移り変わる。

「冥琳、どうかしてよ。あの男を!!」

「今考えているが、一人を相手にする策など……。」

孫策の軍は思わぬ事態に大混乱に陥っていた。

呂布も張遼もいなくなり、手薄になったはずの虎牢関を攻め落とし、手柄を立てようと意気揚々と突入したが、そこからがまずかった。

何と中には敵がいたのだ。

それでも彼らは訓練された兵士達。多少の人数ならどうとでもなるはずだった。

だが、いたのはたった一人、手には大鎌それも刃の部分は潰れているクズのような鎌だ。

その様子から兵士達は油断してしまった、でも後になってはここで油断しようがしまいが結果は変わらなかっただろう。

それほどに、その男、流浪は強かった。

無音で鎌を振るうときもあれば、漆黒の衣を揺らしながら舞うよう

に動き、兵士達を薙ぎ払う様子がある者は『死神』と呼び、刃が潰れているため、斬れることの無く、打撃のみのその様子は棍棒を振り回す『鬼』のようにも思われた。

そして、倒れていく兵士達は、死ぬことを許されず、体に与えられた痛みに呻いている。

その様子を見て兵達の士気は徐々に下がっていき、孫策軍の将、黄蓋が負傷したことで一気に崩壊した。

そして、今、流浪は孫策の前にまで来ていた。

「あなたは、なぜ、戦うのですか？」

唐突に流浪は聞いた。それは？水関での劉備の言葉である。

「何故って、私は袁術の客将だからよ。袁術の元に今はいるしかないからね。」

そう言って、少し長めの両刃剣、なんかいはおう南海霸王を構える。

「そうですか、もっと違った答えを期待していたのですけど。言わせてもらえば、あなたは袁術の元で納まりきれ器では無いはずだと俺は思いますよ。」

流浪は一切の隙を出さずに語っていく。

「貴女には、あなたの目には野心が見えます。貴女も覇道を歩んでいるようですね。平穩を手に入れるために必死に足掻いている。天下を取ろうと。本当に俺も仕えたいと思うほどに。」

「そう、じゃあ、うちで仕官してみない。貴方ほどの男だったら喜んで迎え……。」

「でも、貴女では役不足だ。所詮は自分の納めるところの、孫呉の平穩しか考えていない。それゆえに天下を取ることにそこまで執着が無い。それじゃあ、駄目ですよ。温い、温すぎる。」  
流浪は笑うことも無く表情一つ変えず、言葉をつむいでいく。

「生憎、俺の仕える相手は本物の覇道を歩む人なんです。貴方みたいに中途半端ではない。本気で天下を取りに行く人です。ですから、そんな中途半端な気持ちなら、最初から天下を狙うなんて止めて頂きたい。」

「もし、それでも、立ち塞がるというのなら、分かっていますね？」  
何の容赦も無く、叩き潰しますよ、二度と這い上がれないくらいに。そう目で孫策に訴える。

彼女は、只ならぬ威圧感に倒れそうになるのを必死でこらえる。

そして、流浪は瞳の奥に闘志を煮えたぎらせ、前を見る。

だが、その闘志は、孫策に向けられたものでは無かった。その後ろ、兵士達の合間を縫い、彼女はそこにいた。

にやりと流浪は笑う。

心のそこで、仲介してくれた張遼に感謝をする。

「いいですか、孫策さん。あなたが天下を取りに行くということは、こういうことなんですよ。」

流浪は孫策には目を向けず、唯、彼女を見る。

孫策の隣にいた周瑜が、見ておけ、と孫策に声を掛ける。

そして、彼女は堂々とした足取りで、流浪の前にやってきた。  
その風格はまるで王のよう。

「お待ちしていましたよ。曹操さん。」

「待たせて悪かったわね、流浪。」

二人は短い言葉を交わしていく。

たった、一言言葉を交わす間に、二人の間には只ならぬ気配で満ち溢れていた。空間がねじれんばかりにお互いのオーラが存在を誇張しあう。

刹那、弾けた。

ガキンと甲高い音が響いたと思うと、両者はすでにぶつかり合っており、打ち合っている。

流浪の刃の潰れた大鎌と、同じく曹操の得物、死神の持つような鎌とがぶつかり合い、火花が散る。

「面白い、面白いわ、流浪。」

「それはそれは、俺も待っていた甲斐がありました。」

二人は舞うように戦う。その様子に誰もが、目を奪われていた。

## 第10話「我が主になりし人」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回の更新はテスト勉強のため、遅れそうです。

## 第11話「BAD」

日も暮れ始め、空が茜色へと変わるころ。

流浪と曹操は未だに打ち合っていた。

その状況に誰しもが固唾を吞んで見守っている。あの、袁紹、袁術でさえ黙って見ている（もっとも袁紹は？水関での一件があり、恐怖で動けないでいる）。

「ハアハア、そろそろ疲れてきましたよ。鎌も重たい・・・。」

「そう、私はまだ大丈夫なんだけど。」

流浪は息を吐きながら、曹操は口ではそういうものも、動きが遅くなっていることは誰の目から見ても明らかだった。

それでも二人は動きを止めようとしなない。

唯ひたすらに、隙をうかがいながら鎌を振るっていく。

そして、どちらともなく一旦距離をとる。

「次で終わりにしませんか？」

「奇遇ね・・・私もそう思っていたところよ。」

二人は笑う。

お互いの目を見て、心の底から、笑う。

夕日で映し出された影二つ。

それらが動き出し、そして、交わった。

## 事後報告。

虎牢関での戦いは連合軍側の勝利で終わった。

そして、驚くべくことに、董卓軍ならびに連合軍に死者はほとんど出ておらず、三国時代の中で最も死者の少ない戦いとして後に知られることになった。

董卓軍の武将達だが、張遼は曹操から自分の体を汚さないというという条件を付けさせてもらい、無事に部下共々曹操軍に降った。

呂布と陳宮は、劉備軍に奇襲を掛けた後、天の御遣い、北郷一刀と交渉し、劉備軍に武官、文官として無事に降ることに成功する。

そして、流浪。彼は曹操との一騎打ちを得て、曹操を自分が仕える、使える相手だと確信し、曹操軍のもとに降った。



その夜、曹操軍陣営は盛大に宴を行っていた。  
その中には、昼に戦っていた張遼、流浪の2人の姿もあった。

本来なら、敵軍の将は捕虜の扱いになるのだが、曹操の計らいで張遼は他の兵士達と同様にすっかり馴染んでいた。

宴の中心では、夏侯惇を中心に女性の武官、文官達が、昼間の流浪と曹操の一騎打ちを語り合いながら盛り上がっている。

そんななか、流浪は少し離れた場所で、一人酒をちびちびと飲んでいた。

董卓のところで同じような宴を行ったのだが、どうもこの雰囲気にはなかなか慣れない流浪。

流浪は一人、夜空に浮かんだ三日月を見る。

三日月は自分と似ている、大事なものがぽっかりと欠けてしまった様なそんな感じがすると流浪は思った。

（じゃあ、俺は何が欠けているのだろうか。）  
自問自答を繰り返す。その答えは見つからない。

『きやああああ！！あなた面白い記憶を持ってるみたいねえ。』  
？水関で出会った少女の言葉を流浪は思い出す。

『私好みで最高に醜悪じゃない。醜い、歪だわ。』  
流浪は思う。

きっと、自分の失った記憶は決して良いものではないだろう。  
きっと、悪い方向しか向いていないだろう。

ハッピーエンドなんてありえない。バッドエンドだ。

そう、流浪は仮定する。

そう考えていると、記憶が蘇って来た。

そこはいつもの夢とは違っていた。

何というか空気がすごく淀んでいた。

目の前にはいつも出てくる少女が、太陽のように暖かな少女がいたのに。

『私は■■■なんて、大嫌い！！貴方も私のこと嫌いなんでしょ。だから、私を■■■で。そして、貴方は■■■になって。』

声を張り上げ、曹操さんに似た、金髪の少女は涙を零しながら叫ぶ。

『■■■■だよ、■■■・・・。』

そして、一瞬で視界は真っ赤になった。

「ねえ、流浪。」

流浪は背後から掛けられた声で、現実に戻された。

「どうかしましたか？曹操さん。」

流浪は出来るだけ笑顔を作り、悟られぬ様にする。

「貴方は宴には加わらないの？」

「どうも慣れなくて。」

苦笑しながら流浪は言う。

「もしかして宴とかやったことないのかしら？」

「仲頼殿のところで一度、後は記憶が無いですから、分かりませんが、多分、してないと思います。」

「どうして、そう思うの？」

「全然、懐かしくなかったんです。否、憧れていたんです。輪に入りたかったけど、入らせて貰えないような感じですかね。」

三日月を見ながら、選ぶ様に言葉を発していく。

「そう・・・。」

それ以上曹操は何も言わずに、流浪の隣に座る。

しばらく静寂が2人の間に訪れる。

そして、唐突に曹操が口を開いた。

「流浪、やりたい様にやっていいわよ。助きたい人がいるんですよ。私は立场上、無理だけど貴方は違う。私は何も知らないけど。」  
そう言って、曹操は夜空を見上げる。

助けたい相手が誰かを言わない、知らないふりをするのが、曹操の優しさだろう。

「だから、好きなようにやりなさい。その代わり、必ず成功させなさい。」

流浪は、曹操の表情は見えなかったが、はい、と一言言い、心に刻みつけた。

そんな様子を遠目から見ていたのであろう曹操軍の武官、文官達は、

彼らに聞こえない様にコソコソと話し始める。

「何を話しているんでしょう？」

「むむむ、ここからは聞こえん……。」「

曹操軍配下の少女、典章の言葉に、木陰から必死に様子を見ている武官、文官の一人の夏侯惇がしかめっ面をしながら言う。

「それにしてもいい雰囲気だね。」

「そのまま、押し倒すんや、兄ちゃん。」

その様子を見ていた小柄な少女、許緒がポロリと本音を言ってしまう、それに続けて、軽く酔っている張遼が煽り始める。

「華琳様があんなのに興味があるわけ無いわ。」

猫耳フードの女性がそっぽを向いて言うが、その隣にいる夏侯惇は張遼の言葉を真に受けて、慌て始めている。というよりも発狂し始めている。

「まあ、落ち着いてください。」

「姉者、可愛い……。」「

典章が小柄な体格なのに、自分よりも大きな夏侯惇の両腕を取り、抑えている。

その様子を遠目から至福の表情で見ている夏侯淵。

「そんなに騒いでたら、気づかれちゃうよ。」

許緒が慌てながら言うが、時すでに遅し。

「貴方達、何してるのかしら？」

ヒートアップした彼女らの背後から声が掛けられる。

「か、華琳様・・・！！」

「駄目じゃない、聞き耳なんてたてたら。」

びくりと肩を震わす曹操の配下たちと、ニヤニヤと笑う曹操。

「・・・？」

更にその後ろには、いまいち事態が掴めていない流浪もいた。

「も、申し訳ありません。」

必死に頭を下げる彼女らは、事の原因であるのに、何も理解していない流浪にジト目を向ける。

「何か、しましたか？」

その視線に耐え切れず、流浪は彼女らのうちの一人、猫耳フードの女性に尋ねるが、相手が悪かった。

「何よ、気安く話しかけないで、病気になったらどうしてくれるのよ。」

毒舌だった。涙目になる流浪。意外と打たれ弱いのである。

後に、流浪は曹操から聞くのだが、彼女は曹操軍一の男嫌い、荀？であった。

そして、この二人の出会いが、後の赤壁の戦いを大きく変えることになるのはこの時、誰も予想できなかった。

## 第11話「BAD」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第12話「守ること」

反董卓連合軍は虎牢関での戦いを終え、董卓軍の有能な将達が捕虜となる。

そして、勢いに乗った反董卓連合軍、特に袁紹、袁術の軍は我先に手柄を立てん、とばかりに董卓の本拠地、洛陽へと強行を繰り返していた。

それは、洛陽にいる董卓達の耳にも入っていた。

「もう、ここは危ない。月、逃げるよ。」

「でも……。」

洛陽の城内、玉座の間には豪勢な衣服に身を包んだ少女、董卓と眼鏡をかけた女性、賈馮が壇上で言い争っていた。

そんな、彼女達を、特に董卓を心配そうに見つめている、董卓軍の残りの兵士達が全員集まって見守っていた。

「でも……彼らは。」

董卓は泣きそうな表情で兵士一人ひとりの顔を見る。

それに釣られ、何人かの兵士も涙目になるが、兵士達の一人、おそらくリーダーであろう男が前に出て言う。

「私たちのことは心配しないでください。彼らの進軍を止めることはできないでしょうが、董卓様が逃げる時間ぐらいいは、我らの命を代えてでも稼いで見せます。」

そう言って、男はすがすがしいほど笑った。兵士達も同じように笑う。自身の主を少しでも安心させようと。

「彼らの命を無駄にしたいの、月！！あなたが、捕まったら全部、終わりなんだよ。華雄將軍も、霞も恋もねねも・・・それに巻き込ませちゃった流浪の思いも全て踏みにじることになるんだから。」  
「！！」

びくりと董卓の肩が震える。

『皆さんは仲穎殿に生きてもらいたいから戦うんです。だから、貴女は何が何でも生き残ってください。貴女が生き残れば勝ち、貴女が死ねば負け。最初からそういう試合<sup>ゲーム</sup>なのですよ。』  
この間、流浪に言われた言葉が頭を駆け巡る。

しばしの沈黙の後、董卓は口を開いた。

「分かったわ、詠ちゃん。」

そう言って、董卓は洛陽から脱出するために、玉座の間を後にする。

決意をした董卓の小さな後姿は、兵士達にとってどんなものよりも大きな背中に見えた。

そして、彼らも自身の主を守るため、動き始めた。

袁紹らが、洛陽への突撃を開始する少し前、流浪は一足先に洛陽へと入っていた。

彼の主、曹操も流浪の行為には目を瞑っていてくれている。

流浪は、感謝しつつ、自身の目的を果たすため屋根の上を走っていた。



日はすでに沈んでおり、空には夜空が広がっている。満月も浮かび上がっている。

「あ、いた。」

流浪は屋根の上から、目的の人物らを見つける。

だが、彼女らの周りには見たことの無い白装束の集団もいた。

自分とは対の白。流浪は不吉な予感しかなかった。

流浪はかつて、呂布に助けられて洛陽に来ていた時に、民から董卓達の様子がおかしくなったのは、白装束の集団が現れてからだと小耳に挟んでいた。

流浪は警戒しつつ、いつでも飛び出せるように準備をしながら近づいていく。

そして、流浪は飛び出した。

白装束の一人が、懷から取り出した短剣を董卓へ突き刺そうとしたのだ。

よくある話。一つの事件を丸々収めるには、首謀者一人の命を断てばそれで済んでしまう。

だから、彼女はその生贄として選ばれた。ただ、それだけのこと。

だけれども、流浪は『約束』をしたから動く。

「流浪……さん……？」

無理やり彼女達の間に入り込み、鎌を振るおうとするが、董卓とも

距離が近すぎて、思うように鎌を動かせない。

そして、その短剣は流浪へ捻じ込まれた。本来なら腹を刺されていたが、とっさに左腕を出し、そこに突き刺さる。

突然の介入者に、白装束の男は驚いた隙を、流浪は見逃さず、無理やり、膝蹴りを男の鳩尾に入れる。

男の手の力が弱ると同時に、董卓を賈馱の元に突き飛ばし、鎌を振るっていく。

ものの数秒で白装束の男達は流浪に片付けられ、くぐもった声を上げ、地面に倒れていた。

「大丈夫なの、あんた!？」

「・・・平気ですよ。このくらい。」

そう言って、流浪は無造作に短剣を引き抜く。

血が溢れ出てくるが、流浪に気にする様子はない。

「あのお・・・。」

董卓はおずおずと高そうな綺麗な布を取り出し、流浪の傷口に巻いていく。

「それ、高いのではないですか？仲穎殿。」

「いえ、気にしないで・・・。」

2人とも申し訳なさそうにする。

傷口にしっかり布を巻きつけた後、流浪は白装束の男達を近くの本に縛りつける。

「それでは、仲穎殿行きでしょうか？」

「・・・はい。」

流浪は手を差し出し、董卓も自分の小さい手を差し出そうとするが、  
「・・・っ!!」

流浪は只ならぬ気配を感じ、とっさに董卓を庇うように董卓に背を向ける。

「・・・劉備さん。」

「流浪さん・・・。」

そこには、劉備と、北郷一刀、それに陳宮と呂布の4人がいた。

「恋さん・・・ねねちゃん・・・。」

董卓は2人が無事なのを見て、安堵の声を漏らす。

「約束は必ず守りますから。それよりも・・・。」  
キッと流浪は北郷一刀の目を一直線に見る。

「あなたは何をしにここに来たんですか？」  
流浪は覇気を出して言う。

「俺達に董卓さんたちを預からせてもらえないか？」  
北郷一刀は真剣な眼差しで言う。

「それは、貴方方で仲穎殿を処刑して手柄を立てたいと？ それとも彼女を助けたいと？」

「どちらに思ってもらってもかまわない。」

2人は一切表情を崩すことなく、話す。

「そうですか。」

はぁ・・・と軽い溜息を流浪は漏らし、怪我をした左腕で董卓を後ろに追いやる。

董卓は流浪のその行為に素直に従い、これから起こることの邪魔にならないように距離をとる。

流浪は彼の本心を探ろうとして、途中で止める。

（面倒です。）

前者であろうが後者であろうが、彼にその資格があるか見極めれば良いだけ。ただそれだけだと流浪は思う。

「貴方に恨みはありませんが、約束のため、そして何より俺を信じてくださった彼女のため、貴方にはここで散ってもらいます。」

流浪は鎌を右手で持ち、左から右斜め上へと振り上げる。

それに伴い、真っ白な包帯が宙を舞い、その大鎌が禍々しく輝く。

流浪と一刀は、その間も唯ひたすらに目を離さない。

刹那、流浪が動いた。

ドンと、地面を蹴り上げ、一気に一刀の懷へと飛び込み、鎌の柄の部分で鳩尾へ打ち込む。

「がっ！！」

一刀は息を吐き、動きが止まった。

それに追い討ちを掛けるように流浪は足で蹴り飛ばし、5mほど一刀は吹き飛んでいく。

「その程度で・・・。」

流浪は冷酷な瞳を倒れている一刀に向けて言う。

「その程度で・・・誰かを守れるとでも思っているのですか？」  
流浪は鎌を握る力を強めて言う。

「誰かを守るということが、どれほど難しいのか貴方は分かっているのですか？」

かつて、泣いていた少女がいた。流浪の目の前で泣いていた金髪の少女。

「それでも、まだ助けようとするのですか？」

彼女を助けてあげられなかったんだろうと流浪は思う。

「・・・ああ、助けるに決まってる。」

がはつと口から血を吐きながらも、起き上がろうとする北郷一刀がそこにいた。

「・・・あなたが何と言おうと、董卓さんを助ける。彼女はきつと何も悪くは無いはずだから。」

一刀はゆっくりとふらふらとなりながらも起き上がる。

「だから、そこをどいてください。流浪殿!!」

流れが一気に変わった。そう流浪は感じた。

「フッ・・・。」

流浪は笑った。思わず口から零れた笑み。

「俺の負けです。後は仲頼殿の御意志にお任せします。それでは、俺はまだやることがあるので。」

流浪は自身の得物である大鎌に包帯を巻きながら言う。

「・・・やることって？」

「誰かが・・・誰かが止めないといけないでしょ。」

劉備の疑問に流浪は即答する。

「劉備さんがたが、ここから逃げるのには時間が必要ですよね。だから、少し時間を稼いできます。」

それは至極簡単なこと。今、洛陽へと入ろうとしている袁紹、袁術の軍を止めるということ。

それもたった一人で。

「そんな無茶です。」

劉備も、一刀も呂布も陳宮も賈馱も口を揃えて止めさせようと流浪に言う。

そんななか、董卓、唯一人は何も言わずゆっくりとした足取りで流浪の前まで歩いていく。

「あそこには・・・私の兵士も・・・いるはずです。彼らも助けてあげてください。」

「分かっています。それも『約束』ですから。」

流浪は優しく言う。

「私の名は董卓、真名は月ゆえ。貴方に真名を預けます。この意味が分かりますね？」

董卓は優しく笑う。記憶を失っている流浪にとってはその意味は分からないかもしれない。

それでも、董卓は言葉を紡いでいく。

「絶対に生きて、いつか私に顔を見せに来てください。」

そう言って、董卓は流浪の肩を掴み、背伸びをして小さな体を伸ばした。

そして、董卓は流浪の顔に自分の顔を寄せる。

月明かりで移された彼らの影が重なった。

「これは、私からのささやかなお礼です。」  
頬を赤く染め董卓は照れ笑いを浮かべ言う。

流浪は何も言わずに、彼女に背を向け、歩き出す。  
董卓は離れていく流浪の背中を見つめながら思う。

—ありがとう、と。

## 第12話「守るということ」 (後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。



### 第13話「召喚の魔女」

洛陽の城門から兵士達は外の様子を見ていた。

連合軍の袁紹・袁術を筆頭に、数千の兵達が、怒涛の勢いで洛陽へと迫ってきていた。

だが、彼ら、董卓軍の兵士の顔色に畏怖の表情は浮かんでいなかった。

むしろ、決戦に挑む武将のような勇ましさをさえ見えている。

なぜなら、彼らは主である董卓を守ろうとしているからだ。  
たとえ自分の命を落としても、彼らには彼女を守りたい理由があった。

あるものは、彼女に助けられ、

あるものは、彼女に励まされ、

あるものは、彼女に憧れていた。

小さくて儂いけれど、誰よりも優しくて綺麗な笑顔の少女の姿に。

ほんの少しのことだけど、それが兵士達がここにいる理由であり、董卓という人物の人間性を表している何よりの証である。

だから、彼らはどんな敵が現れようとも逃げずに戦うつもりだった。  
自分の命が燃え尽きる最後まで、格好悪くても抗うつもりだった。

でも、その思いは一人の来訪者により、一瞬で碎け散った。

董卓軍の兵士であるなら誰もが知っている、その恐ろしさを。

黄巾の乱で、自分達の知る最強の将である呂布を、いとも簡単に打ち破った彼を。

そして、数千の軍勢を誰一人として寄せ付けなかったその男を。

漆黒の衣に身を包んだ、黒き死神を。

今は連合軍に降ったはずの男、流浪を。

「この人数は・・・多いですね。」

流浪は周囲を、兵達を見渡し開口一番に言った。

兵士達はその言葉に一瞬戸惑った。

目の前の男は、数千の大軍を前にしても、一步も引かなかった人だぞ。

なぜ、この人が、たったこれだけの人数を多いと？

何かがおかしい。

彼らのその思考は、雨も降っていないのに、突然鳴り響いた雷が落ちるような音と、

「キャハハハハッ！！！！！！！！！！」

「クスクスクス・・・。」

甲高い2種類の女の笑い声でかき消された。

「おやつがいっぱあいだわあ。」

「……。」

流浪の隣にはいつの間にか、二人の女性が立っていた。

一人はクリーム色に近い金髪は肩の辺りまで伸びており、身に着けているフリフリの白のゴシッククロリータが、彼女にはあまり似合っていない。不協和音を奏でている。

そんなことはまったく気にしていないのか、彼女は笑い続ける。記憶の魔女、シャロンⅡウィッチ・メモリア。魔女でありながら、退屈することの無い存在。

そしてもう一人、

「……退屈。」

黒髪を腰のあたりまで伸ばしたストレートヘアを右手で触りながら、彼女はだるそうにする。

その姿は漆黒のドレスと合わさって、より怪しげにだが、芸術品のような美しさも出しており、見るものを惹きつけていた。

彼女は更に深い溜息をつき、流浪に目を向ける。

召喚の魔女、フロージュ卿。シャロンと同じ魔女であり、彼女とは対極の印象を与える女性。

「誰ですか？」

流浪は、額に嫌な汗を浮かべて言う。

「私を忘れちゃったのお？ 命を助けてあげたのに。」  
ぷくうと頬を膨らませるシャロン。

「いえ、貴女は？水関のときのかたですよね？では、こちらのかたは？」

「・・・フロージュ。ウィッチⅡマリア・フロージュよ。・・・フロージュって言うのはこの世界で言う字みたいなものね。」  
流浪の質問にそっぽを向いて、淡々と述べていくフロージュ。

「それよりも、」

フロージュは兵士達を見渡して言う。

「何かすることはいいのかしら？」

「そうだった。フロージュ卿なら、ここにいる人間を飛ばしたり、皆殺しにしたり何でもやってのけるわよ。」

フロージュの言葉に、被せるように勢いよくシャロンが言う。

「何でもできるわよ。」

「なら、彼らをこの戦いに巻き込まれない場所に移動させてくれませんか？」

「お安い御用ね。」

ぱちんと指を鳴らすと、あっという間に兵士達の姿が消えていた。

文字通り、消えた。見えなくなった。気配が無くなった。

そして、シャロンの姿も消えていた。

文字通り、消えた。見えなくなった。気配が無くなった。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・ 失敗ね。」

「失敗ね、じゃないだろっ!? あの娘はどこいったんだよ!? 兵士は大丈夫なのか!？」

頬に手を当てて興味なさげに言うフロージュに、思わず我を忘れてツッコむ流浪。

「兵士はちゃんとしたわ。」

「そうですか。」

ホッとする流浪。

「でも、シャロンは月の辺りまで飛ばしておいたわ。」

「偶然飛ばしたんだよね?」

「いいえ、故意に。だって、彼女うるさいし。」

くすくすと笑うフロージュ。

「私のことを馬鹿にするのよ。ガキンちよのくせに。」

見た目は対して、シャロンと変わらないのに、忌々しそうに愚痴る。

「でも、流浪。貴方は心配しなくていいわ。あの娘は、あのくらいなんともないはずだから。3日ぐらいしたら、平気な顔して戻ってくるわよ。」

そう言って、彼女は視線を洛陽に迫り来る大軍に向ける。

「それよりも、貴方一人であの人数を抑えきれるのかしら?」  
妖艶な笑みを浮かべ彼女は話しかける。

「将はたいしたこと無いようだけど兵士達は一応訓練されているのよ。」

彼女は手を差し伸べる。

「手を貸しましょうか？」

甘美な誘惑を流浪へ行う。

そして、それを言われた流浪は、一切迷うことなく、フロージュの手を取った。

「貴方にプライドは無いの？」

「俺のプライド一つで、仲頼殿の命を助けられるなら、安いですから。それに……。」

流浪は少し間を空けて言う。

「無駄に傷が増えるのは御免ですからね、それで誰かが悲しむ顔は見たくありませんし。」

流浪は、左手に巻かれている布を見る。

あの少女の悲しむ顔は見たくなかった。

そして、同じ様に、曹操も悲しむのだろうか。もし、悲しむ様ならそんなもの見たいわけが無い。

だから、そんなプライドなんて捨て去る。

「そう……。」

素っ気ない顔して、呟く。

「ならいいわ。じゃあ、始めるから。」

フロージュは三步前に、流浪に自分の背中を見せる形になる。

「大丈夫なのか？」

流浪は心配になり声を掛ける。

目の前の少女は少し大人っぽい雰囲気醸し出しているが、それでも子供にしか見えなかった。

「私をなめないで欲しいわ。それでも、私は召喚の魔女なのよ。それに……。」

「私は貴方を助けに来たのよ。こう言うのを貴方達の言葉でなんて言うのだった。」

フロージュは少し考える様に視線を上空に移し、また、元に戻る。

「思い出したわ。」

にこりと魔女らしい笑みを浮かべる。

「守りたいものがあるやつは強い、でしょ。」  
そう言って、彼女は魔法を使った。

数千の魔方陣が地面に、上空に側面に、ありとあらゆる場所から現れる。

そこから、現れるのは、執事服に身を包んだ細身の男たち。全員の首には首輪がついており、目には生気が無い。

手には錆び付いた剣と、同じく錆びた盾を身に付けている。

それなのに、彼らを弱そうとは流浪は思わなかった。否、思えなか

った。

焦点の合わない目は、不気味であり、何より、怖い。

そして、執事服の男たちは迎撃を開始した。



### 第13話「召喚の魔女」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第14話「真名」

「流浪、どう凄いでしょう。」

「ああ。」

フロージュはにやりと凄惨な笑みを浮かべて、後ろにいる流浪に言う。

「まだ、城門は突破できないのかよ!？」

「文ちゃん、そんなこといったってこいつらが・・・。」

城門前では、袁紹軍がフロージュの作り出した執事服の集団と乱戦を繰り広げている。

「何度斬っても死なないなんて、反則すぎるぜっ・・・。」

憎々しげに言う、袁紹軍の将、文醜。

そんな彼女らを、城壁の上から流浪は見て思う。

正確には蘇ってなどいない。純粹に、数を増しているだけだ。

死んでいくスピードよりも召喚されていくほうが早い。そのため、蘇って見えるだけなのだ。

そんなことよりも、何より驚くべきなのは、彼らは死を一切恐れていないことにあった。

表情一つ変えず、ただ相手の命を奪うため攻撃のみを繰り返す人形の様。

戦う理由もなければ、命を捨て去る理由もないのに、簡単に命を投げ出していく。

いや、そもそも彼らに命という概念があるのだろうか? そう思うほ

ど、目の前の状況は流浪にとって、見るに見かねないものだった。

そして、それは彼らが人間ではないことの何よりの証明であり、やはり、目の前の少女が魔女であり、化け物であることの何よりの真実であることを、流浪は実感させられていた。

「もう、いいかしら？ 十分、時間は稼いだと思うけど。それに……」

フロージュは気怠げに、袁紹軍の更に後ろを指して言う。

「あなたの主も、来てるみたいだし。大方、袁紹にでも援軍として呼ばれたのね。良いの？ このままここに参加させちゃうと、被害も出るし、何より、暴走した袁紹たちとともに、洛陽に入れば、民からの評判は下がっちゃうけど。」

「それは困る。」

「そっ。」

ぱちんとフロージュは指を鳴らし、執事たちを消す。

その途端、障害がなくなった袁紹・袁術たちは一瞬、動揺したが、すぐに立ち直り、洛陽内に入っていく。

「ふう〜。まあ、こういうことがあったらいつでも助けてあげる。流浪、あんたのもってる腕輪……その宝玉に念じれば私たちを呼べるから。」

「金色はシャロンを、黒色は私を呼び出せるから。それと、栗色はあまり使わないことをお勧めするわ。あんた、死んじゃうかもしれないし……。そうね、代償はあなたの記憶を見せてもらおうかしら。記憶が消えたりすることはないから心配しないでいいわよ……」

。」「  
さあ、主のもとへ帰りなさい、と流浪は言われ、少し意識が飛び、  
気が付いたら彼女の姿はなかった。

その後、流浪は曹操軍の陣営のもとへ来ていた。

援軍として向かっていた軍は曹操が袁紹たちが洛陽に入っただけを見て切り上げさせていた。

それから数時間後、袁紹たちの暴走も静まり、というよりも劉備軍の説得の甲斐あって、静まり、町の復興作業が至急行われた。

そしてその夜、流浪は、曹操に呼び出されていた。

曹操の前に来た流浪だが、お互い何も言わず、またほかの将たちもいないため、沈黙が流れていた。

先に口を開いたのは曹操だった。

「私は成功させなさいと言ったはずよね。」

「申し訳ありません、失敗してしまいました。」

流浪は頭を下げて言う。董卓は劉備軍によって討ち取られたことになっている。

おそらくは、本郷一刀の考えだろうとあの場にいた流浪は分かっていた。

いたからこそ、この場で真実を言わない。

「そう……。」

「でも……。」

曹操の眉間に皺がより、鋭い目つきになるが、流浪が声を発した。

「俺は後悔していません。全力を尽くしました。ですので、どのように処罰していただいてもかまいません。」  
はつきりと、そう言った。

「いいわ、ならあなたにはたっぷりとお仕置きをしなくちゃねえ。城に帰ったらやってもらうことがたくさんあるから、期待して待っているさい。」

「……はい。」

曹操は冷徹な笑みを浮かべて言い放つ。

「それから、あなたにはこれから罰として私の親衛隊として働いてもらうから。」

「え？」

曹操の突然の言葉に驚きを隠せないでいる流浪。

「私に何かあったら、それは親衛隊であるあなたの責任ってことよ。最高の罰でしょ。それに、私はあなたのことを気に入っているのよ。ちゃんと流浪を使いこなして見せるから、目を見開いてよく見てください。」

柔らかな笑みを浮かべていう。それはお日様のように柔らかで。

「それと、流浪、あなたには私の真名を預けるわ。私の真名は華琳<sup>かりん</sup>。あなたの真名を聞かせてくれるかしら？」

ひざまずき  
跪いている流浪の前に行き、手を差し伸べる。

「分かりました。孟徳殿。」

「華琳、それが私の真名なんだけど、もしかして呼べないのかしら？」

意地の悪い、小悪魔のような表情を浮かべ、曹操は言う。

「分かりました。華琳。我が名は流浪。真名は隼人<sup>はやと</sup>。親衛隊として、誠心誠意頑張っていきたいと思えます。」

そう言って、流浪は差し出された手に自分の手を重ねる。

その手は、お日様のように暖かった。

## 第14話「真名」(後書き)

いかがでしたか？

今回は少し短めです。

感想・アドバイスお待ちしております。  
次回もお楽しみに。

## 第15話「負の連鎖」

「隼人、袁術の下へ、偵察に行きなさい。」

唐突に流浪は曹操に言われた。

洛陽での復興作業を終えた一同は、魏国内へと帰還したその日のことだった。

曹操の自室に呼び出された流浪は、大量の路銀を渡されていた。

「まあ、偵察といっても、正確には客将である孫策軍の様子を探ってほしいってことよ。」

そう言って、曹操は現状を説明する。

先の反董卓連合の影響で、孫策の旧臣たちが続々と集まってきており、袁術の下から独立するのも時間の問題である。

そして、最近では英雄と謳われる孫策。彼女の力量並びに将や兵士の質を確かめるのが目的だという。

「なら、俺ではなく、工作員を入れれば済むと思いますよ。」

「それだけが目的なら、隼人に頼んだりしないわ。あなた、自分の部隊を持ってないでしょ。」

曹操は流浪を指さし言う。

「ええ、俺は兵を率いるのはどうも苦手ですし。」

「そうも言ってられないのよ。帝の力がほとんどなくなった今、乱世になることは必須。あなたも少しは兵を使えるようになってくれないと今後困るのよ。だから、隼人が少しでも自分の理想の隊を作るために人材を引き抜いてきなさい。そのためのお金よ。」



「それに、袁術の土地は対して、管理も出来ていないようだから不満を募らせた民も多い。それにあそこには奴隷商による売買もあるから、きつと隠れた逸材もいるはずよ。」

「奴隷……。」

曹操の奴隷という言葉に、反応して項垂れてしまう流浪。

「あら、どうしたの。奴隷に何かあったの？」

「いえ、少し気になっただけです……。」

流浪はそう言って、顔をそむける。何故だろう、何か心が痛むものがあつたと流浪は感じる。

「では、行ってきます。」

そう言って、流浪は部屋を後にし、袁術の収める土地、揚州へと向かった。

「これは……ひどい。」

流浪は思わず目を瞑りたくなった。

刑州に入って訪れた最初の村。そこは荒れ果てていた。

賊の襲撃にあつたのか、門はボロボロになっており、本来の役割を果たせないでいた。

さらに中に入ってみると、家もボロボロ、焼けた家もあり、その柱に背中を預けるように、子供や大人、老人たちが、座り込んでいた。

その人たちの目には精気が宿っておらず、町を歩く流浪を虚ろな瞳で見ている。

さらに2、3先の村も同様だった。

本当に、曹操の言葉通り、管理されていなかった。管理されている形跡がなかった。

そんな街に、商人たちもいるはずがなく、村人たちは貧困に喘いでいる。

後に流浪は知ることになるが、袁術は重税を重ねていたため、袁術のお膝元以外は似たような状況であった。

そして、そんな村々を渡り歩くこと、数日、ようやく袁術の城がある城下町に流浪は辿り着いた。

袁術のお膝元ということもあり、町自体は今までのことが嘘のように活気に溢れていた。

大陸全土から集まった行商人たちは、各地の食材や衣服などを売りさばき、それを買う人々にも笑顔があふれていた。

余談だが、流浪が好きで好きでたまらない巫女服は売っておらず、人知れずがっかりしていたのは言わずもがなお察ししてほしい。

そんな流浪だが、一応偵察に来たのでしっかりとその任務はこなしていく。

町には数名の警備隊の兵たちが見回りをしているが、どの兵も業務に集中しているようではないようだった。ある者は喋りながら、ある者はサボっていたからだ。

そして、城内にも侵入し、ある程度、孫策軍の情報を集めたので、

宿へ行こうと道を歩いていると、

「ま、待ってください。」

「何なのだ！？この儂に逆らうのか！！」

ドンと、気の弱そうな男が、ガタイのいい男たちに蹴り飛ばされる。

そのガタイのいい男たちに守られるように、長い髭を生やした貴族のような中年男性が、倒れている男を見下していた。

「貧乏人風情が儂に逆らいおって。」

「申し訳ありません。それでも、娘を、娘を返していただけませんでしょうか。」

必死に気の弱そうな男性は頭を地面にこすり付け懇願する。

「私にできることなら何でもします。ですから、娘だけは……。」

「ええい、うるさいやつだ。やってしまえ。」

貴族のような男は用心棒であろう男たちに指示を送り、男たちは、気の弱そうな男性を一方的に殴る蹴る。

「何があっただんですか？」

流浪はたまたま近くにいた、行商人に声をかける。

「ああ、あんた見たところ旅の人のようだねえ。そうやなあ、ここに来るまでに幾つかの村には寄ったか？」

「まあ。」

「酷い有様だっただろ。それでだな、見ての通り、国からは復興のお金は来ない。おかげで村の人間は皆生きていくためのお金も無い。そんなときにや、奴隷商がやってきたのは。」

行商人は目を瞑り、思い出すように語っていく。

「彼らは初めのうちは村の若い女や子供らをお金で買い取ったんや。俺たち商人からしたら安いお金で買い取ってみたいやけど、村人たちにとっては喉から手が出るほど欲しかったんやろうな。」

「そして、奴隷商はここにきて売りさばいた。ここにはもともと金持ちが多いからな。高値でも飛ぶように売れた。だが、この流れに目を付けた人間もいたのさ。」

そう言って、商人は悲しそうな目をする。

「同じように生きることにも困難な民だ。もちろん、彼らには買い取る資金を持ち合わせていない。」

「人攫いですか。」

「ああ、自分の生活を守るため他人の生活を奪い取る。それが、今の現実であり、袁術様も見えて見ぬふりをしている。時々、孫策様らが、警備してくれるが、それでも……。」

そう言って、商人は、地面にうずくまってすすり泣く男に目を向ける。

「きつとあの男は、後者だろう。娘を買い取ってやれる金も持たないから、ああしているだろうが、おそらくは二度と娘の姿を拝めない。まあ、旅の人も攫われないように気を付けるんだな。」

そう言って、商人は立ち去っていく。

残された流浪は、心の中に湧き出てきた、怒りとも、悲しみともいえないモヤモヤに心が押しつぶされそうになった。

## 第15話「負の連鎖」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第16話「その手を握る者は」

次の日、流浪は朝早く起きると、外出の支度をすぐに済ませ、町へ出た。

昨日の夜、考えに考えた結果の行動である。

流浪は町の様々な店や行きかう人々には目も向けず、黙々と進んでいく。

そして、その足が止まった。

流浪はそこへ目を向ける。

そこは、店であふれている大通りから、離れた細い裏道、人気のない路地裏にある一軒の店だった。

少し怪しげな雰囲気を漂わせた店である。

そこへ、流浪は入っていく。

「・・・っ!!」

流浪はその光景を見て、思わず声を上げそうになる。

そこには、生まれたままの姿で座っている女性たちがいた。  
小さな子供から20代の女性達が中心に商品のように並べられている。

否、商品のようにではなく、商品として売られているのだ。

彼女らの首には値段が書かれた紙がひもでぶら下げられていた。

奴隷。

さらに、彼女らの首には首輪がついており、そこから延びる鎖が、近くの柱に巻きつけられており、脱走できないようになっていた。

そんなことをせずとも彼女らは逃げることはないだろう。

村でみた村人たちの目よりも何十倍も暗い闇を見るようなその瞳は、虚ろで焦点があっていない。

そして何より、彼女たちは陽の当たる場所には出れないだろうと流浪は思った。それほどに彼女たちの状態は酷いものだった。

「おや、この辺りでは見かけない顔ですね。旅の方ですか。で、どなたかお気に召した娘はいらっしゃいますか。イヒヒヒヒ。」

店の奥から、気色の悪い笑みを浮かべた男が出てくる。おそらく奴隷商なのだろう。

そんな彼の様子を見て、流浪は動揺を気取られぬよう堂々とする。

「品物はこれだけか？」

「と、申しますと？」

「俺は目が虚ろなものを買うつもりはない。」

「ほほお。お目が高いですなあ。調教前をご希望とは。それなりのお金は持っているんでしょな。」

嫌らしい笑みを浮かべ、奴隷商はニヤリと笑う。

「ああ。」

流浪は眉一つ動かさず、曹操から貰った路銀が入った小袋を2つ見せる。

片方には銀が、もう片方には金が入っていた。

「こりゃあ、凄い！！あんたどこかの王族の息子か何かですか？」  
小袋の中身を見た途端、目を輝かせ、ゴマをすりながらニシシと笑う奴隷商。

「そんなことより、いるのか、いないのか？」

「いますよ。今からお連れしましょう。イヒヒヒヒ。」

そう言って、奴隷商は店の奥へと、一般の客では入ることはないであろう奥へと流浪を案内する。

そこには、木で作られた大きな檻が置いてあり、

「どうですか。旦那あ。」

中には6名の女性が入っており、身を寄せ合うようにぶるぶると震えていた。

だが、店に並べられた女性とは違い、目は正常であった。

奴隷商はにこにこ少女たちに近寄ると、中央にいる、赤髪の少女を指差す。

年はまだ15〜16ぐらいだろうか。少々幼さが残っているが、風格があった。王を見ているようなそんな風格が。

「この娘は、西にあった国の姫。この店、一番の売り物です。さあさ、旦那、近くで見てくださいませんか？」

「ああ、悪いが少し席を外してもらえないか？」

流浪がそう言うと、一瞬奴隷商は嫌な顔をするが、ちょっと離れてくれればいい、という流浪の言葉に納得したのか去っていく。

流浪はそれを見届け、檻の前にゆっくりと近づいていき、その場に



しゃがみ込む。

ビクリと檻の中にいる女たちは震えるが、流浪はそんな彼女たちを見て、優しく微笑まない。

表情一つ変えず、じいーと彼女らの目を見る。

不意に流浪の口が動いた。

「貴方達は生きたいですか？」

「？」

少女たちは一瞬訳が分からなかった。

「このまま外の世界も見ずに死にたいのですか？一生奴隷として生きたいですか？」

流浪は質問し、彼女らが返答する前に続けざまに言葉を発していく。

「この場から出たくないですか？」

流浪はニコリと笑う。

コクリと、中央の少女、赤髪の女性が頷き、それに続いて、他の少女も頷く。

「では、俺と共に来てください。貴方方には魏へと来ていただきま  
す。」

「向こうでは、俺の手となり、足となって支えてもらうことになります。けれども、今までよりは自由があることを保証します。」

「来ていただけますか？」

流浪は檻の中に自分の手を入れる。手を差し出す。

「どうして・・・。」

赤髪の女性が震える声で呟く。

「私たちを助けるのですか？」

それは彼女たちからしたら純粋な疑問なのだろう。

奴隷として、連れてこられ、次々と何の容赦もなく売り払われていく女性たち。

その光景を見ていて、次は自分の番だと、震える夜を過ごした日々。

そんな苦しいことがあったからこそ、目の前の青年の言葉に疑問を覚える。

それでも、その青年は照れたように、頭をかきながら言う。

「貴方達は良い、綺麗な目をしている。輝きで満ち溢れている。その光を無くして欲しくないただそれだけですよ。」

清々しいほどの笑顔を彼女たちに見せた。

かつて少女が、金髪の少女が見せてくれたように。

『私、この子気に入ったわ。良い目してる。』

『私は■■。貴方の名前は隼人よ。』

偉そうに少女は言う。

『さあ、行きましょう。』

そう言って、彼女は眩しいばかりの笑顔を見せ、柔らかそうなその手を差し伸べてくれた。

もう一度流浪は尋ねる。

「人生は一度きりです。やり直しなんてできない。それでもその人生、俺に預けてくれますか？」

その手に、複数の手が重なる。

少女たちが決断したように、かつての流浪も決断したように。

しっかりと、その手は握られていた。

**第16話「その手を握る者は」(後書き)**

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第17話「獣は眠っている」

「おい、店の者。」

「はい、どうなされましたか、旦那。」

流浪は大声で奴隷商を呼ぶと、飛ぶようにしてやってきた。

「この中にいる、女たち、6人とも買うよ。お代はこれで足りるか？」

流浪はそう言って、銀が入っている袋を差し出す。

「いえ、半分も掛かりません。」

「そうか、ならこいつらに服をつけてくれ。それで、ちょうどいいぐらいか？」

「はい。」

そう言って、そそくさと表に出ていき、人数分の服を持って戻ってきた。

「ありがとな。それとこの辺りで他に奴隷を売っている店はないか？」

「旦那も人が悪いですね。この辺りの奴隷を買い占める気ですか。イヒヒヒヒ。」

「無駄口はいいから、知っているのか？知らないのか？」

「ああ、ここから右にまっすぐ行っただころにありますぜえ。」

流浪は奴隷であった少女たちを引き連れ、店を後にし、途中で換金所に寄り、買えるだけの『調教前』の奴隷を買っていた。

彼女らも同じように流浪に服を買ってもらっていた。

そして、流浪が最後の奴隷を買い、店を出たとき、

「その男、止まれ。」

背後から声を掛けられた。

流浪は振り向くと、そこには褐色の肌の女性がいた。

反董卓連合との戦いで見た、孫策に似ているが、彼女ほどの狂気は感じられない。

「何か用ですか？」

「あなたが、奴隷たちを買いまわっているという男ね。」

「ええ、まあ。」

「くされ、この下衆が！！」

そう言って、女性は長剣を引き抜き、流浪に切りかかる。

「あー、動かないほうがいいですよ。お嬢さん。」

「なっ！！」

流浪の言葉にピタリと止まる女性。

その首元には流浪の大鎌が突きつけられていた。

だが、流浪の手には鎌などない。

「お前……！！」

苦しげに女性は呻く。

鎌を突き付けているのは、流浪が買った奴隷の一人、背は流浪と同じくらいの銀髪碧眼の女性は、器用に流浪の武器を掠め取り、電光

石火の如く喉元に突き付けていた。

「助かりました。ありがとうございます。徐晃さん。」

「・・・我らはあなたを守ると決めたので。」

無表情に呟く徐晃と呼ばれた少女。

「ええとあなたは孫権さんでしたっけ。」

流浪は女性と一緒に来ていた兵たちを気にする様子もなく話し始める。

「まあ、俺は奴隷を買いまわっていたが、その何が悪いんです？」

「なっ！！」

その言葉に孫権はカッとなるが、喉元に鎌が突きつけられたままなので、動くことができない。

「別に金は払ったんだからいいじゃないですか。」

流浪のその言葉に奴隷たちは何も言わないし、表情一つ変えない。

「それとも、貴方達には彼女らを救えたと？」

流浪は孫権を見定める様に見る。

「奴隷である彼女らを。駄目になった者達を。助けられたかもしれない。でも、」

流浪は冷徹な瞳を孫権に見せる。

「あなたは今までに誰も助けなかった。これは紛れもない事実。」  
ビクんと震える孫権。

「だから、何も出来ていない貴女に口出しして欲しくない。」

「でも．．．。」

「ええ、わかっていますよ。俺のやっていることは、良いことでも何でもない。最悪だ。」

「彼女らには手を差し出し、駄目になった者達には、手を差し出さない。それでも、俺にはこれしか出来ませんから。」  
そう言って、流浪は孫権に背を向ける。

「それでも貴女に悔いる心があるのなら、奴隷なんていないそんな国を作ってください．．．徐晃、もう良いですよ。」  
流浪は歩きながら、徐晃に指示を出し、立ち去った。

「な、何なのだ？あの男は。」

額に冷や汗を浮かべ、孫権は流浪が去った方向を見る。

その問いに答えられる者は誰もいない。



「はぁ、お腹が空きましたね。」

流浪は自分の周りにいる女性、30人に言う。

彼女らは全て流浪が買った奴隷であり、流浪の仲間である。

念のために言うが、すべて女性なのは、流浪の趣味ではなく、たまに女性しかいなかったからである。

「ラーメンでも、食べにいきますか。」

流浪は、そう言って一同を率い、小さな屋台に入った。

店は小さかったけど、そこに響く彼女らの笑い声は大きかった。

「で、隼人、いい人材は見つかったかしら？」

「ええ、思わず助けたくて買ったんですけど、後に気づいてみればいい買い物でした。」

玉座の間に呼ばれた流浪は、足を組んでいる曹操に報告していた。

「そう、しっかり面倒は見てあげなさいよ。」

「それは、彼女らのことは全て俺に一任するということですか？」

「まあ、そういうことになるわね。」

「そうですか、分かりました。」

流浪はそれだけを言い、立ち上がり出ていこうとする。

「あ、それと・・・。」

言い忘れていたことを言うように、流浪は言う。

「彼女らを奴隷だからって甘く見ないほうがいいですよ。今はまだ、弱小ですけどいずれば、例え、魏の人間であろうと彼女らは平気で刃向い、潰しに來ますよ。」

俺の身に何かがあったらね、もしくは俺の号令一つでね、と。

流浪は曹操に背を向け、それだけを言い、立ち去っていく。

残された曹操は人知れずため息をつく。

「とんでもない獣を引き込んでしまったわ。けれども、それすらも飲み込んでこそ、私の覇道は完成するものよ。」

その呟きは力強いものだった。

**第17話「獣は眠っている」(後書き)**

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちください。

次回もお楽しみに。

## 第18話「ある休日の出来事1」

袁術の収める街から戻ってきた次の日、流浪は早速、自分の部隊の訓練をしていた。

訓練といっても、人には相性というものがある。

武に秀でた者もいれば、軍師としての才があるものもいる。隠密や諜報、はたまた変わった特技を持つ者もいる。

それらを流浪は見極めながら、各々が最も活躍できるような訓練を与えていく。

彼女らも自分を助けてくれた流浪の言葉ならと信頼を寄せているので、黙々と嫌な顔一つせず訓練していく。

そして、日がてっぺんに上ったところ、

「流浪はいるか？」

唐突に流浪は声を掛けられた。

「どうかしましたか？」

流浪は声の主、夏侯惇に尋ねる。

「ああ、お前にもちょっと来てほしいんだ。と、いっても・・・。」

「早速訓練に励んでるみたいだな。」

夏侯惇は何かを言おうとしたが、訓練している様子を見てしまったという顔になる。

隣の夏侯淵も似たような感じだ。

「気にしないでください。もうすぐお昼ですから休憩を入れるつも

りです。」

「む、そうか。なら私たちは城門の前にいるから、準備が整ったら来るのだぞ。」

そう言っ、夏侯惇たちは立ち去っていく。

「じゃあ、みんな区切りのいいところで休憩に入ってください。それと、李通さんはいる？」

「お側にいますよ。」

のほほんとした口調とは裏腹に、流浪の背後に素早い動きで現れる。

彼女の名は李通。字は文達。

彼女も流浪が買った奴隷の一人で、左右の青髪がぴよこんとカーブを描き跳ねている、垂れ目の女の子である。

「書庫で勉強に励んでいる子たちにも休ませるように言ってもらえますか？」

「分かりました。」

サッと姿が消える李通。彼女はのろのろしたイメージなのだが、彼女らの中でも一番足が速く、隠密から伝令まで幅広く行えるであろう人材である。

李通にかかれ、数分も掛からないうちに城内に散らばって特訓を受けている者たちに連絡が行き届くであろう。

流浪は指示を出し終え、その場を後にする。

「お待ちしましたか？」

「待ったぞ、流浪。」

「姉者、そういう時は待ってないというのが礼儀ですよ。」  
姉の直球すぎる態度を、妹の夏侯淵が嗜める。

「それで、どこへ行くのですか？」

「ああ、そういえば言っただけだったな。我々は服を買いに行くのだよ。」

「服……ですか。なら、俺は必要ないと思うんですが……。」

「いや、流浪にも来てもらおうぞ。荷物持ちとしてな。」

「それはひどい、姉者。流浪よ、もちろんただとはいわない。流浪も好きな服があったら遠慮なく言ってくれ。ついでだから買っやろう。」

夏侯惇と夏侯淵はそう言いながら、町へ出る。

流浪もその後ろを付いていくと行くと、前にいる二人は早速お目当ての店を見つけたのであろう、そこへ入っていく。

流浪も入ると、そこは女性服を扱っている店だった。

夏侯惇と夏侯淵は奥へと入っていき、ドレスなどを手に取り、見ている。

「……それ、小さくないですか？」

流浪は二人が見ている服を見ている。夏侯惇たちが着るには少々小

さいだろう。

「ああ、これは華琳様が着るのだ。」  
「？」

夏侯惇の言葉にはてなマークを浮かべる流浪。

「華琳様は忙しい。こうして服を買う時間すら惜しいほどにな。だからこうして、休みの日には我らが服を選びに来ているのだよ。」  
困った様子の流浪に夏侯淵が次の服に手を伸ばしながら説明する。

「はあ、なるほど。」

流浪は納得したのか、相槌を打つ。

そうこうしているうちに15, 6着ほどの服が流浪の隣の棚の上に積み重ねられていく。

「これぐらい、だな。」

「うむ。」

「これ、全部買うのですか？」

「いや、今から絞り込んでいくさ。流浪、お前も意見を出してくれ。」

夏侯淵は、そう言いながら、流浪に服を見せていく。

「これなんてどうだ？」

白いワンピースっぽい服を見せてくる。

「良いと思います。」

「これはどうなのだ？」

今度は夏侯惇が赤いチャイナ服を見せてくる。

「良いと思いますよ。」

「こちらはどうか？」

夏侯淵は黒の服を見せてくる。

「良いと思いますよ。」

「ぬ、流浪よ、適当に言っていないか？」

夏侯惇が顔をしかめて言う。

「いえ、適当ではなく、思ったままを言ったのですが……。」

「そうなのか……。」

納得出来ないと言う様子の夏侯惇だったが、気を取り直して、再び服を見せる。

「良いと思いますよ。」

「なら、これならどうだ？」

夏侯淵が露出度の高い服を見せる。

「良いと思いますよ。」

その服を見ても表情一つ変えることなく事務的に答えていく流浪。

「本当にちゃんと考えているのだろうか……。」

そう言って夏侯惇は次の服を見せる。

その途端、流浪の目が変わった。



「これは買うべきです。」

「うわっ、急に食いついたな。」

夏侯惇の手にあるものそれは、

「華琳に巫女服、あります!!」

両方の親指の上に突き上げ、某鍵アニメのヒトデ少女顔負けのGO  
ODの合図をする。

麗しの巫女服。

「はあ。」

完全にトリップ状態になる流浪。そんな様子を驚きのあまり呆けた  
表情で見る夏侯姉妹。

「ちゃんと見ていた...のか。」

「うむ、ならこれは買っておくか。」

夏侯淵は巫女服を含め、数着を店員の下へ持っていく、会計を済ま  
せる。

その後も、夏侯姉妹は数十件店を回り、そこでも流浪に意見を求め  
るが、巫女服を超える反応は得られなかったという。

そして、日も暮れ始めたころ、流浪たちは帰路についていた。

「流浪、そんなに持たせてしまって悪いな。」

「いえ、大したことありませんし。」

流浪は両手いっぱい買った服を持っている。

「本当に何もいらんのか？欲しいのがあったら買ってもいいんだぞ。」

「・・・そうですね。」

流浪はあたりをきよろきよろ見渡し、足を止める。

「なら、あそこの菓子をいただきます。」

流浪はそう言って、一軒の店を見る。

「流浪は甘いのが好きなのだな。」

「いえ、あれは彼女たちに買っていくんですよ。」

「彼女たち、先日、お前が連れてきた奴・・・」

「あまりそう言わないでください。彼女たちはもう普通の女の子なんですから。」

流浪は夏候惇の言葉を遮るように言う。

「流浪は部下思いなのだな。」

「いえ、そんなんじゃないやしません。単に、何か一つでも生きることへの繋ぎがあればそれは強い力になりますから。それがたとえ、主への忠誠でも、甘い菓子であろうと変わりません。生きていればいいことがある。そんな思いが生きることへの執念になるはずですから。」

流浪は淡々という。

夏候姉妹はそれに黙って耳を傾ける。

「そうだな。人数分買ってやろう。好きなものを選んでくれ。」

「では・・・。」

流浪は並んでいる菓子を見る。

「この団子とこっちの団子とあの団子を10本ずつでお願いします。」  
流浪がさしたのは、みたらし団子、あんこが乗っている団子、蜜柑の餡が乗った団子の3種類である。

「流浪、お前はいらんのか？」

夏侯惇が数を聞いて聞く。確か流浪の部下は30人だったはず、と。

「ああ、自分はいいですよ。もうとつくに生きることへの繋がりは出来てますから。」

「・・・。」

「そんなことより早く帰らないと、日が暮れてしまいますよ。」  
「ああ、そうだな。」

団子を買い、彼らは帰路についた。

**第18話「ある休日の出来事1」 (後書き)**

いかげでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第19話「ある休日の出来事2」

「流浪様、空腹絶倒しそうです。」

「現れるなり、どうしたのですか？許劭<sup>じやうせう</sup>さん。」

流浪は自室に突然入ってきたピンクの髪をツータールで纏めている少女に言う。背は低く、流浪の胸のあたりぐらいの高さである。

「どうしたもこうしたもないです。空腹絶倒なのですよ。」

ううううとうなり始める許劭。彼女も流浪が買った一人である。

「空腹絶倒・・・とは何ですか？」

流浪が怪訝な表情を浮かべる。

「それは文字通り空腹で倒れてしまうということなのですよ。分かるかな？」

むむむと、クリリとした可愛らしい瞳で流浪を覗き込み言う。

「つまり、何か食べ物が欲しいと？」

「そういうことになるのかな。うん。」

コクリと頷く許劭。何をくれるのかと期待の籠った眼差しを向ける。

「なら、厨房に行って、料理を作ってみてはどうですか？」

流浪は自分の椅子に腰かけたまま、曹操に与えられた、書簡の山に目を通しながら提案する。

「一人でかな？私に一人で行けって言うのかな？まだそんなに知り合いもないのにな？」

ジトーツとした目を流浪に向ける。

「そういえば、極度の人見知りでしたね。」

流浪はいまさら気づいたというように思い出す。そう、彼女は極度の人見知り、というより他人になかなか心を開かないのだ。

奴隷だった頃の忌まわしい記憶のせいもあってか、心を開くのは同じ奴隷だった流浪の部下か自分たちを助けてくれた流浪ぐらいだ。

「しかたがありません。俺も付いていきますよ。」

その言葉を聞いた途端、許劭の顔色が花のように明るくなる。

流浪は、読んでいた書簡を机の上に置き、許劭を連れて厨房へと向かう。

嬉しそうに流浪の隣を歩く。だが、厨房の中をのぞいた瞬間、許劭の表情が固まった。

「あら、隼人。可愛い子を連れてどうしたのかしら？」

「流浪さん。こんにちはです。」

どうやら、先客がいたらしい。

「華琳に、典葦殿ではないですか。どうなさったのですか？」

流浪は尋ねる。その後ろでは、許劭が流浪にしがみついて怯えている。

「それはこっちの台詞よ。その子、怯えてるけど大丈夫なの？」  
曹操が心配そうに言う。

「ああ、大丈夫ですよ。気にしないでください。」  
そう言い、流浪は許劭の頭をなでなでする。気持ちいいのか、許劭は猫のように目を細める。

「そう、ちょうど良かったわ。あなたたちも一緒にどう？」  
曹操が正面の椅子に座れと促す。

「ちょうど新しい料理の試食をやっているんです。」  
典韋はそう言って、テーブルに料理を並べる。おいしそうな匂いが鼻孔を刺激する。

「・・・（ゴクリ）。」

空腹絶倒の許劭が流浪の隣で唾を飲み込む。

「なら、ご一緒させてもらいます。」  
それに流浪が気づいたのかは誰にも分からないが笑みを浮かべ、席に座る。その隣にビクビクしながらも涎を垂らす許劭が座る。

「涎が垂れていますよ。」

「あ、すびばせん。」  
流浪からハンカチを受け取り拭く。そして、許劭は目の前に並べられた料理に釘づけになる。

卵を黄身と白身に分けてご飯の上にのせ、上からとろみをつけた塩味のソースがかかっている。

それは、俗に言う天津飯というやつだ。

「ご飯の上に卵を乗せるなんて珍しいわね。」  
それもそのはず。この時代では蟹玉はあったがそれをご飯に乗せようという概念はなかったのだ。

「「いただきます。」」

一口食べる。

「美味しいのです。流浪様。」

もう一口、また一口と次々と口に運ぶ許劭。

「美味しいですよ、典葦殿。」

流浪もぱくぱくと食べていく。

「流琉るる、ご飯と卵を組み合わせるのには驚いたわ。それに卵もふわふわしてて美味しいわ。けれども、少し足りないわ。そうね、海鮮蟹とか海老を入れるとおいしく仕上がると思うのだけれど。」

「なるほど。」

曹操は料理の批評をしており、典葦はメモを取っている。

「流浪様、流浪様。」

くいくいと袖を許劭が引く。

「まだ、食べ足らないのです。何か作ってほしいかな。」  
上目づかいに流浪を見上げる許劭。

それもそうだろう。本来曹操一人に作っていたのだから、それを3人で分けたので空腹絶倒だった許劭は満足ではないだろう。

「そうですね・・・、なら余り物で作りましょうか。」

流浪は立ち上がり、曹操達に材料を使っているかを尋ねる。

「別にいいわよ。へえ・・・隼人が料理・・・楽しみにしてるわ。」

流浪は厨房に行き、材料を確かめる。

お米と卵、玉ねぎ、人参、鶏肉が少しに、西紅柿シイ・ホン・シいわゆるトマトが



ある。

それらの材料を使い調理を始めた。

「さあ、どうぞ。」

流浪は曹操、典葦、許劭の前に調理したものを出す。

「さっきのに似てるわね。」

曹操が見た目を見ている。

ご飯の上に、とろとろ半熟の卵が乗っており、少し果肉の形が残ったトマトソースがその上からかけられている。

その包んでいる卵を割ると、中からチキンライスが顔をのぞかせる。  
オムライスというやつだ。

「中身もトマトで味付けているご飯ですね。」  
割ってでてきたご飯を見て典葦が言う。

「いただきます。」

そんな二人が評価している間に、待ちきれないというように許劭が

一口頬張る。

その瞬間、顔が蕩ける。

その様子を見て、曹操、典韋も一口食べる。

「・・・美味しい。」

「酸味のきいたトマトソースに、とろとろの卵が合わさってさっぱりしてますね。」

「それに、同じトマトで味付けしているのにご飯は少し甘めだわ。・・・これは、玉ねぎの甘みね。」

典韋と曹操が料理の分析を開始していると、

「ああー！！！」

許劭が突然悲鳴を上げる。

「・・・抜け駆けはいけませんよ。」

突如現れた李通はオムライスの皿ごと奪って、許劭から離れる。

「何で李通がいるのかな？」

「流浪さんがいるところに、李通ありますよ。」

ふふつと鼻で李通は笑い、奪ったオムライスを一口食べる。

「はあ。」

許劭と同様に顔が蕩ける。その隙を見逃さず、許劭は取り返そうと動くが、

「へっ!？」

ボタンとすっころぶ。何もない平面なところである。

「うむむ・・・何するのかな？」  
起き上がりながら、目じりに涙を浮かべる許劭。

「単純にこけただけですよ、許劭。」  
その様子を遠目から傍観する流浪。

「何を騒いでいるの？」  
「じ、徐晃さん・・・。」  
そこに、銀髪碧眼の女性が入ってくる。その手にはいつの間にか、李通の持っているはずのオムライスが乗っている。

「ふむ、これが元凶と見える。」  
そう言って、ぱくりと口に含む。

「・・・美味。」  
無表情に淡々という。

「むむむむ、それは私のなのですよ。返してください。」  
ぱつと、奪いに動くが、徐晃は左手にオムライスを持ったまま、半歩後ろに下がり、右腕一本で、許劭の顔面を鷲掴みにし、勢いを殺す。

「・・・独り占めはよくない。」  
「痛い、痛い、痛すぎますううううう・・・！！！」  
ミシミシなんて音が出ている。

「あれ、みなさん。お揃いなのですか？」  
厨房に更なる人影が現れる。

「劉曄さん。勉強ははかどっていますか？」

「はい。」

流浪の質問に少女は首を少し傾け笑顔で答える。さらりと赤髪が揺れる。

彼女は名を劉曄、字を子揚という、流浪が買った最初の店にいた、とある西国の姫である。

「・・・食べるといい。美味です。」

徐晃は右手で許劭を鷺掴みにしたまま、劉曄に左手に乗ったオムライスを勧める。

「いいんですか。」

劉曄は最後の一口分を食べる。その瞬間、許劭から力が抜けたのは誰も気が付かない。

「美味しい。私、こんなに美味しい料理食べたの初めてです。」  
目をキラキラと輝かせる劉曄。

「隼人、作り方を・・・。」

曹操が流浪にレシピを教えてもらおうと振り向くが、いつの間にか厨房から流浪の姿は消えていた。

「李通さん、いますか？」

「はい。お側にいますよ。」

「俺の部屋の机の上に見終えた書簡があるので荀？殿に持って行ってください。」

あの人は男嫌いですからね、と付け加えて言う。

「御意です。」

シュンっと、指示を受け、立ち去る李通。

そして、部屋に戻った流浪は再び書簡の山に目を向けるのであった。

**第19話「ある休日の出来事2」 (後書き)**

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第20話「距離」

ある日の昼下がり、小鳥たちの囀さえずりりが響き渡るなか、

「あのー。」

「入っていいですよ。」

自室で机の前に座っていた流浪は来訪者を迎え入れる。

そこには手に一冊の書物を抱えた劉曄がいた。

「流浪様、教えてもらいたいのですが。」

手に持っている本を見せる。それは有名な孫子の兵法書である。

有名と入っても、記憶を失っている流浪は書物の類を読んでいないのでいまいち分からない。

「すみません。俺の専門外なので、そういうのは荀？殿に聞いてもらったほうが・・・。」

流浪は苦笑する。

「それは、そうかもしれないけど、私は荀？さんが嫌いです。」

真顔で冗談抜きで言う劉曄。

「だって、あの人流浪様のことを悪く言うんですよ。」

劉曄はむすつとした表情で訴える。

ああ、なるほど、と流浪は思う。

だってあの人は俺も嫌いでしょうけど、その前に男の人全員が嫌いですしね、と。

「それは仕方が無いですよ。」  
流浪はそっけなく言う。流浪は人の性癖をどうこう言う人ではないのだ。

「仕方ないわけがありません。」  
しかし、その事実を知らない劉曄は納得いかない様子。

「まあ、そうむすつとしないでください。2日もすれば新しい軍師さんが来るようですから。」

「はい、その通りなのですよ。」

シュンと突然、許劭が天井から顔を見せる。

「あれ、天井が外れてますよ、流浪様。」

「だって私が外したんだよ。いけないかな？」  
驚く劉曄にえっへんと許劭が威張る。

「ちゃんと、直しておいてくださいよ、許劭さん。」  
特に興味ないというように流浪は言う。

「でも、どうして新しい軍師さんが来るってわかるのですか？」

「あー、それは許劭さんが言ったからですよ。」

流浪は天井から飛び降り、着地に失敗して、へばっている許劭に目を向ける。

「彼女の諜報能力は群を抜いているようです。いろいろ聞きました  
が、どの情報も間違っていないませんでした。」  
流浪は心底不思議そうに言う。極度の人見知りであるのに、情報戦を得意としていることに。



「まあ、明後日を楽しみにしててください。」

時間は経ち、明後日。

玉座の間には魏のそうそうたる面子が集まっていた。その中には流浪の姿もあり、彼の後ろには劉曄と許劭の姿もある。

そして、曹操に向かい合うように二人の見慣れない人物が来ていた。

「お初にお目にかかります、郭嘉と申します。」

「程イクですー。」

二人は膝をつき、答える。

どうやら彼女たちは七百の兵士で策を用いて、大群で迫りくる袁紹軍を追い払ったという。

その功績を讃え、曹操は彼女たちを軍師にすることを決定した。

そして、お互いに自己紹介も済ませ、解散となる。

流浪たちも自室に戻ろうとするが、

「隼人、あなたは少し待ちなさい。」

曹操に呼び止められ、流浪は立ち止まり、彼女の前に行く。その後ろを、劉曄と許劭が着いていく。

「これ、あなた宛ての荷物よ。」  
そう言って、流浪に何かが入った布袋を渡す。

「ある旅芸人から、あなたに渡してもらうように頼まれていたのを、さっき思い出したの。」

「ああ、張角さんたちですか。」

思い出したように流浪は布袋の中身を確認する。

「うん、無事ですね。」

「中身は割れ物か何かなの？」

曹操が流浪の言葉から中身を予想する。

「いえ、これですよ。」

眩い笑顔で流浪は中身の物を曹操に見せつける。

巫女服。

純白と赤の組み合わせは流浪の心をときめかせる嗜好の一品。

「・・・それはあなたが着るのかしら？」

少し顔をひきつらせ、曹操が言う。

「いえ、俺が着るものではないですよ。これは女性用ですし。あれ、でも華琳のところにもこういったの来ませんでしたか？」

確か、夏侯姉妹が買っていたはずですが・・・と流浪は思う。

「いえ、そういったものは来ていないわね。」

華琳は少し考えるような仕草を行い、言う。

「これで用は済んだから、隼人も戻っていいわよ。」  
「御意。」

「流浪様がおっしゃられた通り、本当に新しい軍師さんが来ましたね。」

流浪の部屋へ続く廊下を歩きながら、劉曄は前を歩く流浪に言う。

「これで、劉曄さんの勉強もはかどりそうですね。」

流浪は嬉しそうに歩いていると、その隣に行く許劭は不満げな表情を浮かべていた。

「よくやりましたね。流石です。許劭さん。」

流浪はそれを見て、情報をもたらした許劭を誉める。

それでも、まだ不満げな表情は変わらない。

「許劭でいいかな。流浪様が私たちを『さん』付するのはおかしいですよ。流浪様は私達に手を差し伸べてくださった方なのに……。」

「それもそうですね。流浪様、私たちのことは呼び捨てでおっしゃてください。なんなら、真名も……。」

「真名は簡単に人に教えるものではないよ。大事な人にしか教えちゃいけない。だから、今は取っておきなさい。」

君たちにも、これからそんな人に出会えるはずだから、そんな思い

を抱きながら流浪は言う。

「それに俺は人を呼び捨てにするのは抵抗がありますから。呼び捨てにする等の行為は、相手との距離を縮めるということです。」  
流浪はゆっくりと言う。

それはつまり、言い方を変えれば、相手を自分の領域テリトリーに近づけると言うこと。

「それは、仲良くなりすぎるということですよ。戦場において、人への好意は強さにもなるけれど、同時に弱さにもなる。」

相手の領域に入れば相手のことをもつと知れる。

それはもう、知らなくてもいいことまで。

「ですから、呼び捨ては滅多なことがない限りしません。」

微笑を浮かべて流浪は言う。それを聞いて、なるほどと思っている劉曄。

「じゃあ、行きましようか。」

流浪は再び歩き出す。彼女たちも慌てて追いかけ始めた。

## 第20話「距離」 (後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第21話「厳しさと優しさ」

「で、俺は袁紹を追い返せばいいんですか？」

流浪は目の前に堂々とたたずむ少女に最終確認を行った。

「ええ、そうよ。手加減はいらないから。それに、隼人の部隊は今回が初陣になるから、自分の部隊の力を確かめるいい機会になるわ。」  
ニコリと笑みを浮かべる少女、流浪の主であり、魏の小霸王、曹操はそう言った。

「それもそうですね。断る理由もないですし、そもそも断っている時間もなさそうですから。」

流浪は目線を曹操から外す。その先には、劉備軍の部隊が移動を開始していた。

そもそも事の発端は、劉備軍が治めていた徐州にいきなり袁紹が攻め入ったことから始まった。

袁紹の性格上、本来ならば多くの領地をもつ曹操を攻めると思っていた劉備たちは突然の攻撃に、対応しきれずにいた。

そして、ぐだぐだと士気は下がっていき、良く言えば、戦略的撤退、悪く言えば敗走していた。

だが、ここで一つ問題が残っていた。

それは逃げるにも、自分たちが通ることのできる道がないという点だった。

北は袁紹、逃げるなら南しかないがその南側を治めていたのが曹操であった。

「通行許可証がいるんでしょ。」  
曹操は、劉備を見て言う。

「はい。」  
劉備は無垢に無邪気に、なんら疑うことなくその言葉を受け取る。そんな都合のいいことを劉備の目の前の少女はするわけがないのに。

「通行料は、関羽でいいわ。」  
その一言で、劉備の表情は固まった。

「・・・え？」

「なに呆けているのかしら？行商でも関所で通行料を払うものでしょ。そう思うわよね、流浪。」

曹操の傍らに控えていた流浪に曹操は淡い笑みを浮かべていう。

「それも一つの方法だと思います。」  
流浪は表情一つ変えずに言いきる。その言葉を聞いたとき、流浪の更に後ろにいる劉曄たちが少し悲しそうな表情になるが誰もそれには気づかない。

「それは出来ないよ、曹操さん。」  
そんな中、今まで黙っていた青年が言う。

天の御使い、北郷一刀。

「折角、ここまで来てもらって本当に申し訳ないけど、愛紗を犠牲にしてまで俺たちは曹操さんの領地を通ろうとは思わない。」  
その言葉に劉備軍一同が、目を潤ませる。

それは酷く優しい言葉。でも、この戦乱の中では甘すぎる言葉だった。

「ふざけないで・・・。」

怒りで震える声がそこにあった。

「そんな、甘い考えで乗り切れると思ってるの！？馬鹿にするのもいい加減にしない！！」

うつむき、拳を握り締め、声を張り上げる曹操がそこにあった。

「それでも俺は愛紗を失いたくない。」

「そのせいで他の者を失うかもしれないのよ！！」  
お互いに睨み合い、どちらも一步も引かない。

片や、覇道を志し、現実を直視するもの。

片や、義を重んじ、仲間を大切にするもの。

互いに強い信念を持つからこそ、譲れないことがある。

だけでも、その雰囲気になんて耐え切れず、声を出すものがいた。

「曹操ッ！？ご主人様をこれ以上愚弄するなら、この私が・・・。」  
ギリリと刃先が光った自身の獲物を構えて言う。

それでも、曹操は何ら臆することなく、挑発的な笑みを浮かべる。



それに業を煮やした関羽が一步踏み出したとき、

「まあまあ、落ち着いてください。」

関羽の顔の寸前に大鎌が現れた。

「!!」

その場にいる全員が驚愕の表情をあらわにする。

「もういいんじゃないですか。華琳。少し遊びすぎです。」

流浪は鎌は一切動かすことなく、首だけを動かして、曹操に目を向ける。

「あら、ばれてたのかしら。……いいわ、我が領地を通っていきなさい。」

はあ、と溜息をつき曹操は興味がなくなったといわんばかりに言う。

「え、通行料は？」

話の流れについていけずにいた劉備が戸惑いながら言う。

「そうね。いずれ貴女が大きくした国を奪いに行くわ。それでチャラにしてあげる。稟、霞、劉備たちを出来る限り安全な道で案内してあげてちょうだい。」

皮肉を込めて、張遼たちに指示を出す。

「で、隼人。分かっているのよね。出しゃばったんだからちゃんと責任は取りなさい。」

そして、彼女はこう告げた。

・・・袁紹を迎え撃てと。

そして、話は今に至る。

「袁紹のほうは俺が押さえておきます。でも、袁術のほうは無理ですよ。」

「まあ、そっちは春蘭、秋蘭たちに任せるわ。」  
そう言って、曹操は持ち場に戻っていく。

「袁術・・・、確かあそこには孫策殿がいたような。」  
そんなことをぶつぶつ言いながら、流浪は自分の持ち場へ戻ると、そこには浮かない顔をして、立っている劉曄たちがいた。

「どうしましたか？劉曄さん。」

「あの、流浪様。もし、もしですよ。流浪様がさっきの劉備さんたちと同じ状況に陥ったら、私たちを・・・その、人質として取られるとしたら、流浪様はやっぱり、それを受け入れてましたか？」  
おずおずと、だが、その瞳の奥にはしっかりとした意志を持って、言葉を紡いでいく。

「・・・。」

流浪はそれに何も答えない。

でも、たった一言、  
「そんなの分かりませんよ。」

流浪にしては珍しく、言葉を濁した。

そんな様子を見て、何かを察したのか劉曄はその場を後にする。それに続き、一緒にいたほかの者も自分たちの準備を始める。

残された流浪は、まだ日も出始めていない、真っ暗な夜空を仰ぎ、「そんなこと考えたくもありませんよ。そんなこと、起こすわけにはいかないんですよ。」  
ぼそりと呟いた。

## 第21話「厳しさと優しさ」(後書き)

いかがでしたか？

長らく更新をしていなくてすいません。今日から春休みなので、更新を早め早めに行きたいと考えています。

感想・アドバイスお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第22話「背中を追って」

前方に広がるは敵の大軍。

その数、十万はくだらない。

だけれども、不思議と怖さはないと、初陣を迎える彼女らは感じた。全身を黒で統一し、風でなびくその姿はまるで、死神のよう。

この装備を用意してくれたのも、彼女らの主。自分たちを鍛えてくれたのも、彼女らの主。

そして、不思議と怖さがなくなっているのは、彼女たちの前に、鎌を背負い、前方の敵軍を見ているその主の背中があるからだろう。

彼は自分たちに生きる意味を教えてくれた。  
今、こうして、立っていられるのもすべて、彼のおかげ。

「さあ、行きましょうか。」  
たった一言で、彼女たちは救われた。

だから、彼女たちはほんの少しでも役に立てるように、その背中を追いかけた。

「何なのですか？」

袁紹は自分たちの進行方向に現れた者らを見ていただちの声を上げる。

「何と言われてもなあ……。」

「敵の兵としか……。」

その隣にいた二人の女たちは苦笑いを浮かべながら、状況をありのままに伝える。

「で・す・か・ら、どうして、たったあれだけしかないのですか、  
とっているのです。」

そう、そこには、たった30人ばかりの黒い人間達しかない。

「俺たちに、どうして、とか言われてもなあ……。」

ガシガシと頭をかく活発そうな女。

「これは、私をバカにしているとしか、考えられませんわ、キィィ  
!!」

「まあまあ、落ち着いてください。あんな人数さっさとやつつけて  
曹操の本陣へ乗り込みましょう。」

「そうですわね。袁家の兵よ、あんなやつら踏み潰してしまいなさ  
い。」

うおおおおお、雄叫びを上げて、両軍はぶつかった。

土煙が舞う中、黒の一団が動いていく。

く左翼く

「左翼前進。一気に突き進みやがれえ!!!」  
袁紹軍の左翼は文醜。

一方、それに対峙するのは、

「第1隊、第2隊は徐晃さんの援護を。残りは私についてきてください。」

流浪隊一の軍師、劉曄。

「・・・邪魔。」

流浪隊の一番槍、徐晃。

徐晃が次々と袁紹軍の兵士たちの武器を掻っ攫い、その隙を劉曄がまとめる奴隷たちがついていく。

く右翼く

「二人一組で、確実に仕留めてください。」  
袁紹軍右翼は顔良。

それに対峙するのは、

「死にたいのですか。」

流浪隊の隠密、李通。

「か、かかってこいかな。」

流浪隊の諜報員、許劭。

李通は目にもとまらぬ速さで、次々と短剣で喉元を切り裂いていく。

対して、許劭は、

「ひい……。」

逃げてばかりだった。

そして、中央。

流浪は怒涛の勢いで敵をばっさばっさとなぎ倒していく。

そして、その後ろについている、数名の彼女らが、流浪が取りこぼした兵を駆逐していく。

人数が多いというのはある意味では脅威であるが、それと同時に弱点も持ち合わせている。

例えば、身動きがとりずらくなる。

例えば、恐怖が伝染しやすくなる。

例えば、敵と味方の認識の区別にわずかな時間がかかる。

それらすべてが今、起きていた。



まさに、そこ一帯は右翼、左翼より酷いありさまになっており、阿鼻叫喚の地獄絵図が出来ていた。

その光景に、袁紹は開いた口がふさがらなかった。

「わ、私の兵は10万なんですのよ．．．。」  
バツバツと倒れていく兵士たち。

「相手は、たったの30人程度なんですのよ．．．。」  
次々と戦局が悪化していることを知らせる伝令。

「こ、こんなことって．．．。」  
向かってくる土煙が大きくなっていく。

「れ、麗羽様、もう駄目ですよ。撤退しましよおう。」  
「あいつら強すぎだぜえ．．．。」

疲れ切った表情で文醜、顔良の二人がやってくる。

「え、ええ、そうしますわよ。」

「「へ？」」

袁紹のその返答に、思わず二人から驚きの声上がる。

「何か、悪いものでも食べましたか？」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。早く撤退しますわよ。」

「いつもは、納得いきませんわ、って反抗するのに、珍しいこともあるもんだなあ。」

彼女らは不思議に思いながら、撤退を始めた。

「流浪たちは終わったみたいね。」

曹操は袁術軍と対峙している場所の後曲にいた。

彼女の周囲には、軍師である荀？、程？の二名がいる。

「たったの30人で、本当にやってのけた……。」  
驚きを隠せないでいる荀？。

「桂花<sup>けいふあ</sup>、あなたは流浪と同じ状況で、同じ人数で、どんな策を使ってもいいから、同じように袁紹を追い払うことは出来るかしら。」  
曹操がそんな荀？に質問をする。

「……思い浮かびません。」  
しばらく考えた後、申し訳なさそうに言う荀？。

「そう、なら、風はどうかしら？」

「……すぴー、すぴー。」

「風、寝てないで起きなさい!!」  
慌てて、程々を揺さぶり起こす。

「それで、風は流浪と同じ状況で、袁紹を追い返すことができる?」

「無理ですね。」

即答だった。

「あんなもの、多分、世界中探しても、いませんよ。例えば、あの呂布でさえ、難しいことかと。」

「そうね、私もそう思うわ。でもね、隼人はそれをやってのけた。」  
曹操は空を、わずかに太陽が出かかっている夜空を見上げる。

「私は、ちゃんと彼を使いこなせるのかしらね……。」

弱く、か細い呟きは誰の耳にも届くことはなかった。

## 第22話「背中を追って」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスを待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第23話「知らないほうがいいこともある」

「孫策はうまく袁術から独立したようね。」

曹操はにこやかに報せを聞いて、言った。あの戦いで、袁紹が負けたのを見るや、いなや、袁術は撤退を始めたが、それを孫策達が奇襲を仕掛け、さらに孫策らの別部隊が袁術の本拠地である江東を占拠することで、袁術らを倒すことに成功したらしい。

「なんだか嬉しそうですね、華琳。」

隣にいた流浪が言う。

「それはそうよ。あの孫策が袁術という鎖から抜け出し、今は自由になった。これから、孫策は軍備を整え、我が覇道を彩る最高の飾りになるわ。」

「それとこれからは情報がものを言うようになるから、風、孫策達のところの情報収集お願い。」

「御意ですー。」

「李通さん、許劭さんいますか？」

流浪は虚空に向かい、尋ねる。

そこに一つの影が舞い降りる。

「御意です。」

のほほんとした声で答えたのは、隠密の李通。左右の青髪がびよこんとカーブを描き跳ねている、垂れ目の女の子である。

だが、許劭の姿はいつまでたっても現れない。

「許劭さんを知りませんか？」

「許劭さんなら、さつき流浪様の部屋でお見かけしましたよ。」

跪いた格好で言うが、相変わらず表情はのほほんとした笑顔である。

「部屋、それも俺の部屋ですか……。まあ、急ぎのようではないのでいいでしょう。」

流浪は少し考えるように視線を彷徨わせる。

「それよりも、李通さん。分かる範囲でこの城にはどのくらい間者さんがいますか？」

さつきまでの行動をぴたりと止め、流浪は李通に視線を向ける。それに呼応するかのように、李通の雰囲気ガラリと変わる。

「城には四人です、城下町には結構入ってるみたいですがね。なんなら、城に潜り込んだ鼠、三匹は今すぐにでも倒しておきましようか。」

にこやかに言う李通。だが、流浪の表情は少しばかり、固かった。

「三匹・・・？ 四ではないのですか？」

「一匹はどうやら、鼠ではないようです。あえて言うなら、豹ですかね。他のとは格が違いすぎますよ。」

李通にしては珍しく、困ったような表情を浮かべる。

「そうですか、向こうがこちらに気づいた様子は？」

「判断しかねますね。見た限り、その豹さんだけは目的は諜報ではないようです。」

「なら、暗殺ですかね。」

「おそらくは。」

ふと、一つ流浪は溜息をつき、少し考えるようなしぐさをした後、  
「李通さん、今から休んでいいですから、今晚は俺の部屋に来てください。」

さらりとそんなことを言った。その瞬間、李通の顔がボンッと茹で蛸のように真っ赤になる。

「そ、そ、それは夜這いをしにこいとお、仰るのですか!?!」  
いつものほほんとした喋りをすっかり忘れるほどに、動揺を隠せないでいた。

「何を言って・・・。」

「そ、それなら、今から念入りに体を磨かないと。」  
だつとすさまじい勢いで廊下を走り去っていく李通。

それを引き留めようと流浪は手を伸ばすが、届かない。  
そんな様子を陰から見ている人影が3つ。

「流浪もやっぱ男の子やなあ。」

「流浪さんったら、大胆なのー。」

「・・・。」

魏の3人娘、李典、于禁、楽進である。

「何を言っているのですか？」  
心底不思議そうに言う流浪。

「何をつて……。気づいてないんかいな。鈍いなあ。」

「鈍すぎなのー。」

「……はあ。」

ジト目を流浪に向ける李典と于禁、その後ろで溜息をつく楽進。

「俺は、間者対策をしていただけなのですが……。」

「それであんなことを言うって……って、間者ってどういうことや!？」

身を乗り出して、驚きの表情で尋ねる李典。その時に大きな胸がぶるんと揺れたが、流浪は表情一つ変えない。

「この城にですね、」

流浪は一通り、先ほど李通に教えてもらった情報を伝える。もちろんこの際、防音の結界を周辺に張ったので、外部に音はもれていない。

「そういうことなら、華琳様のところには誰か武将を置いてこうやないか。」

そして、曹操の部屋のあたりは特に警備が厳重になった。

そんな会話をして、3人娘と分かれた流浪は、自分の部屋のドアを開けた。

「あはああああ、流浪様あ……。」  
ボタン、流浪はドアを閉めた。



「見間違いですかね。」

ごしごしと自分の目をこすり、再びドアを開ける。

「流浪様の匂い……。あはぁん。」

そこには変態がいた。

流浪のベットに潜り込み、枕に顔をうずめては、至福の表情を浮かべる変態がそこにいた。  
ていうか、許劭だった。

「あはぁん。」

「……。」

「いい匂い……。。」

「……。」

「最……。。」

「……。」

目があった。その瞬間、時間が止まったような気がした、と後の許劭は語っている。

「こ、こ、これはですね。あの、その……。そうです、寝ぼけてたんです。たったいま目が覚めた、かな？」

流浪の顔色をを窺いながら、冷や汗を浮かべて許劭は必死に言い訳をする。

「そうですか、寝ぼけてたんですか。」

あっさりとそれを受け入れてしまう流浪。

「そ、そそ、そういうわけなのですよ。と、言うわけで、失礼する、

かな。」

これまた李通並みにダツと凄い勢いで部屋から出ていく許劭。何故か、流浪の枕を持って行ってしまったが、流浪は気にしないことにする。

というより、気にしなくなかったと流浪は思った。

**第23話「知らないほうがいいこともある」(後書き)**

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第24話「刺客」

夜。外は暗闇に覆われ、そこにかすかに月の光が差し込んでいる。外を出歩くものなど誰もいないそんな静寂の中、

「流浪様、初めてなので優しくお願いします。」

「李通さん、何か勘違いしています。」

流浪は目の前の少女の目を覚まさせることに必至だった。なぜか、薄いひらひらのキャミソールっぽいのを着て訪れたのが、更に流浪を焦らせる。

「流浪様ったら、李通さんだなんて、余所余所しいです。私のことは真名の……。」

「あー、いい加減話を聞いてください。それに真名は簡単に教えるものではないですよ。」

「いえ、今こそ教えるべきです。だって、私たち愛し合ってるわけだし……ぽっ。」

「いや、愛とかそういうわけでは……、って話を聞いてください。」

頬を淡く染めて李通が言うが、流浪は必至である。

「体だけですか。そうですよね、私、奴隷ですし……所詮、欲を満たすために……。」

「ええと、突っ込みどころがありすぎて困ってしまいますが、そういうわけではないですよ。」

悲しげな表情を浮かべる李通に、苦笑いを浮かべながら彼女の言葉を否定する流浪。

「じゃあ、何のために私はここに呼ばれたんですか!？」

「暗殺をしようとする奴から守ってもらおうと思ったのですが．．．」

しばしの沈黙。

「夜這いではなく？」

「ええ、護衛を。」

「．．．。」

ボンと李通の顔が真っ赤になる。

「あ、わわ、これじゃあ、まるで私、痴女じゃ．．．。」

「大丈夫ですよ。もっと変態な人を昼間に見ましたから。」

「そ、そうですか。」

「ええ、ですからとりあえず、戦えるように準備してきてください。」

微笑を浮かべながら流浪はドアを指さした。

そして、深夜。完全な静寂に包まれ、起きているものはほとんどいない。  
もちろん、流浪も寝ていた。

その寝顔を遠目から、部屋のある一角に身をひそめながら李通は見入っていた。

その口元からはだらしなく涎が垂れているが、本人は全く気が付く様子がない。

「何なんですか。あの寝顔は、ああ、いますぐあのベットの中に潜りこみたいですよ。」

若干、危ない人になりかけている。

そんな時に、それはやってきた。

キラ、と何かが輝くのを李通が認識した瞬間、彼女は飛び出していた。

向かう先は流浪が寝ているベット。

「!!」

向こうも気が付いたのだろう。意識を李通へと向け、そして、

「その寝顔は渡しませんよ。」

「・・・。」

二人はぶつかった。

「はっ!!」

李通は流浪のベットの布団を剥ぎ取り、それを間者に投げつけることで、視界を塞ぎに行く。

「ッ!!」

間者から、息を飲む声が聞こえ、部屋から出ていこうとする。

「逃がしませんよ。」

それを追って、李通も部屋から出ていく。

二人が出ていった室内は恐ろしいほど静かで、

「李通さんはどこまで頑張れるでしょうか。」  
男の呟きだけが響いた。

「あなたは呉ですか、蜀ですか？」  
のほほんとした声が、中庭に響き渡る。

そして、問われた間者、長い黒髪を靡かせ、月光で淡く浮かび上がるその顔は、幼さを少し残す少女の容姿を浮かび上がらせた。

「・・・。」

その少女は何も答えない。ただ、自身の得物であろう長刀を構え、李通の隙を窺っている。

「無言ですか、まあ、いいですけど。」

そう言って、李通も先ほどまで右手に持っていた短剣を左手に移し替え、右手で新たな短剣を握り締める。

「私も今回ばかりは本気でやらないと勝てそうもありませんので。」  
それに・・・。」

ダッと、李通は地面を蹴り、その間者の下へ駆ける。

「流浪様を殺そうとしたことは万死に値します♪」  
そのにこやかな笑みとは裏腹に、殺気を全身から放出させる。

「・・・。」

だが、少女は何も言わなければ、殺気や覇気、あるいは戦意などを  
出すこともない。

ただ単純に、

「はっ!!」

「・・・。」

李通の二本の短剣を受け流すさまは、まるで、

「ちっ!!」

「・・・甘い。」

日常の当たり前の動作を見ているように、淡々と行っており、それ  
だけで、李通とは格が違っていた。

「しまっ・・・。」

「さよならです。」

無表情に少女は長刀を李通に振り落とす。

――ごめんなさい。流浪様。

死を覚悟した李通は目を閉じるが、いつまでたっても痛みがやって  
こない。

「やはり、荷が重すぎましたか。」

その声に、李通は目を開ける。



その声は、李通にとって安らぎを与える声だ。

「頑張りましたね。李通さん。」

その顔は、とっても格好よく、その温もりは優しいものだった。

「・・・。」

長刀を振り落した格好で、城壁をにらみつける少女。  
その先には、

「こんばんは、お嬢さん。」

月を背に、微笑を浮かべる流浪の姿があった。

「・・・いつから、いたんですか？」

「始めからですよ。あなたが私の部屋を出て行った時からね。」  
片手で掴んでいた、李通をゆっくりと降ろしながら答える。

「・・・。そうですか。」

そう言って、少女は半歩後ろに下がり、刀身を鞘に収めようとする。  
彼女の任務は失敗。ならば、撤退するしかあるまい、そういう結論  
に至ったからこそその判断だった。

「ええ、それと、逃げれると思わないほうがいいですよ。」  
そんな様子を、暗闇のような漆黒の瞳で見る流浪。

「だって、あなたの姿はもう見つけてしまいましたから。」  
その吸い込まれるような瞳に見入ってしまい、間者に一瞬の隙が生まれる。

どこかで風を切るような音がした。

「えっ!？」

間者は、何の抵抗もできずに、地面にねじ伏せられる。  
腕は流浪に取られ、背中の上に乗られて、身動きは完全に取れなくなっていた。

「どうしたの、流浪の兄ちゃん。」  
バタバタと騒ぎを聞きつけた許緒ら警備の兵士たちがやってくる。

「ええと、許緒殿、縄を貸してもらえませんか？持っていないくて・  
。」

困ったような表情を浮かべた流浪がそこにいた。

## 第24話「刺客」(後書き)

いかがでしたか？

何か、李通の性格ががらりと変わったような・・・。

まあ、基本的に奴隷の子は流浪LOVEな子ばかりです。

感想・アドバイスを待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第25話「恋って何？」

すぐに、玉座の間には、曹操、夏侯惇、荀彧をはじめとする武官、文官らが集められた。

そして、曹操が座っている玉座の前、みな視線がそこに集まっていた。

縄で縛られたまま、座らされている一人の少女。

長い黒髪は床についており、その隣には、その少女を取り押さえた流浪が何故かその黒髪をじっと見ていた。

少女を縛っている縄には、流浪お手製の一枚の護符が付いており、簡単には縄から抜け出せないようになっている。

「その者、名をなんと言うの？」

曹操が、冷ややかな視線を向けながら、尋ねる。

「・・・。」

その問いに少女はただ、曹操を下から睨み付けるばかりで答えようとしない。

「ええい、さっさと答えぬか。華琳様の御前だぞ。」

業を煮やした夏侯惇が催促する。だが、少女はまったく態度を変えようとしない。

「春蘭、少し落ち着きなさい。それに、だいたい予想はつくわ。貴女、呉の間者でしょ。」

曹操はそう言って、夏侯淵に目配せする。

すると、夏侯淵が一人の男を引きずってやって来た。

「貴女は見覚えがあるんじゃないかしら。この男は、先ほど捕まえた呉の間者なのだけど、ちよつと探りを見れたら簡単に口を割ってくれたわ。」

曹操は勝者の笑みを浮かべる。

「だから、何なのです。貴方方に話すことなど、何もないです。」  
口を真一文に閉じ、確固たる意思を示す少女。

「呉のことを教えてくれれば、命までは取らないわよ。」

「例え、ここで私の命が途切れようと、呉を護って死ねるなら本望。」

「そう、その心意気、気に入ったわ。なら、楽に殺してあげるわ。  
春蘭、この者の首を刎ねなさい。」

曹操の命令に、夏侯惇は無言で、拔刀する。

「すまん。これも天命だと思ってくれ。」

そう言って、振り下ろそうとするが、

「あ、すいません。」

横から間の抜けた声が聞こえた。

「どうした、流浪。」

「あのですね、彼女を殺すのは待って頂きたい。」  
その言葉に一同の視線が流浪に集中する。

「それは例え、私の命令でもなの、隼人。彼女を生かす意味があるのかしら？」

あくまで、冷静に曹操は尋ねる。

「ええ、華琳の命令でも駄目です。今回ばかりは、俺としても譲れません。何故なら、俺は彼女が、その間者さんが欲しいからです。」

「「「「「え!?!」」」」」」

流浪の言葉にその場にいた全員が驚きの声を上げる。

「そ、そそそれは、つまり、お付き合いするという・・・、ぶはっ!!」

「はい、凜ちゃん、トントンしましうねー。」

少し遅れて、郭嘉が妄想をして鼻血を噴出し、血だまりを作っていた。

「は、隼人はそのお、私みたいなのより、そっちの子が良いの?」

曹操がしおらしい表情になり、若干、目を潤ませて言う。その表情を見た、夏侯惇は萌え死にしそうになったとか、ならなかったとか。

「ええ。そうですね。というより、華琳にはそれをさせるわけにはいきませんけど。」

そんな中、相変わらずの無表情で言う流浪。

「・・・隼人はその子が欲しいの?」

「ええ、俺は、彼女を欲しいですね。」

「この子の意思は?」

曹操は間者を指でさしている。当の間者は、話についていけてなく、

オロオロしている。

「いえ、関係ありません。これは完全に俺の我が儘です。その間者さんには、後で、了承を得ます。」

「ふえっ!?!」

ここでもようやくその間者は、状況を把握する。顔を真っ赤にして。

「なんか、ドキドキしてきたなあ。」

「修羅場ですね……。」

「か、華琳様、あんな男にムキにならなくても、私がいるのに。」

「流浪の兄ちゃんと華琳様は何を言ってるの?」

「季衣はわからなくていいの。」

周りの将たちも盛り上がってきている。

「どうして、私じゃ駄目なのかしら。納得できる説明をしてちょうだい。」

「説明も何も、我が主に侍女になってもらうなど恐れ多いことですし。」

「そう、侍女に……えっ!?!」

思わず、曹操が身を乗り出す。

「ええ、侍女ですよ。いや、この間の巫女服を試着してくれる相手がいなかったもので。そこに、綺麗な黒髪の少女、巫女服との相性は良いと思ひまして、ってみなさん、何で疲れたような表情なんですか?」

本当にわからないといったように小首を傾げる流浪。

「そういうことかいな、なんや、その間者に恋したと思ったのになあ。まあ、流浪やしな。好きな子とかおらんよなあ。」

がっかりしたように言う張遼。それに引き続き、ほかの将たちも溜息を吐く。荀？は安堵の表情を浮かべていたが。

「恋っているのはどういふことなんですか？」

そんな様子を見て、流浪は言う。

「おっ、流浪もそういうのに興味があるんか。男の子やなあ。」

「いえ、俺はただどういふことか分からないだけです。記憶もないですし・・・。」

「うーん、言われてみると奥深い質問やな。そやなあ・・・、どうしようもなくなることやないかいな。どうしようもなくなっって抑えきれなくなるみたいだな。」

「一緒にいたいって、思えることなんじゃないんですか。」

「胸がドキドキするみたいない感じがすかねー。」

「いまいち分からないです。」

いろんな意見が出たが、あまり理解できない様子の流浪。

「まあ、とにかくあれよ。好きかなって考えて、好きだなあって思っ、好きなんだって気づいたら、それが恋なんじゃないの。」

そんな誰かの言葉でこの話題はお終いになった。

「そ、それで私は結局どうなってしまうのでしょうか。」  
今まで黙っていた少女、間者さんが口を開く。

「まあ、あなたは隼人の着せ替え人形にでもなるんじゃないの?」  
ちよっと怒っている(?) 様な曹操であった、のかな。



「じゃあ、これで軍議は終わりよ。解散してちょうだい。」

ほとんどの者が出ていく中、曹操は一人残っていた。

いや、正確に言えば、もう一人、その後ろにいた。

すこし白っぽい肌色の肌にピンクのフリフリドレスを身に着けているその少女は、確かにこう呟いた。

「見いつけたあああ・・・！！」

その口元がニヤリと吊り上った。

## 第25話「恋って何？」（後書き）

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第26話 「巫女服とは世界遺産である」

「・・・どうして、私を殺さなかったのですか？」

その少女が、流浪の室内に入って、発した第一声だった。

「巫女服の試着を・・・。」

「ふざけないでくださいッ!!」

少女の怒声が響き渡る。

「そんなくだらない理由で私は生かされたのですか・・・、それぐらいならいっそ・・・。」

刀を鞘から抜き、自害しようとするが、

「死ぬのなら死んでもいいですよ。ただし、俺の前では死なないでください。」

あの時のような、暗闇の底を見ているような瞳でその少女を見る。

「それと、あなたは先ほどの理由では納得しないようなので言いませうけど、あの時、俺が止めたのは、今、言ったことと同じ理由ですよ。ただ、目の前で人が死んでいくのが嫌だった、それ以上でも、それ以下でもない。そう思っただけで、それ以外は何も思いませうよ。」

まあ、巫女服は別ですけど、とこれから死のうとする少女に言った。

「これで納得していただけたか、黒髪のお嬢さん。」

「・・・理解できません。どうして、あなたみたいな人が武人なのかも、どうして、そんなに優しすぎるのかも、どうして、そんな人が今まで誰かを守り続けられるのかも、何もかも理解できません。」  
刀を鞘にゆっくりと戻しながら言う。

「ですので、少しでも理解できるように、お側でその姿を見させてもらいます。」

そして、流浪の目の前で跪き、

「わが名は、周泰、字は幼平。興味がなくなったら、その背中にいつでも刃を立てるのでご覚悟を。」

そう言った、少女は意思のあるその瞳を流浪に向けた。

「では、早速・・・。」

流浪は、どこからか巫女服を取り出す。

「これに着替えてください。俺は外で待っているので、準備が出来たら呼んでください。」

上機嫌な様子で、流浪は巫女服を周泰に渡し、部屋から出ていく。

「やっぱり着ないといけないんですね・・・。」

周泰はこの世界では珍しい巫女服をいろんな角度から見て、覚悟が決まったのか、着替え始めた。

部屋から出た流浪はとりあえず、ドアの近くの壁に背を預け、いまかいまかと待っていた。

「へえ、何かいいことでもあったの、流浪。」

背後から声が聞こえた。文字通り、背後から壁をすり抜けて一人の少女が首を出していた。

世界の物理法則を完全に無視したその行動は、もはや人という域を

超えている。

「何で驚いてるの、流浪。あたしは魔女なのよ。キャハハハ。」  
笑い声と共に、クリーム色に近い金髪が流浪の首筋に当たり、流浪の背筋を嫌な悪寒が走る。

「それは誰だって、驚きますよ。それに月に飛ばされたんじゃないんですか。よく戻って来れましたね・・・。」

「だって、魔女だもの。記憶の魔女、シャロンⅡウィッチ・メモリア。」

その一言で、全部を納得させられる。

「それよりも、まずは首だけじゃなくて体全部出してください。そんな壁から首だけ出してるのを誰かに見られたら、言い訳できませんよ。」

「いいじゃない。あたし、魔女だし。」  
さも当然のように、ドヤ顔を向ける。

「魔女だし、じゃないんですよ。一応、一般の人は『魔女』なんて信じてな・・・!!」

「はい、それ以上は冗談でも言っちゃだめ。」

流浪の唇に、シャロンは人差し指を当て、口を閉じさせる。いつのまにか、体全体が壁から出ていた。

「あたしたち魔女に対して、存在の否定なんてするもんじゃないわよ。魔女っていうのはね、誰かにいてほしいって願われて、初めて存在できるのよ。」

「でも、俺は魔女にいてほしいって思ったことなんて一度も・・・。」

「だからね、あたしやフロージュも別の誰かに存在してほしいって思われてるから、ここにいられるのよ。それに、あの娘も……。」  
「あの娘……？」

「まあ、いいのよ。そんなことは。それよりも、今日の夜、時間を空けておきなさい。いい、これは命令だから。」  
そういつて、目の前から消え去るシャロン。

それとほぼ同時に、

『あのー、準備が出来ました……。』

と、流浪の部屋から消え入りそうな声が、聞こえたのを流浪は見逃さなかった。

「あ、今行きます。」

流浪は壁から、背中を放し、部屋の扉を開けた瞬間、

「あれ、流浪様？」

「……。」

流浪が何の表情もしないのに、不安げになる周泰。

「あ、あのー。」

「生きててよかったー！！！」

流浪の心からの叫びが響き渡った瞬間だった。

「凄すぎです。破壊力抜群ですね。何なんですか、あなたは。ここに真の巫女さんがあ……。その透き通るようにきれいな黒髪が、窓から差し込む朝日で反射して、さらに巫女服の白と相まって、……。ぐはっ！！ 巫女服は金髪や赤髪とも合いますが、やはり、黒のリングこれには敵うものなしということですか。しかも、露出度はそこまでないのに、この惹かれてしまうのはやはり、隠れているから

でしょうか。隠れているがゆえに、その先にあるものの神秘性が上がるというもの。更には、巫女服は若干、成長に不満がる方でも、合ってしまう、むしろ、巫女服は、ツルでペタなロリと萌えて動いているといっても過言ではないです。その点に関しては、周泰殿はドストライクですね。そして、何より巫女服が大いに愛されている理由は、巫女という神聖なものにたいする、禁断性。」

「あのー、流浪様。」

暴走する流浪を止めようと声を掛けるが、まったく効果がない。

「まあ、要するに巫女服は、愛でてよし、触ってよし、埋まってよし、着せてよしの最高のアイテム、男のロマンである。」

「る、流浪様・・・？」

若干、いや、結構引いた様子、というより少し怯えた周泰がそこにいた。

「あ、どうしましたか？」

どうやら元に戻ったようだ。

「いえ、流浪様がどこか遠くへ行ってしまったかと思ったもので。」

「まあ、これは作者の欲望のようなものですからね。ちよっと体を貸していました。」

「？」

いや、これは断じて作者の欲望などではない。これは、流浪の嗜好である。むしろ作者は、巫女服より、ニーソックス萌えである。まあ、この話は別の機会に。





**第26話「巫女服とは世界遺産である」(後書き)**

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第27話「温もり」

「♪」

周泰の巫女服を存分に鑑賞した流浪は、上機嫌に廊下を歩いていた。

「流浪様、なんだかご機嫌ですね。」

その隣を歩いているのは、手に数冊の書物を抱え込んだ流浪隊の軍師、劉曄である。今日も絶賛勉強中のようなのだ。

「目の潤いになりました。」

ちなみに、劉曄ら流浪隊の面々が、流浪が巫女服萌えであるということを知るのももう少し後のことである。

「そうなのですか。私も勉強で疲れたときに流浪様の見たものを見て、目の保養をしたいです。」

そう言う劉曄。その眼の保養になるものが、巫女服であるとは思うまい。

しばらく歩いていくと、程？の部屋に前にまでたどり着く。

「では、流浪様。私は風様に勉強を教えてもらうので失礼します。」  
ペコリと頭を下げて、程？の部屋に入っていく劉曄。

劉曄と別れた後、何をしようかと、ぶらぶらする流浪。今日は流浪は休みなので、流浪隊の鍛錬を行おうと思ったのだが、先ほどから誰とも会っていないのでどうしようもない。

いつもなら、虚空に呼びかければ出てくる李通でさえ、今日は音沙汰なしだ。

「何をしましょうか．．．。」

「あ、隼人じゃない。探したのよ。」

流浪がふらふらしてくると、前方から凜とした声が上がる。

「華琳ではないですか、ってどうしましたか。」

「いいからついてきなさい。今日、隼人は休みでしょ。」

曹操は流浪を見つけるなり、腕をとり、引っ張っていく。心なし、曹操の頬が赤いのは気のせいだろうと流浪は思う。

「いや、今日は徐晃さんたちの鍛錬をしようかと．．．。」

「彼女たちから了承はとってるわ。だから、今日は彼女たちと会ってないでしょ。それに、私と一緒に行動するのは嫌なの？」

若干、高圧的に言うが、その表情はどこか不安げだ。

「嫌じゃないです。」

主にそんな顔されたら、断れるわけがないじゃないですか、口には出さずに流浪は思う。

「そう、ならついてらっしゃい。」

曹操は安堵の表情を浮かべ、握った手を少しだけ、ギュツとし、歩き出した。

「それで、何故、俺は城壁の上から落とされようとしているのです

ようか？」

流浪の眼下に広がるは、城下町。そこは、人々が往来しているわけで、本当に蟻んこみたいに。

「・・・罰よ。」

曹操はぼそりと呟いた。その手にはなぜか、縄を持っており、その先にはぐるぐる巻きにされた流浪がいる。

「罰？」

「ええ、あなたが、他の女に目移りしたからよ。」

曹操はぷいっとそっぽを向き、言う。

「？」

だが、流浪はさっぱり状況を把握できていない。

「だから、その、隼人が言うなら・・・巫女服ぐらい着てあげるわよ。」

消え入りそうなほど小さな声で、曹操は言う。

「あの、華琳。何か言いましたか？」

「な、何でもない、こともないわよ。」

更に、顔を背ける曹操。

「あのー、やっぱり落とされるのですか？」

曹操の顔を覗き込むように、と言っても下手に動く~~と~~即落下という状況なのだが、流浪は慎重に覗き込む。

「落とされたいの？」

「・・・（ブンブン）」

「じゃあ、私が怒っている理由がわかる？」

「・・・（ブンブン）」

「やっぱり、落ちたい？」

「・・・（ブンブン）」

『華琳様の巫女姿が見たいですかー？』

「・・・（コクコク）」

あれ？

『そうなのですかー。良かったですねえ、華琳様。』

「つて、風、なんであなたがここにいるのよ!？」

いつの間にか、曹操の後ろに現れた程？。

「いやー、書物を取りに行こうとしたらですねー、おふたりをお見かけしたのですよ。」

「まあまあ、良いじゃないですかー、それよりも、華琳さま、千載一遇の好機ですよ。」

口に手を当て、笑ってどこかへ行ってしまう。

残された二人の間に何とも言えない空気が流れる。

「・・・。」

「・・・。」

「もういいわ、隼人来なさい。」

曹操は手に持った縄を引っ張り、歩いていく。

その歩調に合わせるように、流浪も歩く。

「ちょっとここで待ってなさい。」

そう言っ、曹操は流浪を自室のドアの前に置き、部屋に入っ、く。

しばらくすると、部屋のドアを開けて、曹操が現れた。

「ど、どうかしら？」

そう言っ、流浪に巫女姿を見せる曹操。若干、恥ずかしさで顔を赤らめてゐる。

「・・・。」

「な、なんか言いなさいよ。」

「・・・綺麗です。」

ポツリと流浪は呟いた。

「ああもう、行くわよ。恥ずかしいったらありやしないわ。今日は一日付き合ってもらおうわよ。」

そう言っ、彼女はいったん部屋に戻り、元の服装に着替えて出てきた。

その後、曹操は日が暮れるまで流浪を連れまわした。

服屋に行ったり、露店で点心を食べたり、本屋に入ったりした。

そして、夕焼けの空の下、流浪が言っ、

「ちょっと来てもらえませんか？」

ここに来て、始めて流浪が自分から行きたい場所を提案した。

そこは、ある丘の一角だった。  
そして、流浪はそれの前に座る。

目の前には地面がこんもりと膨らんだところに、数個の墓石が立っていた。

「隼人……。」

「これは、この間の戦で死んだ俺の部下です。」  
流浪の背後に立つ曹操からは、顔を墓石に向けた流浪の表情は窺えない。

「今日、周泰殿に言われました。どうして、そんなに優しいんだって、どうして、誰かを守り続けられるんだって。」  
その声は微かに震えていた。

「俺はそこまで完璧じゃない。欠陥品なんですよ。ここで眠っている方を助けてあげれなかった。」  
その墓石にぽつりと滴が零れ落ちる。

ポツ、ポツ、ポツ……

二つ三つと次々に落ち、やがて、それは勢いを増して落ちてくる。  
そして、それは雨と同化した。

「あの時、こうすれば……、そしたら、助けてあげられたんじゃないかってそんな後悔ばかりがやってきます。」  
服がぬれるのも気にせずに流浪はただ、体を震わせる。

「俺は優しくなんかない。ただの偽善者なんですよ。」

流浪は言う。

—ごめんなさい、助けてあげられなくて。

—ごめんなさい、未来を奪ってしまつて。

—ごめんな．．．

「．．．何してるんですか、華琳。」

「．．．。」

流浪は、背中にかかった重みを感じる。

「もういい、もういいのよ．．．。」

流浪の頭に小さな手を置き、ゆっくりと撫でていく。

「隼人は．．．頑張ったから。」

優しい言葉。流浪の雨で冷え切った体が、温まっていく。

それは心の底から安心する温もりだった。

「生者には希望を。死者には安らかな眠りを。」  
どこかで、そんな声が聞こえたような気がした。



## 第27話「温もり」 (後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

## 第28話「世界の秘密」

雲が出ていて、月も星も見えない夜、流浪の元に来訪者がやってきていた。

「迎えに来たわよ。流浪。」

流浪の部屋に突然現れた少女、『魔女』シャロンⅡウィッチ・メモリアはいつも通りのフリフリの白のゴシッククロリータを身に纏い、嬉しそうに言った。

「では、行きましょうか。」

そう言っ、シャロンは指をぱちんと鳴らした。やがて、流浪の視界には靄がかかっていき、何も見えなくなった。

そして、流浪の部屋には誰も残らず、ただ、包帯に包まれた一本の大鎌だけが残されていた。

「さっ、着いたわよ。存分に楽しみなさい。闇夜の最高の舞台を。」  
シャロンの声と共に、靄が消えていき、視界が鮮明になっていく。

そこは、どこかの部屋だった。

部屋には明かり一つついておらず、完全に闇だった。周りにどんな家具が置いてあるかさえ、十分に把握することはできない。

ただ一つ、確実にわかることは、周りよりも少しだけ明るくなっている寝台、その上で寝ているその少女は流浪の主、曹操であるということだった。

「クスクスス．．．、人間界の時間的にはおひさしぶり、といったほうがいいのかしら、流浪。」

闇が、一人の少女を作り出す。黒髪を腰のあたりまで伸ばしたストレートヘアと、漆黒のドレスを合わせ持つその少女もまた、『魔女』である。その少女の名を、フロージュと言う。

その少女はおもむろに近づいてきて、寝台で寝ている曹操の顔を覗き込む。

「へえ、この少女が．．．。世界は思ったよりも残酷ね。」  
本当に残酷だわ、と。

そう言いながら、機械的なほどに無機質な表情を浮かべて、シャロンの隣に立つ。

「それで、俺は何故ここに呼び出されたのですか？お二方が用でもあるんですか？」

流浪はそんなやり取りに、何の違和感も、否、違和感だらけのこの状況を把握しようとする。

「今回、私たちは用はないわ。」

「そうね、今回は見物人。用があるのはあの娘よ。」

二人は、一步後ろに下がって、虚空を指さす。

そして、その闇が再び、人の形を作り出した。

「お久しぶりですわ。隼人様あ。」

ピンクのフリフリドレスのスカートの部分を摘まんでお辞儀をする少女。すこし白っぽい肌色とその整った容姿は非現実的なほどに美しい。

「あなたは誰ですか？」

「ふふ、今のあなたにそれを言われるのは分かっているけどやはり辛いものですね。でも、それも今日まで。私の名前は、ウィッチ||リス・クロノア。『魔女』にして、『魔女』では無くなるものです。」

そう言って、少女、リリスは声高らかにこう宣言する。

「さあ、一緒に世界を改変しましょう。『一之瀬隼人』。」  
指をぱちりと鳴らした。

ぐらりと視界が反転した気がした。

それでも、必死に抗おうとした。だけれども、俺は泥沼のように沈んでいき、

「心配はいらないからね、ちゃんと間に合わせるから。」  
誰かのそんな声と共に意識を手放した。

「いてて、頭がぐらぐらするって、ここは何処なんだ？」

「こんばんは、隼人様。ここは、あなたを飛ばした世界。必要最低限な記憶は思い出せるはずですよ。それよりも、ご気分はどうですか？」

リリスは、『一之瀬隼人』に話しかける。

「ああ、だいぶ楽になってきた。それにまあ、記憶のほうも少しはここで寝ている女の子が、あの曹操なんだろ？」

『一之瀬隼人』は寝台で寝息を立てている少女を見ていう。

「ええ、それよりも、あなたはどこまで思い出せそうですか？ゲーム盤の上の駒としての。」

「どこまでって、あれか、この世界の北郷一刀だっけか。その男を毎回この世界に連れてくるやつを見つけろってやつだったか？」

『一之瀬隼人』のその回答に、リリスは少しの笑みを浮かべる。

「そう、ここまでは上々ね。フロージュ卿、この世界への『糸』<sup>パス</sup>の書き換えは大丈夫そう？」

「ええ、すぐにでも大丈夫よ。」

離れた場所で、フロージュは腰を下ろしたまま、答える。フロージュ卿の肩には、目をつむって、頭を預けているシャロンの姿もある。

「あら、シャロンったら寝ているのかしら。まあ、いいわ。あの子には特別仕事はないし。」

興味を無くしたように、視線を『一之瀬隼人』に戻す。

「受け取りなさい。」

そう言って、リリスは短剣を『一之瀬隼人』に手渡す。

「これで、北郷一刀を呼び寄せている黒幕を殺してくださいね、隼人様。」

「ああ、悪いが俺は誰が黒幕かは知らないぞ。」

「そこはご心配には及びません。もうすでにこちらで見つけましたから。」

「見つけた？」

「そこで眠っている少女、曹操こそが黒幕なのですよ。」  
この空間の温度ががらりと下がったような気がした。

「へっ？この女の子が？」

「ええ、考えてみれば簡単なことでした。ここ数十回の外史を見ましたが、ある外史においては共通の終わりを遂げていた。それは北郷一刀が魏に落ち着く外史。北郷一刀は、魏へ来れば、何が起ころうとも絶対に赤壁の戦いの後には、消えてしまう。」

「そんなことがあったからでしょうね。その少女はその先を願ってしまった。北郷一刀に帰ってきてほしいと。その思いが、強固な『糸』となり、この世界とあの男を結びつけた。それに答えるように動いている管理人もいたようですけど。でも、これが真実であり、この世界の秘密です。」

そう言って、リリスは、『一之瀬隼人』の目を見つめる。その眼はあらゆるものを吸い込む。

「私はその『糸』を書き換える。だから、曹操を殺してください。」

「それは、無理……。」

「あたりと電池が切れたロボットのよう<sup>に</sup>に倒れこみ、動かなくなる。」

「あなたに拒否権はない。だってあなたを作ったのは私だから。」  
ゆつくりと、機械的に『ソレ』は起き上がる。

「……分かりました。」

その眼は虚ろで、曹操の寝台の前にまで来て、手に持った短剣を振りかぶった。

## 第28話「世界の秘密」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

次回は流浪の過去編です。

次回もお楽しみに。



## 第29話「儂く、悲しい物語」

今から、話すこの物語。

この世界はどこまでも残酷で、そして、儂く、悲しい物語。

僕はこの世界には興味がなかった。というよりも、世界を知らなかった。

毎日決まった時間に、与えられる残飯。

売り物として、外に並べられる日々。

人では無く、物として扱われる奴隷としての人生。

そんな毎日が一生続いていくと思った。もう、それでいいとすら思えた。

でも、そんな世界に暖かな光がさした。

その少女との出会いは、凄く晴れ渡った日のことだった。

じいー、とこちらを見てくる少女がいた。

綺麗な金髪の同年代ぐらいの少女は、僕とは違って本当に綺麗な人だった。

身に着けているものも、風格もどこかの王族を思わせていた。

また、馬鹿にしに來たのか、僕はそう思っていた。  
こんなことはよくある。奴隷である僕は周りから嗤われ、蔑まれていた。

だから、その少女の言葉が信じられなかった。

『私、この子気に入ったわ。良い目をしてる。』

『貴方の名前は何ていうの？。』

その少女は無垢な笑みを浮かべていう。

――名前？ 僕にそれはあるのだろうか？

『じゃあ、私がつけてあげる。』

『私は流華<sup>るか</sup>。貴方の名前は隼人よ。』

偉そうに少女は言った。

――隼人……。

『ハヤブサみたいにいつでも私の下にやってきてくれるように。』  
そう言って、彼女はお日様のように眩しいばかりの笑顔を見せ、

『さあ、行きましょう。』

僕にその手を差し伸べてきた。

僕はその手を握った。その小さな手は、とても暖かだった。

その少女、流華様は僕のいた国のお姫様だった。  
僕は流華様に引き取られ、いつも彼女のそばにるように命じられた。

だから、僕と流華様はいつも一緒だった。

流華様は料理も、勉強も、剣術も何でもできて、

『隼人、あなたは私を守る王子様になるのよ。』

――え？僕にはできないよ。

『大丈夫よ。私が教えてあげるから。』

――なら、出来そうだよ。

『そう、なら今日からこれがあなたの武器。』  
そう言って、流華様は大鎌を一生懸命に抱えて持ってきた。

――ええ、大きくて、使いづらいよ。

『あなたは私を守ってくれるのよ。これぐらいかっこいい武器じゃないと。』

いつしか、僕は流華様に憧れを抱いていた。

『ほら、見てごらんない。』

流華様は鍛錬が終わった後にいつも町のはずれにある丘に連れて行ってくれた。

『この景色を見れば、自分たちの悩みなんてちっぽけなものって思えてくるでしょ。』

夕日で茜色に染まった空は何処までも続いている、世界の広さを思い知らされる。

『ね、だから隼人は笑ってない。悲しいことがあっても、最後に笑えればいいのよ。』

奴隷だったころとは変わった、今となってはいつもの日常。

それはとても平穏で、

そんな、日々が続くと思ってた。

『ねえ、隼人。私は流華って言うの。』

いつもの丘から、日が沈んでいくのを二人で見ていると、流華様が言った。

――そんなの知ってるよ。どうしたの？急に。

『確かめておきたかったのよ。』

――？

多分、この時、彼女はこれから起こることを予想していたのだろう。

『私とあなたはずっと一緒よ。』

少女は優しい笑みを浮かべながらこちらに手を伸ばしてくる。

――それって『プロポーズ』？

『そうよ、それぐらい分かりなさいよ。』

流華様は少しムツとしたように頬をふくらます。

――ごめん。

『いいわよ。それで、返事は？』

僕は差し出された手を握っていた。

けれども、世界はどこまでも残酷で。

平穏な日常は音を立てて崩れていきました。

「第一王女、流華・ユーフェミア。この者を反逆の容疑で指名手配する。」

いつから齒車は狂い始めていたのだろうか？

それは、誰にも分からなくて、

ただ、崩れていきました。

それは、ほんの些細な出来事と、純粋な悪意によって引き起こされた。

きっかけはこの国と隣国が戦争をし始めたことだった。

別に、そこまで騒ぐほどのことじゃない。隣国とは仲が良くないのは分かっていたし、近々戦争がおこることも誰の目から見ても明らかだった。

だから、今の国王、つまりは流華様の父は『戦い』では無く、『共存』という方法をとろうとしていた。

民への被害を最小限に抑えるための策だった。

だが、これに異を唱える者もいた。軍部の者たちである。自分たちの活躍の場を奪われた彼らは王とその他重鎮らを殺害、だが、ここで一つ問題が起きた。

第一王女、流華様が城から行方をくらましたのだ。

これに、脅威を抱いたのは軍部のものだった。民には王達の死は隠していたが、民からの信頼も厚い流華様が真相を喋ることを恐れての行動であった。

そして、僕は暗い地下牢へと閉じ込められた。

流華様のそばにずっといたからだろう。

閉じ込められて、何日たっただろうか。毎日、食事が与えられて、死ぬことはなかった。

そんなある日、何故だか、牢屋のカギが開いていた。どうやら看守の誰かが閉め忘れたらしい。だから僕は、そこから抜け出した。

大鎌を背に担ぎ、僕は走った。まだ、流華様は見つかっていないようだった。

だから僕は、会いに行こうと思った。

訪れたのは、いつもの丘だった。

もしかしたら、そこにいるかもしれないとなんとなく思ったからだ。

そして、彼女はそこにいた。いつものように、凜とした姿をしていた。

だが、

『鎌を抜きなさい。隼人。』

――え!?

『いいから、早く抜いて。』

僕は言われた通りに鎌を抜いた。

この時、僕は気づいておくべきだったんだ。

ゆっくりと、流華様は僕の下に歩いてくる。

そして、僕の目の前にまでやってきた。

『遅い、遅いよ。来るのが。』

小さな声で、彼女は言う。

――ごめん。流華様。

『本当に遅すぎるよ……。だから、罰として、私のことを流華って呼び捨てで言いなさい。』

――なんで? 呼び捨てだなんて、恐れ多いよ。

『良いから早く言いなさい!!』

――ごめん、る、流華。

『うん、それでいい。もう、十分だから。』



流華は何故か泣いていた。

『ありがとね、私の王子様。』  
彼女の唇が僕の唇を塞いだ。

そして、そっと優しく彼女は唇を離す。そして、

『もう、お別れだから。』

そう言う、彼女の頬には涙が走っていて、

『私は隼人なんて、大嫌い！！貴方も私のこと嫌いなんですよ。だから、私を殺して。そして、貴方は幸せになって……。』  
最初は声を大きく張り上げ、最後は僕にしか聞こえないほど消え入りそうな声で言って、

『鎌を向けて。』

流華に言われるままにそうしたら、

『大好きだよ、隼人……。』

優しく僕を包んでくれそうな声とお日様のような笑顔と共に、

彼女は僕が持つ大鎌に自分の体を突き刺した。

そして、視界は真っ赤になった。

これは何だ？何だ？訳が分からない。何で何で．．

流華が死ぬんだ。

流華が、完全に力の抜けた流華の体が僕の胸に倒れてくる。  
その体は冷たくて、

だから僕は、

彼女は二度と戻ってこないのに、

生き返ってほしいと、

もっと一緒にいたいと、

愚かにも

願ってしまったのです。

「よくやった、隼人。」

背後からそんな男の声と共に、数十の足音が聞こえてくる。

その男は軍部の人間で、男たちが彼女を、流華に触ろうとして、

鍵が開いていたのは、偶然ではなく必然で、

僕が誰にも会わずにここまで来れたのは、隠れてついて来られたからで、

流華の行動は、軍人から僕を助けるためで、

それらすべてを理解した僕は、何も考えれなくて、

そして、

そして、

気が付いたら、そこは血の海になっていたんだ。

立っているのは、僕とピンクのフリフリドレスの女の子だけ。



その子は言いました。

「あなたの願い叶えましょう。」

そして、僕は気を失った。

## 第29話「儂く、悲しい物語」（後書き）

いかがでしたか？

時間軸的には三国時代よりもずっと後のことですが、この作品の始まりといっても過言ではない話です。

感想・アドバイスを待ちしております。

次回もお楽しみに。

### 第30話「願いを叶えるために」

「迎えに来たわ、流浪。」

一人の少女がいる。

――誰？

「私はどうだっていい。それよりもこれを見なさい。」

僕の脳裏に、いや、視界に、どちらかわからないが映像が映る。

そこには、僕が短剣を持って振りかぶっていて、その先には、寝台で眠る華琳がいて・・・

「流浪、これはあんたが全て望んだことなのよ。リリースがああして  
るのも、すべてはあんたが流華と一緒にいたいと願ったからなのよ。」

――僕に何ができるんですか・・・。

「いいの？このままで。流浪が願ったことなら、それを覆すのも流浪なのよ。」

――いいじゃないですか。

何かがおかしい。

「何もしなければ、流浪、あんたはまた失うのよ。」

――もう嫌なんですよ。戻りたくない。逃げたい。閉じこもりた

い。

華琳を守ると決めたはずだったのに。

「だったら、全部失いなさい。」

そこから、少女が離れていく。

――嫌だ、それは嫌なんだ。もう何も失いたくない。

そして、俺は離れていくその手を握り締めた。

「それでいいのよ。」

不思議の国に迷い込んだアリスも、竜巻で見知らぬ土地に飛ばされたドロシーも、

強くなって、最後は一人で還っていったのだから。

流浪、あんたも大丈夫よ。

「繋がった。」  
ニヤリと、フロージュの肩に体を預けていた、もう一人の『魔女』が笑った。

「・・・！！」  
ピタリと短剣を振り下ろす手が、止まった。

「何やってるの！？早くその手を振り下ろしなさい。」  
リリースは様子がおかしくなった『ソレ』に何度も指示を出すが一  
向に振り下ろす気配はなく、その手は空中で何かに抗うようにただ  
震えている。

だが、力の抜けたように、その右手が、短剣を持つ手が、降ろされ  
る。

「我が主に・・・。」  
『ソレ』の口が動き出す。

「華琳に手を出すなああああ！！」  
流浪が右手に持っていた短剣は一直線に曹操の喉元を刺そうと向か

うが、その軌道上に自分の左腕を出すことで、勢いが止まることない短剣が自分の左腕に刺さる。

「もう、何も失いたくないんですよ．．．。」  
ギロリと流浪はリリースを睨み付ける。

「なんで、なんで、隼人様がそんな顔を．．．、私はあなたが願ったから．．．。」  
一歩、また一歩と下がっていきリリース。その顔はどんどん苦しげなものに代わっていく。

「もう止めにしましょう、リリース。」  
「あんたはもう負けたのよ。今が引き際よ。」  
流浪と曹操を庇うように、リリースの前に二人の影が立ち塞がる。

「何よ、フロージュ卿にシャロン。あなたたち、私を裏切るの．．．！？」

「裏切りじゃないわ。これは『ゲームマスター』の命令よ。」  
ゲームマスターという言葉聞いて、リリースの眉間に皺がよる。

「あのいけ好かない男の言うことを聞くの、冗談じゃないわ。こんなところで、こんなところで．．．。」  
プチン、リリースの中で何かが切れた。

「あー、もう考えるのも面倒だわあ、だったら、私に齒向かうもの全てを屈服させればいいじゃない。そうよ、ねえそう思うでしょお、隼人様ああ！！」

その瞬間、流浪の背筋に悪寒が走る。

「シャロン！！」

「分かってるって。」

シャロンは飛び出してきた、リリスを迎撃するように、手をかざす。それでも、リリスの勢いは止まることはない。

「私は『殺戮』の魔女なのよ!! あんたみたいな、記憶の魔女に戦闘で止められるとでも思ってるのおお!!」

数千の刃がリリスの周囲から飛ばされ、シャロンの体を切り刻もうとする。

「確かに私は、戦闘向きではないけどね・・・。」

シャロンも刃を打ち落としていくが、打ち逃した何重もの刃が、次々と体を刻んでいく。

「もう一人の『魔女』も忘れないでくれるかしら?」  
シャロンの背後から、召喚の魔女が笑った。

その瞬間、一本の赤い糸が、リリスへ向かっていく。

「言ったでしょ。『糸』<sup>パス</sup>は準備できてるって。」

刃の嵐の中をすり抜けるように、一本の赤い糸は曲がりくねる。

そして、それがリリスの胸に繋がった。

「地獄で反省することね。」

フロージュは自分の手から伸びたその糸を断ち切った。

その瞬間、リリスの姿が掻き消える。

「ふう、助かったあ。」



力が抜けたように座り込むシャロン。真っ白のドレスはところどころ刻まれ、血が滲んでいる。

「本当……疲れたわ。もうこりごりだけど、そうも言ってもらえないわね。」

フロージュもふらりと寝台の端に腰を下ろす。

「えっ？地獄に飛ばしたんじゃないの？」

驚きの顔をするシャロン。

「飛ばしたけど、あの子、消える間に小細工してたのよ。この世界に『糸<sup>パス</sup>』を繋げてたわ。まあ、あの子のは雑だからここに戻ってくるまでに、三か月はかかりそうね。」

「糸<sup>パス</sup>って何ですか？」

ここまで、無言だった流浪が尋ねる。

「シャロン。説明を。」

「ええ、フロージュ卿がしてよ。私よくわかんないし。ああ、早く紫蘭<sup>しらん</sup>君に会いたいよ。」

そう言って、駄々っ子のようにシャロンは体を揺する。その時に傷口が開いて、更に血が滲んでいたが気にする様子はない。

「仕方ないわね。面倒だけど、話してあげる。今までのことは、すべて、流浪と流華を引き合わせる為の儀式の様なものよ。ただ、あんたがいた世界では流華は死んだ、と人々に『認識』されていたから、向こうでは流華は蘇らなかった。」

「たがら、別の世界、つまりはこの外史で行うことにした。この世界ではそもそも流華という存在はいないから、『認識』の仕様もないからね。でも、いろいろと準備もいるのだけれど。」

そう言って、フロージュ卿は、曹操のそばに行く。

「流華はこの世界で呼び出せるとして、流浪、あんたをこの世界へ送る必要もあった。あんたの記憶や意志はシャロンが持ってきた。そして、それを入れる器、つまりは肉体ね。それは、『一之瀬隼人』の肉体を借りることにした。名前が同じだからよ。名で縛る、憑依なんかではよくある話ね。それに、彼の影響であんたの一人称は「僕」から「俺」に代わっていたでしょ。」

「そこまではよかったのよ。ただね、この世界では一つのイレギュラー要素があった。すでに、ここではあってはならない強固な『糸』が出来上がってしまったていたのよ。そもそも、『糸』というのは、世界と人や物を結びつけるもの。生まれた瞬間から、生まれた場所と『糸』は繋がる。だから、その世界で寿命がある限り存在することが出来る。」

「でも、あんたや北郷一刀、それに流華は『糸』を持ち合わせていない。だって、この世界とは別の場所で生まれたからね。だから、北郷は天の国に還ってしまうのよ。まあ、想いの強さが『糸』を作り出すようなこともあるようだけれど。」

「だから、リリスは貴方達にも『糸』を付けることにした。曹操と北郷の『糸』を書き換えてね。北郷の部分を流浪、あんたに代えて。」

「でも、それなら、流華の分はどうなるんですか？」  
「淡々と説明していくフロージュに流浪が尋ねる。」

「それは簡単よ。『魔女』という力の媒体を『糸』に変換して流華の肉体、精神、記憶その他もろもろをこの世界に縛り付ける。そして、その力の媒体こそ、リリスよ。もちろん、自らを『糸』それも

肉体も精神も記憶もすべて縛るほど強固なものにするなら、自身の存在の消滅も覚悟しないといけないわね。でも、リリスはそれをやろうとした。あんたの願いを叶えるために。足りない力を私たちに頭を下げてまで借りてね。」

そう言って、フロージュはほんの少しだけ微笑を浮かべる。

「だからあの娘を、リリスを恨まないでほしい。好きになれ、仲直りしろとは言わないけれど、あの娘の覚悟を、貴方への思いを汲み取ってあげて。私たちが言えるのはそれだけよ。」

そう言って、流浪の短剣が刺さった手の上に、フロージュは自分の手をかざす。

すると傷口が治っていく。

「この部屋で起こったことは、私たち以外は気づいていないし、眠っている彼女も気づくことはないわ。それと、あんたの記憶ももう一度、消すこともできるけど、どうする？」

「いえ、消さないでください。この記憶も俺の一部なので受け入れていきます。」

その瞳にしっかりとした決意を込めて、流浪は言う。

「そう、じゃあ、帰るわよ。シャロン。」

「あ、終わったんだ。」

「それじゃあ、流浪の部屋に今から飛ばすから。」

そして、シャロンは立ち上がり、指を鳴らす。その少し前に、

「あんたにはその子がいるようだから、せめてその子だけは守ってやんなさいよ。」

シャロンがそんなことを言った気がした。

**第30話「願いを叶えるために」 (後書き)**

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

次回もお楽しみに。

### 第31話「紫蘭・・・次回作の伏線だったりするのかな」

「流浪殿、朝議のほうはどうでしたか？」

ある日の朝、流浪隊の徐晃は部屋に戻ってきた流浪に尋ねた。

「いつもどおりでしたよ。あと、周泰殿の今後の扱いについても決定したようです。」

流浪はそう言って、流浪のベッドで寝ている周泰に目を向ける。

「さすがに侍女として引き取ったでは、今回のように華琳の重臣たちが納得しない。ですので、彼女はおそらく捕虜としての扱いを受けることになるでしょうね。それに、野放しにするわけにはいかなと。具体的に言うなら牢屋に入れてくれ、ということですね。」

流浪は眠る少女の黒髪を手ですくう。

「もっと早くにそうするべきでしたね。予想は出来ていたはずなのに……。」

その少女の腕には、包帯が巻かれていた。

時間は昨日に遡る。

「周泰殿、書簡を荀？殿と、程？殿に届けてもらえますか？」

「分かりました。」

仕事として渡されていた書簡の束を流浪は指さして言う。

「私もお手伝いします。」

流浪の部屋に来ていた李通も、周泰と一緒に書簡の束を抱える。

あの夜の暗殺騒動から、数日が立ち李通と周泰は互いの強さを認め合い、仲良くなっていた。

そのため、二人でたびたび行動することも多くなり、流浪隊の他のメンバーとも交流できている。

「それじゃあ、二人とも、よろしくお願いします。」

流浪はそう言って、二人を見送った。この時、流浪が付いて行っていれば、事態は変わっていたかもしれない。

「流浪様、大変です、明命ちゃんが・・・。」

突然ドアが開かれたと思うと、慌てた様子の劉曄が入ってくる。

「襲われました!!」

「すぐに、周泰殿のところへ案内してください。」

流浪は急いで部屋を出ていく。

どうやら、周泰と李通が書簡を届けて帰る途中、何者かに襲われたらしい。

何でも、飛んできた矢が周泰に刺さったとのことである。

そして、負傷した周泰を衛生兵に任せて、李通は襲撃した犯人を追っている、劉曄から移動中に流浪は話を聞いた。

「徐晃さんにも連絡を。周泰殿に手傷を負わせるほどの者です。万が一に備えて、彼女を李通さんの補佐に回してください。それと、劉曄さんは他のメンバーで警備隊を作って見回りを。」

「御意です。」

途中で劉曄と別れる。

しばらく走っていると、数名の衛生兵たちの姿を見つける。

「周泰殿の傷の具合はどうですか？」

「あ、はい。矢が腕に刺さっていましたが、毒などは塗られていないので命にかかわるものではありません。ただ・・・、この刺さっている矢は魏でしか作られておらず、それも夏侯淵様の弓兵部隊で使われているものでして・・・。」

衛生兵が気まずそうに言う。

「そうですか、周泰殿から下手に目を離すとまずそうですね。まだ、捕まっていないですし。とりあえず、彼女は俺が責任を持って保護します。」

そう言って、周泰を抱きかかえ、といよりお姫様抱っこして、立ち去っていく。

そんな流浪を離れた場所から見つめる影が二つあった。

「ねえ、紫蘭君<sup>しらん</sup>。死の気配を感じ取れた？」

クリーム色に近い金髪、ショートカットの少女が、隣の少年に尋ねる。

「女の子のほうは感じ取れて、さっき矢を撃って解呪したけど、男の子のほうはもう駄目だよ。彼は、多分死ぬね。死期は3か月後かな。」

対して、灰色の髪少年は城壁の上に座り、足を虚空に投げ出した姿勢で言う。

「3か月後ねえ、というと、ちょうど赤壁のあたりかな。」

「シャロン、何を言ってるの？赤壁で何かあるの？」  
隣にいる少女の顔を覗き込む紫蘭と呼ばれた少年。

「あんまり、覗き込まないで。恥ずかしいよ……。」  
両手で顔を隠そうとする少女。

「でも、紫蘭君は知らなくてもいいことだから気にしないでっ。それに、死の匂いあるところに紫蘭君だから、自ずと向かうことになるよ。」

そう言って、少女は笑いかけた。

流浪は自室まで戻ってきて、自分のベットに周泰を寝かせる。

「許劭さんいますか？」

「……御意かなあ、ふわあ。」

流浪の前に現れるが、欠伸までして眠たそうな許劭。



「ちょっとお昼寝してたのです。」

そう言う、許劭の手には流浪から盗んできた枕が握られていたが、流浪はそこには突っ込まない。

「もう気づいていると思いますが、この件、許劭さんはどこまで知っていますか？ 矢が夏侯淵殿のところのらしいのですが。」

「ほえ．．．、うーん、明命ちゃんを狙った犯人ですか？ 分かんないかな。でも、夏侯淵様のところの隊ではないかな。みんな、訓練中だったのです。」

コクコクと確かめるように頷きながら、許劭は話していく。

「それとですね、まだ、犯人が捕まったっていう報告はないかな。

あと、曹操様らもこの騒ぎに気付いて、朝議で話すつもりのようなですよ。」

そして、許劭の言葉通り、朝議で周泰のことが議題として持ち上がった。

警備体制の強化等が決定したが、その最中、周泰の扱いについての意見が出される。

内容としては、呉の隠密の少女を現状のように、牢屋に入れず侍女として自由に行動させるのは駄目だろうというものであった。

この意見に、暗殺騒動後の軍議にいなかった文官、武官たちが賛同し、一時は周泰の首を刎ねろ、ということまでなったが、流浪と曹操の説得の下、それは回避することができた。

だが、現状のままというわけにはいかず、牢屋にいれて、監視という形になった。

それでも、牢屋に入った後は、流浪たちが交代で会いに行っていたが、これはまた別のお話。

**第31話「紫蘭・・・次回作の伏線だったりするのかな」(後書き)**

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

### 第32話「収穫祭」

「お祭り何てどうでしょう？」

朝議の場で程？は声高らかにそう提案した。

「風達はここに来る前に、凜ちゃんと各地を回っていたのですが、その時に収穫を祝うお祭りというのがあったのですよ。」

「時期的にも収穫の時期ですし、民の忠誠、並びに商人たちを集めることで町を活気づけることにもなり、戦闘続きの兵士たちの急速にもなるかと思います。」

程？と郭嘉がお祭りというものを説明していく。

そのお祭りというのは、夜に行い、屋台を出して、食べたり飲んだりして楽しむものだという。

夜に行うので警備のほうを嚴重にしなければならないが、農民、商人、兵士、子供から老人まで幅広く楽しめるという点を強く主張していた。

「それは良いわね。桂花、予算的にはどうかしら？」

「問題ありません、華琳様。『数え役萬☆姉妹』の舞台も設ければ、一層盛り上がるかと。」

「そうね、彼女たちを許昌に呼び戻しなさい。祭りの開催は2週間後でいいかしら。それまでに、商人たちへの呼びかけ、出る屋台の数、警備の配置場所などを決めておくように。以上。」

曹操の閉めの言葉で朝議は終了した。

そして、お祭りの日。

「流浪様、お店がいっぱいですよ。」

「うわゝ、流浪様、何かおごってくださいよおゝ。」

「・・・流浪殿、周囲に危険はありません。」

流浪隊の劉曄、李通、徐晃はお祭りの様子に目を輝かせていう。

「何か欲しいのがあったら買っていていいですよ。それと、徐晃さんは今はお祭りですから、そんなに気を張る必要はないですよ。楽しんでください。」  
お金をそれぞれに渡していく。

「御・・・そうする。」

そう言って、パタパタと先に行った劉曄と李通を追いかけていく徐晃。

「ほら、許劭さんも・・・。」

「私に死ねって言うのかな。」

うるんだ瞳で、流浪を下から睨み付ける許劭。現在、許劭は流浪の右側に回り、服の袖を握り締めている。

「そういえば極度の人見知りでしたね。いつものを見てて、忘れてました。」

周りにはもちろんお祭りに来た大量の見ず知らずの人たちが。

「ひい！！今誰かが触りました。ううゝ、怖いのです・・・。」  
人が横を通るたびに体をビクビクさせる。これだけ人がいれば人同士で当たるということは当たり前だろう。

「仕方ないですね。」

「ふえっ!？」

そう言って、流浪は許劭を持ち上げ、自分の左肩に乗せる。

「これなら、誰かと当たることもないでしょうから、大丈夫でしょう?」

「あ、はい。それは大丈夫なのですが・・・あの、その、重くないのかな?」

上から、心配そうに、恥ずかしそうに言う許劭。

「?全然軽いですけど。」

その言葉を聞き、ほっと安堵の息を漏らす。

「とりあえず、何か買っていきましょう。」

祭りの喧騒の中に紛れ込んでいきました。

一通り、屋台を回った流浪は、城に戻っていた。  
一緒に連れていた許劭は程?がやっていた『風の催眠術、かかって  
いっちゃいなよー』でかけられた催眠術で人見知りが解消(?)されて  
いた。

流浪は黙々と城の地下へ降りていく。

そこはいわゆる地下牢が並んでいる場所だった。

その一角、ある一人の少女が囚われているそこで流浪は立ち止まった。

「周泰殿、食べますか？」

そう言って、屋台で買ってきた点心を渡す。周泰はそれを黙って、受け取る。

「すみませんね。外に出してあげたいのですが、流石に許可が下りなかったもので。」

「仕方ありません。私は敵の隠密ですのでしょうがないです。」  
わずかに顔を伏せる周泰。

「・・・、冷めないうちに食べましょう。美味しさも半減しますよ。」

「そうですね。」  
流浪も買ってきた点心を頬張り、それにつられて周泰も一口食べる。

「あと、周泰殿にこれを。珍しいものが売っていたので。」  
ガラスでできた猫のキーホルダーのようなものを周泰に渡す。

「お猫様ですう。」

顔を爛々と輝かせる。とても気に入ったようだ。

「西方の商人が持ってきたらしい『ガラス』というものらしいのですが・・・。」

「ありがとうございます。とっても可愛いです。」  
そう言って、周泰は飛び切りの笑顔を見せた。

流浪は城壁の上に来ていた。

ふらりとここに来ていたのだ。眼下では、今だ祭りの最中で、行きかう人々の笑い声で溢れている。

そんな中、流浪は目的もなく歩いていく。

（ここに来れば誰かに会えるかもしれないなんて思いましたが、こんなところに誰かいるわけ……。）

そこには、人がいた。綺麗な金髪をしたその少女、曹操がそこにはいた。

「そう、全部思い出したの。」

金髪の少女、曹操は闇夜に浮かぶ月を見ながら言った。

「はい。」

その隣には流浪がいる。

二人は今、城壁の上に来ている。



「それでも、記憶を思い出した今でも、隼人は私の下で仕えてくれるかしら？」

曹操が流浪に手を差し出す。その姿は月光に照らされ、幻想的である。

「それはもちろん。」

流浪はその手を握る。

「俺の主は華琳ですから。」

流浪は微笑を浮かべて返す。それを受けて、曹操はとっさに顔を背けてしまう。

（な、何なの？ そんなの反則すぎるわよ……。）  
そんな曹操の乙女心は風と共に流されていく。

「そ、そう……。はい、じゃあこの話はお終い。とりあえず飲みましょう。」

顔をほんのり赤く染め、曹操は自分の杯を流浪に向ける。

「御意です。」

流浪も徳利を傾け、曹操の杯に注いでいく。

「魏に栄光あれ。」

二人は杯をカンと合わせ、一気に飲み干した。

それから何日か後、

「隼人、貴方には呉へ先行してもらいたいの。」  
曹操に個人的に呼ばれた流浪は、開口一番にこう言われた。

「隼人も知ってのとおり呉は、孫策らは急速に勢力を伸ばしているわ。このまま野放しにせず、そろそろ叩いておく必要があると判断したの。このことはまだ、他の人に入っていないわ。」

「どうしてそれを俺に？」

「貴方の腕を買っているのも理由の一つだけど、あなただから信用しているのよ。」

ニコリと曹操は言う。

「分かりました。出発は2日後、早朝にでも向こうへ向かいます。」  
「よろしく頼むわ。」

### 第32話「収穫祭」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

### 第33話「暗殺と片腕」

「華琳様、出撃準備整いました。」

魏では玉座の間に、郭嘉が入り、報告していた。

「ご苦労様、では一刻後に出発しましょうか。それと、隼人のほうはどうなっている？」

「はいです。流浪さんは、呉内部に侵入し、まだ見つかっていないそうです。それも、だいぶ前に伝令が出したもののなんですけどね。」

程？がのほほんとした調子で言う。

「しかし、華琳様、なぜこの時期に孫策に攻撃をなさるのですか。北には袁紹の勢力がいる今は、軍備の強化に専念するべきではないのですか？」

郭嘉は不満げに言う。

「確かに袁紹の勢いは凄いけど、所詮は袁紹。後に回しても大過はない。けれども、袁術を追放後、瞬く間に揚州を制圧し、軍備を強化している孫策。どちらを叩いておくべきかは自ずと決まるものでしょう？」

「確かに、それならば納得できます。」

「なら、準備はよろしく。」

「では、一刻後に。」

郭嘉と程？は玉座の間を後にする。

「そ、曹操様！！」

それとすれ違うように、あわてた様子で入ってくる兵士。

「どうしたの？」

「そ、それが、捕まえていた呉の捕虜、周泰の姿が見当たりません。おそらく、流浪殿の呉への侵入を知ったため、そちらへ、脱獄して向かったと思われます。」

「隼人がしっかり監視してるんじゃないの？」

「それが、牢屋に張られていた流浪殿が作った護符の結界を何らかの方法で破ったようです。」

「くっ!!！」

曹操は齒噛みする。

「すぐに手の空いている警備の者たちで魏内部で周泰がいないか調べさせなさい。」

曹操は的確に兵士に指示を出していく。

（これはどういうことなのかしら？隼人。単純にあなたの結界が破られたのかしら。それとも・・・。）

魏で出撃が行われた少しあと、

「隼人様、いいのですか？」

「何がいいんですか？」

流浪は隣にいる少女の質問に質問で返す。

「私がここにいることができますよ。呉ですよ。少なくとも私に有利な場所なんですよ。」

隣の少女、周泰は流浪に顔を近づけて、意地になって言う。

「別にいいですよ。周泰殿には俺から離れられない術式をかけていますから。」

そう、流浪は周泰に流浪の200m以内から離れると、心臓が止まるような術式をかけている。

「それは、作るのに結構時間が掛かったぶん、効果は折り紙つきですよ。冗談で俺から離れると死にますから注意してください。最も、あなたに死なれては俺としては困るんですけど。」

流浪は苦笑しながら、先ほど店で買った肉まんに齧り付いている。

「ですが、今頃、魏では大騒ぎになっているかもしれないんですよ。」

周泰は心配そうにしながら流浪を見る。流浪がちゃんと周泰を管理していないなんて思われるかもしれないのを心配しているのだ。

「大丈夫ですよ。我が主ならこの程度のことさっさと片付けちゃいますから。それよりもっと大事なことがありますから。」

そう言って、流浪は城からほんの少し離れた森へと入っていく。

しばらく進んでいくと、小川が見えてきた。

そしてそこには、呉の王、孫策がいた。

一方、その頃、呉の北方では、呉へ向けて大軍勢が迫っていた。

「華琳様、全軍揚州に入りました。すぐに動けますが。」

「相手は英雄孫策。すぐに動くわよ。」

曹操はその言葉通り、次々に指示を出していく。

「春蘭は風、沙和、真桜、凜を連れて敵本城へ向かいなさい。」  
「御意。」

「秋蘭は廬江より東進し、敵背後を脅かしなさい。」  
「御意。」

「霞は騎兵を率い、敵の伝令を捕殺しなさい。」  
「何とかやってみるわ。」

「私は周辺の拠点を制圧した後、春蘭に合流する。桂花、季衣、流  
琉、風は補佐を。」

「」「」「御意。」「」「」

「大軍を幅広く展開し、揚州という画板に描きましょう。英雄との  
戦いの全てを。さあ、孫伯符……世に謳われる者として、正々堂  
々戦おうではないか!!」

曹操の号令が響き渡った。

「孫策様・・・。」

孫策は一人で先ほどから、誰かの墓を掃除していた。

「孫策様の母上、孫堅殿の墓です・・・。」

周泰が小さな声で言う。

掃除も終わったのか、孫策はそっと墓石の前で跪き、亡くなった母へと語り始める。

「母さん、ようやくここまで来れたわ。あなたが広げ、志半ばで去ってしまった・・・私たちの故郷，

今は私たちの、呉の民たちの下に帰ってきたわ。今から孫家の悲願が始まるわよ。」

孫家の悲願・・・天下統一。否、呉の民が、彼女の仲間たちが笑顔で過ごせる時代を彼女は望んでいると流浪は、彼女の表情から汲み取っていた。

しばらく、そのままじっとしていたが、

「そろそろ行くわね、母様。これから忙しくなると思うからなかなか来られないけど、でもあなたの娘は一生懸命に戦うわ。母様が、呉の民たちが思い描いた未来に向かって。」

最後の別れの言葉を言う。

「母様、天国から見ている。」

文字通り、最後の別れ。

「あなたの娘たちの戦いぶりを。そして呉の輝かしい未来を・・・。」



ヒュン・・・

何かが空を切った。

「!!」

「孫策様!!」

周泰が、隠密特有の素早い動きで、孫策の間に割り込み、自身の得物である刀で振り払おうとするが、

「しまっ・・・。」

刀が引っかけたてしまい、うまく抜けずにいた。

そして、

グサツ・・・!!

「っ!!」

思わず目をつぶる、孫策と周泰。

目を開けた周泰たちが見たのは、

「これは、なかなか痛いですね。」

「隼人様!!」

左腕に矢が深々と刺さって、腕が紅に染まっている流浪の姿だった。

唇をかみ締めながら、流浪は、自身の得物である、大鎌に手を伸ばす。

「はっ!!」

気合を入れ、右腕のみの渾身の力で、流浪は大鎌を円盤投げのように矢の飛んできた方向へ放り投げる。

「ぎゃあっ!!」

すると、鎌が刺さったのか男の悲鳴が上がる。それに続いて、数名の兵士が脱兎の如く逃げていく。

「はあはあ・・・周泰殿、追わなくていいですよ。それより、俺の左腕を切り落としてください。」

「え!？」

「矢に毒が塗ってあるみたいなんです。早く。」

「は、はい。」

周泰は、すっと刀を抜き、流浪の肩の付け根のあたりから一気に切り落とす。

ぼとり、と嫌な音を立てて、左腕が地面に落ちる。流浪はそれを導術で氷漬けにし、懐にしまう。

「・・・ありがとうございます。」

流浪は頭を下げてお礼を言う。

「ごめんなさい・・・。」

「どうして、周泰殿が謝られるのですか？腕を切り落としてくれたおかげで、毒が全身に回らずに済んだんですよ。」

暗い顔で謝る周泰に、流浪は心底不思議そうな顔をして言う。

「だって、私が・・・刀をうまく・・・抜けなかったから。」

「明命、そんなことはないわ。そもそも、私が護衛も付けずにいた

から・・・。」

二人がお互いに自分の非であると言い合う。

「いえ、お二人のせいではありません。すべてはこの俺のせいです。」

そう言って、流浪は鎌を投げた場所へ向かう。

そこには、鎌で頭を打ったのか気絶している兵士がいた。そして、その鎧を見て、全員が気付く。

「こいつらは『魏』の兵です。同じ偵察と思って野放しにしたのが失敗でした。」

流浪はそう言って、孫策の前に来て、自身の首を差し出す。

「これはすべて、俺の責任。ここは、俺の首で許してもらいたい。我が主の覇道に傷をつけるわけにはいかないんで。」

「いいわよ。そんな真似しなくて。武人たる者、いつ自分の命が消え去ろうと、おかしいことではないもの。死ぬならそれが天命。そうでしょ。」

孫策は笑って言う。

「それに、あなたが私に覇道を教えてくれたのよ。今の私がいるのもあなたのおかげ。それなのに感謝こそしても恨むなんてことはないわ。」

「だから、簡単に命を投げ出さないで。それでも、この戦いは避けられないけれど、私は戦場であなとも戦いたいのよ。」  
そう言って、孫策は眩いばかりの笑顔を見せた。

### 第33話「暗殺と片腕」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスをお待ちしております。

次回もお楽しみに。

### 第34話「決意」

「秋蘭の一隊が合流しました。これで全ての準備が整いました。」

「ありがとう。英雄との対決、胸が高鳴るわね。」

荀？の報告に曹操の声が重なる。

「一部の部隊が、怪しい動きを見せていますよ。気をつけなければいけませんね。」

「風、どの部隊かしら？」

「呉群より流れ着いた一団のようですね。許貢とかいう人間に仕えていたようですね。」

「その部隊には数名の監視をつけなさい。邪魔されたくないわ。」

「御意。」

曹操の言葉に、程？が答え、兵に連絡する。

「華琳様、前線に呉の部隊が展開し始めました。それにしても、展開が遅すぎです。」

「何か、あったと見るべきか……。」

郭嘉は顎に手を当てて、思案に暮れる。

「天も無粋な真似をしてくれるものね。それが、自然の結果なら、それもまた天命か……、春蘭、秋蘭。部隊の展開を。誇り高く、堂々と、孫策と雌雄を決するわよ!!」

「「御意。」」

曹操の指示を受け、部隊を展開させ始める。

「曹操様、敵軍より単騎で前に出る者あり。孫策です。呉の王、孫

策です。」

伝令兵が急いだ様子で報告していく。

「侵略してきた我らの非を鳴らし、舌戦を仕掛け士気を向上させるつもりね。その舌鋒がどこまで心に響くか、大人しく聞いてあげましょう。」

「呉の將兵よ、我が友よ。我らは、袁術に奪われたこの土地をやつ  
との思いで取り返した。」

孫策は自身の得物である南海霸王を魏軍へ向け言う。

「だが、今愚かにもこの地を欲し、無法にも大軍を持って侵略して  
きた敵がいる。」

「敵は卑劣にも、我が身を侵そうと刺客を放ったのだ。毒矢で我が  
身を滅ぼそうとしたのだ。」

そう言って、連れてきた縄で縛られている男を前に出す。矢を放つ  
た魏の兵である。

「我は、ある男のおかげで命を奪われずに済んだが、その男は片腕  
を失った。これは許せることか、否、許せまい!!」  
そう言って、孫策は南海霸王で男の首を刎ねた。

「勇敢なる呉の将兵を我にその誇り高き姿を、その勇ましい心を、その猛き心を我に示せ。」

王の顔になり、血で塗れた南海霸王を再び掲げ、叫ぶ。

「呉の将兵よ、我が友よ。愛すべき仲間よ、愛しき民よ。孫伯符、怒りの炎を燃やし、ここに孫呉の号令を発す!!」

「天に向かって叫べ。心の奥底より叫べ。己の誇りを胸に叫べ。その雄叫びと共に、降りかかる火の粉を打ち払え!!」

「うおおおおおおお!!」

孫策の号令とともに、兵士たちの雄叫びが大地を揺るがした。

「どういこと!?! 誰が孫策を暗殺せよと命じたの!?!」

「華琳、こいつらですよ。」

ドサリ、と曹操の前に数名の兵士が出される。

「隼人!! どうしたのその傷・・・!!」

「それに周泰まで!!」

左肩の付け根から血を流し続けている流浪と、流浪を支えるようにしている周泰が現れた。

「ちょっと毒矢を受けてしまいました。」

あはは、と苦笑しながら流浪は他人事のように言う。

「お前、・・・孫策を助けた男っていうのは・・・。」  
「そんな助けただなんて、・・・大したことはしてませんよ。」

「それよりも、早く兵を退いてください。」

流浪は痛みをこらえながら真剣な表情で、曹操に懇願する。

「華琳さま、許貢の残党で形成された一団が暗殺を行ったようです。」  
あわてた様子で荀？が報告する。

「その者どもの首を刎ねよ。」  
「え？」

曹操の言葉に一瞬、場の空気が凍りつく。

「聖なる戦いを穢された怒りが分からないの！？全員の首を刎ねなさい！！」

「ぎよ、御意。」

その威圧に圧倒された荀？は慌てて、駆けていく。

「我らは一度退く。」

「しかし、ここで退けば、我が軍の被害は尋常じゃありません。」  
夏侯惇は異議を唱えるが。

「なら、私に戦えと。もはや、この戦いに意味はないのよ！！軍を退かないなら私は・・・。」

曹操は苦しい表情をして言うが、そこに割り込むように流浪が声を発した。

「なら、殿は俺がやりましょう。もう、伯符殿達は突撃を開始した



ようですし。」

血が出ている左肩など気にせず、いつものように大鎌を持ち、陣を出ていこうとする。

「周泰殿、手を貸してもらいます。」

「御意です。」

そう言って、流浪は何も言わずに去っていく。

「華琳様、我々も殿を務めます。」

「流琉と季衣は華琳様の護衛を．．．命に代えてもお守りするのだぞ。」

夏侯惇と夏侯淵が言う。

「はいっ!!」

二人は勢いよく返事する。

「追撃や無駄な戦いはするな。穢されたこの戦いを．．．なるべく無事に收拾せよ。」

「．．．周泰殿。俺を殺したいなら、殺していいですよ。」

流浪は砂煙を迫りくる呉の軍勢を見つめる。

「俺を殺せば、あなたにかけている術式も解かれます。片腕のない

今の俺を倒すことなど、造作もないことでしょう。」  
流浪は淡々と、隣の少女に言う。

「あなたも、呉の皆さんとともに、戦いたいのではないのですか？」  
「……。」

その言葉に周泰は何も答えない。

今、彼らを、呉を動かす原動力は、己の主を愚弄した怒りであり、その主を守った男（呉では、味方の兵が守ったことになっているので、流浪が守ったとは知らない。）へのせめてもの償いだろう。

そして、それは例え周泰があの場合に居合わせたとはいえ、主の命が狙われたのは紛れもない事実。怒りを覚えるのは当然だろう。だからこそ、流浪は味方が誰もいない場所に周泰と二人きりでやってきた。選択をさせるために。

「それでも……。」

掠れた声で、少女は、周泰は言葉を発する。

「それでも、あなたは孫策様を守ってくださいました。それに、私も。隼人様が守ってくださいさらなかったら、死んでいました。」

「ですから……今度は私が隼人様を守ります。」

周泰は、流浪へと顔を向ける。その表情は勇ましく、

「それが、呉への裏切りになったとしてもですか？」  
「はい!!」

その瞳に一切の揺らぎはなかった。

「そうですか……。」

流浪は周泰から目を放し、天を仰ぎ見る。

空は、どこまでも青く広がっていて、雲がゆっくりと流れている。まるで、そこは別世界のように。

「俺は本当にいい拾い物をしました。」

流浪は空を見上げたまま言う。その表情は、周泰からは分からない。けれども、

「じゃあ、背中はお願いますよ。」

その表情はきつと清々しいほどに素敵な笑顔なんだろう。

だからこそ、

「任せてください。」

周泰は勢いよく返事を返した。

### 第34話「決意」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしています。

次回もお楽しみに。

第35話 「呉王と流浪」

「死ねえええええ！」

怒り狂った呉の兵士たちが撤退を始めた曹操軍に襲いかかる。

「なるべく被害は出すな。最低限の攻撃で押さえろ!!」

殿を務めている夏侯惇が、襲い掛かってくる呉の兵士の攻撃を受け流しながら、兵たちに指示を与えていく。

「姉者、流浪は見つかったか？」

「いや、まだだ。そんなことより、早く私はここから退きたい。」

「同感だな。この状況では、もう何もかも止められない。」

夏侯淵はそう言い、撤退を速めた。

「進め、進め、進め！！姉さまの命を奪おうとした輩を殺しつくせ！！その穢れた血を呉の大地に染み込ませるのだ！！」

「ウオオオオオ！」

呉の武將、孫策の妹である孫權の号令に、兵士たちが雄叫びをあげ、逃げる曹操軍に突っ込んでいく。

「黄蓋隊に告げる。一兵たりとも逃がすな。皆々殺しつくせ!!」

「オオオオオオ!!」

ヒュンヒュンヒュンと呉の老将、黄蓋の部隊から次々と矢が放たれる。

「我らの怒りを獣どもに叩きつけろ。投降する者も、逃げる者も殺せ。その血を大地に染み込ませ、二度と孫呉に齒向かえないようにしろ!!」

「ウオオオオオ!!」

呉の武将、甘寧の激昂の言葉に、重なるように兵士たちが、怒りをぶつめに突撃する。

だが、

「ぐはっ!!」

一つの大鎌と、

「っ!!」

一本の刀でそれは阻まれる。

「ハアハア・・・悪いですね。こっちにも限界があるんで。早めに取りつきたいんですよ。」

「隼人様には何人たりとも触れさせません!!」

そこには左腕を失い、切断面には包帯が巻かれているものの、血が滲んでおり、傷口が開いていることは誰の目に見ても明らかな流浪がいた。

そして、

「明命、お前が何故そっちにいる!？」

「……。」

流浪を守るように前に立つ周泰は甘寧の言葉に答えない。目で察してくれと訴えている。

「その様子だと、お前が行方をくらました間、魏にたぶらかされたか。恥を知れ、この裏切り者。」

怒りの形相で吐き捨てる甘寧。

「……私はたぶらかされてなど……。」

周泰のその消え入りそうな呟きは、

ボオオオオオン!!

一回の爆音で消え去った。

周泰も敵である甘寧も驚く。

甘寧の背後には爆撃にでもあったかのように轟々と炎と煙が上がっていた。

「だから、時間がないと言っているでしょう。」  
ぎろりといつもの温厚な流浪からは想像もつかないような鋭い目を向ける。

「周泰殿は俺の仲間です。これ以上の暴言は俺が許しませんよ。それでも、まだ言うのなら・・・。」

流浪は右腕で大鎌を持ち、前傾姿勢をとる。

「その首刎ねますよ。」

ニコリと、だが目は笑わずに言い放つ。

刹那、甘寧が動いた。

早く動いてこの男を殺さねばならないと本能が告げ、それに従い動いたまだった。

目にもとまらぬ俊敏な動きで、一気に流浪の背後に回り、蜂のように首筋を刺そうとする。

真上に何かが舞う。

それでも、甘寧の得物は止まらない。最短距離で流浪の命を奪いに行く。

「!!」

だが、その軌道に割り込むように何かが投げられたと甘寧が気付き、一瞬の隙を見せた直後、

「がはっ。」

横腹に鈍器で殴られたような衝撃が走る。

それでも流星は呉の武将。

弾き飛ばされそうになる体を、足に力を入れることで、その場に踏みとどまり、再び刺しに行く。



それが、流浪に刺さる直前、

「止めなさい。思春。」

その一声で、ピタリと甘寧の動きが止まった。

「しかし、雪蓮様……!!」

甘寧が孫策に異議を言おうとするが、

「その男をよく見なさい。」

孫策は真剣な表情を見つめる。甘寧はそれにしぶしぶ従い流浪を上から下まで見る。

「……腕が無い。まさか……!!」

「ええ、私を助けて片腕を失った男、目の前にいる男こそ、その男よ。」

「まあ、腕はあるんですけどね。」

と流浪は右腕で自分の後ろを指し示す。

そこには、水気を帯びた人の腕が落ちていた。

甘寧の攻撃の軌道に投げ込まれたのは流浪の左腕だったのだ。

「そこに、矢で射ぬかれたような傷があるでしょ。」

孫策の言葉に甘寧は落ちている腕を見る。確かにそこには、矢を引き抜いたような傷跡が生々しくある。

「こ、これはとんだ無頼をしてしまい申し訳ありませんでした。」

甘寧は慌てて、得物をしまい、その場に跪く。

「いえ、気にしないでください。それより、」

流浪は視線を甘寧から孫策へ向ける。

「戦うんですよね？」

「もちろん。」

ニヤリと両者は笑う。

そして、動き出した。

孫策は南海霸王を抜き、流浪との距離を縮める。

それに対し、流浪は

「やっぱ無理です。」

一歩踏み出したところでばたりと力の抜けたように倒れていく。

「隼人様・・・！！」

とっさに流浪に駆け寄り、その倒れてくる体を受け止める周泰。

周泰は心配そうに流浪の顔を覗き込む。

「ははっ、悪いですね・・・。わざわざ周泰殿にはこんな辛い思いをさせてまで来てもらったのに、どうも体は動いてくれそうにありません。」

流浪は苦笑いを浮かべ言う。

「ちょっと休ませてもらいますよ。」

ゆっくりと流浪の瞼が閉じられ、すうーすうーと寝息がたてられる。

「衛星兵、衛星兵、このものに手当を。孫策様を助けてくださったお方だ。丁重に扱え。」

それを言ったのが甘寧だったので、その場にいる全員が驚いたのは

言うまでもない。

## 事後報告。

その後、孫策達、呉の力はこの戦いで周辺の諸侯たちへの威圧、同盟を結んだ諸侯たちへの信頼をより上げるものになった。また、国内ではただでさえ高かった声望も更に高まることとなる。

### 第35話「呉王と流浪」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

もうすぐ春休み明けの試験なので、更新が若干遅れます。  
次回もお楽しみに。

### 第36話「その後と・・・」

「あ、目が覚めた？」

流浪が目を開けると、そこには孫策の顔があった。

「・・・近いです。」

流浪は表情一つ、身動き一つせずに、孫策の目を見て言う。

「あら、そう。まあ、良いじゃない。」

にこにことした笑顔で孫策は顔をまったく動かさない。

「・・・もう少し寝ます。」

流浪は諦めて再び寝ようとするが、

「ええ・・・、遊びましょよ。」

がばっと流浪に飛びつく孫策。

「孫策さん、仕事はどうしたんですか？呉王の貴方には・・・。」

「もう呉の王じゃないわよ。」

流浪の言葉を遮るように、孫策は言う。その表情はどこか清々しいほどの笑顔だ。

「呉王はね、妹の蓮華に譲ったわ。だから、今はただの孫策よ。」

「それでも、何かしらの仕事は来てると思いますよ。戦いの事後処理もありますし。」

流浪は手際よく抱きついていて孫策を剥がしていく。

「いいの、いいの。そんなのは冥琳や穩に任せとけば。」

そう言って、孫策は流浪の手を取る。

「貴方には、ちゃんとお礼もしたいのよ。明命も私も守ってくれたんだから。だから、ね。」

流浪の手を引き、孫策は外へ連れ出す。

「周泰殿はどこですか？あまり離れすぎると彼女、死んでしまいますよ。」

「・・・えっ!？」

ピタリと孫策の動きが止まる。

「ちょっと周泰殿には特殊な術式を・・・。」

「流浪って何でもありなのね・・・。小霸王なんて呼ばれている私が小さく見えてくるわ。」

はぁ・・・と肩を竦ませる。

「明命なら流浪の隣の部屋で寝ているわよ。あの子、あなたが眠っている間、付きっきりで看病してたんだから、感謝してあげなさい。きつと喜ぶわよ。」

子供のような笑みを浮かべて孫策は隣の部屋のドアを見る。

「そういうことだから、ほら、行ってやんなさい。そろそろ、あの子も起きるころだから。」

トンと流浪の背中を押して、孫策は廊下を歩いていく。

流浪は部屋に入る。

寝台では、周泰が眠っており、その寝顔は何処か不安そうだ。

流浪は寝台のそばにあった、椅子に腰かける。

「・・・ま、・・・にも・・・ね。」

小さな声が、周泰の口から漏れる。

「る．．．さま．．．にも．．．きま．．．よね。」

少女の瞳から涙が、一滴零れ落ちる。

「流浪様、どこにも行きませんよね？」

その声は小さく、聞き逃しそうになるほどだ。

「．．．ええ。」

流浪は周泰の手を握る。それだけでほんの少し少女の顔が和らいだ。

「彼女に、周泰殿にほんの少しでも幸せな夢を。」

時間は緩やかに過ぎ去っていく。

く終わりく

「つて、終わるのが早くないですかね。」

思わず突っ込みを入れてしまいました彼は、本作の主人公、流浪君です。

「何なのですか？この紹介の仕方は。まあ、それは置いとくとして．．．。」

流浪君は私をピタリと指さしてきましたよ。

「作者、何やってるのですか？いきなり、話を終わらせて……」  
えっ？いや、尺的に引き延ばせなかったみたい。うん、仕方がないよ。この話はそもそも前の話に組み込む予定だったし。

「いや、何開き直っているのですか？というより、このまま終わるつもりなのですか？」

何を言っているんだい、流浪君。今日は予告通り、ニーソックスについて語ろうと思うのだよ。言っていただろう、私はニーソックス萌えであって、巫女服も嫌いではなく、むしろ好きだが、それでもニーソックスに勝るものはないと思っているのだよ。

「……。巫女服の話はしないので？」

流浪君、何でそんなに冷めた目で見えるんだよ。分かったよ、気が向いたら巫女服も話すことに……。ものすごく嬉しそうになったね、流浪君。それはもう本編では見せないくらい笑顔に。

とまあ、男同士で話しても華がないだろう。ということで、今回は女性ゲストさんと呼んでみました。どうぞ、入ってきて。

「流浪殿、おひさなのですー。ねねなのです。」

「……お腹空いた。」

恋姫無双からニーソックスが似合うキャラ代表の陳宮さんとその主（？）呂布さんにお越しいただきましたよ。華が出ましたか？ニーソですよ、さらにロリですよ。もうウツハウツハだぜ。

「作者、少しは理性を……。」

ああ、これはこれはすいません。そうですね、理性を。あれですよ、某番組では『人生の航海では、理性を羅針盤に』っていいますからね。少しは反省せねば……。



「・・・お腹空いた。」

あ、呂布さんにはこちらの肉まんを。お替りは自由ですからいつでも言ってください。というわけで、早速、ニーソックスについて語っていきましょう。

そもそも、みなさんはニーソックスというものをご存じだろうか。丈が35cm以上のものをニーソックス（ハイソックス）というがこれには更に上がり、丈が50〜60cmのものはオーバーニーソックスと呼ばれ、作作的にはこちらのほうが好きだ。

ニーソックス、これといえば自ずと考えるしまうのは絶対領域だろう。スカート、ショートパンツなどのボトムスとニーソックスを着用した際にできるボトムスとソックスの間の太ももの素肌が露出した部分を指す言葉だが、これがまたたまらないのだよ。

ボトムスとソックスの間から微妙に覗く素肌の太ももの部分がもうやばいね。素晴らしすぎる。ハアハア、最高だぜ。

「作者、少しは落ち着いてください。」

「ううゝ、恋殿、あのかたの目がなんだかエロいです。」

「・・・？」

落ち着かなければ。『人生の航海では、理性を羅針盤に。』ですからね。理性を・・・。

では、ニーソックスの良さを説明しましょう。

まずは、ニーソックスには防御性があるということだ。膝下、膝を隠すことで怪我への対応性が生まれる。えっ？ ジャーじじゃ駄目だって？

ここで、二つ目、美しさだ。隠れているがゆえの美しさ、これはも

う巫女服の比ではないね。あ、流浪君、大鎌を構えないで。謝るから。

というわけで、ジャージでは出せない美しさを醸し出している。

そして通気性。タイツだと夏場は蒸れるが、ニーソックスはその心配はない。

それにニーソックスはあらゆるタイプの女性に合う。ロリ、メイド、熟女、元気っ娘、チャイナ服、ツインテール、etc・・・  
作者的には、チャイナ服＋黒ニーソがお気に入りである。

といわけで、ニーソックスはあらゆる女性に合い、眺めてよし、嗅いでよし、擦ってよし、啞えてよし(?)の最強のアイテムなのである。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

なんで、みんなドン引きなの？

「理性を羅針盤に。『理性』ですよ、作者。全然抑えきれてないですよ。」

別にいいだろ。もう何の後悔もないね。むしろ達成感でいっぱいといってもいいよ。

「駄目だ、この作者・・・。」  
流浪の溜息が響き渡った。

「・・・もう終わり？」

「れ、恋殿。なんだか告知をやってほしいとのことですよ。」

「・・・告知？」

そうですよ。呂布さん。いろいろやってほしいことがあるんです。

「・・・頑張る。」

では、こちらをどうぞ。

「・・・この物語の作者の次回作のお知らせがある。」

「そうなのですよ。それもなんと2作品もあるのです。1つめは恋姫無双の二次創作、この物語でも少しだけでできた紫蘭という少年とあの『魔女』とのお話。もう一つはあらゆるアニメキャラで送りするラジオ風小説です。」

「ここで皆さんにはアンケートを行ってほしいのですよ。二つ目のラジオ風小説のメインパーソナリティを選んでほしいのです。どんな作品でも構わないのですよ。他作品とのコラボでもいいです。出てほしいキャラクター名とそのキャラの出ている作品名をこの小説の感想、もしくは活動報告のところ、あるいはメッセージボックスどこでもいいので書いてください。キャラクターの数は何人でもいいのですよ。よろしくなのです。」

「・・・アンケート待ってる。」

「なお、送られてきたキャラクターの上位二名がメインパーソナリティ、残りの方はゲストという形で登場予定なので、どんどん送るのですよー。」

はい、お二人ともありがとうございます。

告知はこれで終わりです。ですが、この作品はまだ終わりません。あと10話位の予定ですが、これからもよろしく願います。

ではでは、この物語の最後にまたお会いしましょう。

### 第36話「その後と．．」 (後書き)

いかがでしたか？

アンケートのほうよろしくお願いします。

なお、作者は魔法少女リリカルなのは、f a t e、ネギま！などは見えていないので、多分参加させれません。

そのほかのキャラクターでお願いします。

次回もお楽しみに。

### 第37話「城壁の上で」

ある日の昼下がり。

流浪と周泰は呉にいた。とは言っても呉の城内部しか出入りを許されていない。

これには理由がある。流浪は呉にとっては敵である魏の将であるためであるが、本来なら死刑もありうるのだが、呉の元王、孫策の暗殺を阻止し命を救ったため、特例として城内ならば自由に行動してもいいといわれている。

呉の人間の監視付きで。

「で、今日は貴方方ですか。」

流浪は寝台に腰を下ろしたまま、訪れた来客に視線を向ける。

「甘寧殿に、孫策さんの妹さんですか。」

「わが名は、孫権。一度、袁術のいた城下町で会ったと思うのだが忘れたの?」

「・・・?」

コクリと首をかしげる流浪。

「お前は奴隷を買いまわっていたのだが・・・。」

「ああ、あの時の・・・。そういえば、ここにきて奴隷を売る店は見かけていませんね。」

流浪は思い出したように言う。

「そうだろ。あの後、お前に言われて、いろいろと対応してみたの

だ。」

子供のように自慢げに話す孫権。

「それは良かったです。」

流浪も安心したように笑みを浮かべる。

「でだな、今日は私たちが監視の番なのだが、どこかへ行く予定とかはないのか？」

孫権が何気なく聞いた言葉に、流浪の表情に暗い影が落ちる。

「どうしたのだ、流浪。蓮華様が聞いておられるのだぞ。」

なかなか答えようとしない流浪に、甘寧が急かす。

「いえ、もう出かけるのはこりごりです……。」

はあっと一つ溜息をつき流浪は語っていく。

「昨日は、孫策殿が町中を無断で連れまわして、『周瑜殿』に怒られるし、一昨日は、孫尚香殿に弄ばれ、周瑜殿の邪魔になるほど騒いでたみたいで、俺も『周瑜殿』に怒られましたし、その前は、陸遜殿が本を取りに行くのに付いていったら、何だか桃色になって『周瑜殿』に残念そうな目で見られるし、その前は……。」

「もう、いいわ。落ち着いて、流浪。」

思わず、孫権が駆け寄ろうとするが、

「蓮華様、お下がってください。これは演技かもしれません。」

その間に甘寧が入り、手で孫権の動きを制する。

「でも……。」

「流浪様、大丈夫ですか。」

孫権がなかなか近づけないでいる中、突如流浪のそばに周泰が現れ、その手を握り締める。

「周泰殿……。」

「流浪様……。」

流浪の顔に光が差し込む。

にゃあ

「何か、服の中から大量の猫が出ていますよ。」

「ふええ!!!」

周泰の服の間から猫が大量に出て、寝台の上でくつろぎ始める。

「これを見られたら、また『周瑜殿』に怒られる……。」

またしても暗くなる流浪。

「そういえばさっきから、聞いていたのだが、流浪は冥琳が嫌いなのか？」

「嫌いというわけではないですよ。ただ、どうにも苦手というか……。」

目をそらしながら、流浪は苦笑いを浮かべる。

「そうなのか、でもあれだぞ。冥琳も悪気があって言ってるわけではないと思うのだ。」

「それは分かっていますよ。あの人はあの人なりでちゃんと考えていると思います。」

「そうか、ならいいのだ。」

孫権は流浪の答えを聞き、満足げに笑った。



「そういえば、近々、戦いが起きるかもしれませんよ。」

「なに！？それは本当なのか。」

流浪は話題を変えるようにポンと手を叩き、唐突にそう言った。

「ええ、おそらくわ。蜀で動きがありましたからね。まあ、信じるか信じないかはお任せします。」

「思春、すぐに蜀への偵察をお願い。」

「御意。」

孫権はすぐに甘寧に指示を出す。

「本当に信じるのですか？」

「ええ、たとえ嘘でも、確かめることに意味があると私は思う。」  
備えあれば憂いなし、と。

流浪の言葉通り、呉と蜀は両者の国境付近で激突した。

両者ともに五分五分の戦いをしていたが、その戦場に突然の知らせが舞い込む。

「魏の曹操が南下してきました！！」

曹魏が本格的に南征を始め、現在は江陵にまで進行しているというものだった。押し寄せてくる魏の兵数は40万は固い、対して、呉は多くても8万、蜀も魏に対抗できるほどの兵力は持ち合わせていなかった。

この展開に蜀も呉も危機感を感じ、戦いを休戦、そして、同盟を結ぶことになった。

魏の進行を止めるための共同戦線というわけである。

そして、対決の舞台を赤壁へと移していくのであった。

同盟を結ぶ軍議が終わり、呉の軍師、周瑜は城壁の上に来ていた。周瑜は建業の街並みを見渡す。

「隠れてないで出てきたらどうだ？」

周瑜は視線を街並みに向けたまま、問いかける。

「ばれてましたか。」

影から、流浪が現れる。

「それで隠れているつもりだったのか。見くびりすぎではないか、ゴホッゴホッ。」

周瑜は口を押え、せき込む。

「風邪なのですか。いえ、風邪ではないようですね。他の方は気づいてないみたいです。」

流浪は目を細めて言う。

「気づいていたか。」

三度せき込むが、その口元を抑えていた手には、血の跡が。

「ええ、一応は。でも、変に期待しないでください。俺は様子が分かってても、その病気を治すなんてことはできませんよ。俺は医者ではないので。」

流浪は周瑜の隣にまで歩いてくる。

「でも、分かっているのでしょうか。もう命の灯は消えかかっている」と。

「ふん、それぐらい自分で分かる。でも、この戦いを見届けるまでは死にきれん。」

「なら、休んだほうがいいと思いますよ。少しでも、体力をつけるべきかと。」

「そうさせてもらうよ。」

周瑜はそう言って、自室へと戻っていく。

「李通さん、周泰殿いますか。」

残った流浪は建業の城壁の上から外を見ていう。

「現在、魏には主要な将や文官はいないようです。」

「それもそうでしょう。命運が決まってしまうほどに大きな戦いになるといつても過言ではないですからね。」

その流浪の後ろには、周泰と李通の2人が跪いている。

「李通さん、魏にいる劉曄さんたちをここへ連れてきてください。」

「では、やはり・・・行うのですか？」

その言葉に、周泰が反応する。

「ええ、俺は魏を討ちますよ。」

「御意です。流浪様の仰せのままに。」  
シュンと消え去る李通。

「ふう。」

息を吐き、空を仰ぎ見る流浪。

何処までも広い青空が浮かんでいる。

「さあ、始めましょう。一世一代の大仕事を。」  
その弦きを聞くのは、一人の少女だけである。

### 第37話「城壁の上で」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

前回お知らせしたアンケートはまだまだ募集中です。  
次回もお楽しみに。

### 第38話「動き出す者たち」

劉備と孫策は、北方を治める英雄曹操の突然の侵攻に危機感を覚え、同盟を結び、赤壁にて迎え撃つことを決意する。

そして、孫策は曹操との決戦に備え、本拠地である建業へと戻ってきていた。

敵である曹操は噂では五十万、六十万の大軍で押し寄せてきていた。対して、迎え撃つ孫策は呉全土に総動員令を掛ける。それに答えた将たちの中に魏に仕える将である流浪の姿もあった。

城壁の目に進み出た孫策、孫権の姿に呉の精鋭たちは歓声を上げる。

「孫呉の勇敢なる兵士たち。」

孫策の凜とした声が、天に響き渡る。

「これよりわが軍は、赤壁で曹操を迎え撃つ。私の命を狙った曹操を、断じて許すわけにはいかない。そうだろう？ 呉の勇者たちよ。」  
孫策が声を張り上げる。それに答えるように兵士たちが雄叫びを上げる。

「あの日のことを、我らが英雄を、我らが友を、我らが仲間を、侮辱したことを私は決して忘れない！！ついに、我らの手で憎き曹操を討つことができるのだ。」

孫権も姉に負けないぐらい声を張り上げ、叫ぶ。

「それにこちらには私を守ってくれた男もいる。」

孫策の言葉と共に、城門壁の目に流浪の姿が現れる。それを見た途端、おお！！という兵士たちの歓声上がる。

「孫呉の勇者たちよ。」

孫策は自身の得物、南海霸王を天に掲げる。

「勇ましき我が兄弟たちよ。」

同様に、孫権も自分の得物、姉と似た南帝霸王を天に掲げる。

「我々に力を貸してくれ。……孫呉3代の夢を叶えるために。」

「うおおおおおお！！」

二人の言葉を受けて、兵士たちも天に向けて腕を突き上げ、咆哮にも似た雄叫びを上げる。

そして、舞台は赤壁へと移る。

「華琳様、たった今、呉に放っていた細作より、報告が上がってき

ました。孫策と劉備が同盟を結んだようです。」

「あら、素早いわね。流石は周公謹に諸葛孔明……といったところかしら。」

「それともう一つ、流浪が……呉に寝返ったとのことですよ。」

「何ですって!?!」

思わず立ち上がる曹操。

「詳しいことは分かりませんが、孫策、孫権と共に号令をかけていたと。」

「た、大変です。」

荀?が曹操に報告をしていると、伝令兵が慌てて駆け込んできた。

「魏の城内にいた流浪殿の部下の方々が、数名の兵士たちを殺し、行方をくらましました。」

「なっ!?!」

その場にいた武将、文官たちも驚きを隠せない。

「被害のほうはどうなっている?」

「現在、本城では混乱は納まりつつあり、周辺の地域でも見回りを強化しています。」

「どうしますか、華琳様?」

隣にいる夏侯淵が曹操に言う。

「……………。計画に変更はないわ。予定通り行う。裏切った流浪は、戦場で見つけ次第殺しなさい。私を裏切ったことを後悔させてあげるのよ!?!」

「御意!?!」



各々進軍の準備に取り掛かりに行く。

残された曹操は人知れず呟く。

「やはり、私ではあなたを使えないということなの・・・隼人。」

長江のほとりに布陣した孫策軍は早速、劉備たちと軍議を交わしている。

流浪はそこから少し離れたところにいた。もともと魏にいた流浪をあまり信用していない蜀の面々により、軍議への参加は認められなかったのだ。

すると、突然、軍議をしていた黄蓋が怒り狂った形相で行ってしまふ。

流浪はそれを横目で見ると、関心が無くなったというように空を見上げる。

「周泰殿、いますか？」

「はっ！！ここに。」

流浪の背後に周泰が現れる。

流浪は周泰の下へ行き、おでこをトンと押す。

「へっ!？」

「これであなたに掛けていた術式を解きました。もう、あなたは自由です。」

流浪はそう言って、その場に座る。

「降りるなら、今しかありませんよ。」

「それでも私は隼人様に着いていきますよ。」  
ニコリと少女は微笑んだ。

「ありがとうございます。」

そんな声を周泰は聞いた気がした。

その日の夜、黄蓋は数名の兵士を率いて陣地から脱走した。

呉の陣内では、追撃を出すのが、黄蓋らの抵抗により取り逃がしてしまう。

そんな最中、流浪は人気のない森の中にいた。

「出てきてください。」

ブウーンと手に持っている金色と黒色の宝玉が輝きだす。

「悪いわね．．．。こんな戦の前なのに．．．。」

「あはっ、そうも言ってられないわよ。リリスが近くに来てるんだから。」

申し訳なさそうにするフロージュとうきうきしているシャロンが現れる。

リリス。流浪をこの世界に送り込んだ張本人であり、流浪の意思で生まれた『魔女』である。

「まあ、流浪は気にしないでいいわよ。目先の戦いに集中しなさい。」

「そうそう、全部片付けちゃうから。記憶の魔女の名に懸けて。」

そう言って、二人は立ち去ろうとするが、

「待ってください。」

流浪が止める。

「あの子を殺さないでください。それと、伝言をお願いします。」

「いいわよ。」

「――――と。」

流浪が伝える。

そして、今度こそ、魔女は立ち去った。

自分たちの戦いを終わらせるために。

「呉の黄蓋が脱走．．．どういふことかしら？」  
曹操が魏の陣営で訝しげな顔をする。

「間諜の話によると軍議で周瑜さんと激しく口論していたとか。周瑜さんが黄蓋さんを罵倒、怒った黄蓋さんが剣を抜くが、孫策さんに仲裁され、軍規に照らしあわされて鞭うちにあったとか。」  
程？が理由を説明する。

「演技か、真実か．．．。それでも、黄蓋ほどの将が下るのであれば、流浪がない今の状況を考慮すると．．．欲しいわね。何としても。」

ニヤリと笑みを浮かべる曹操。

「畏かもしれません。それに前回の孫策のこともありますし．．．。」

「だからこそ、私は黄蓋を受け入れるの。天命に負けない自分を全ての者に知らしめるために。」

「私はそれでいいと思います。もし、華琳様を傷つけようとするなら我らの剣で粉碎してやればいい。ただそれだけのことだ。」

夏侯惇が真剣な表情を言う。

「ありがとう、春蘭。」

「では謁見の準備を始めます。」

**第38話「動き出す者たち」 (後書き)**

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

### 第39話「裏切りと魔女」

赤壁の戦いが始まる少し前、赤壁の近くでは、もう一つの戦いが始まろうとしていた。

「クスクスクス・・・この機に乗じて私たちも曹操の首を取りに行きましょう。」

リリスが手を高らかにあげていう。

その後ろには、数千の骸骨たちが並んでいる。

「そして、隼人様あ、あなたを私に屈服させますわあ。」  
凄惨な笑みを浮かべて言う。毒々しい笑みだ。

それに呼応するように骸骨たちに肉体が戻り始める。

骨から肉が、血管が、皮が出来る。そして、それは流浪の形を作り出す。

数千の流浪。その光景が広がっていた。

だが、

「キャハハハハハ！！リリス、あんた趣味悪いわね。」

「・・・ちよーどいい退屈しのぎにはなりそうね。」

空から甲高い笑い声が響き、後方にいた流浪たちの下に、落ちてくる。

純白のドレスと漆黒のドレスの少女、シャロンとフロージュが堂々と現れる。

「さっさと片付けちゃうわよ。フロージュ卿!!」

「ええ、私は召喚の魔女よ。この程度で勝てると思われてるなんてショックだわ、リリース。」

ドンと一気にフロージュのオーラが上がる。

「冥府の悪魔たち、契約の名のもと御出でなさい。」  
その一言で次々と空間を食い破るように現れる。

あるものは人の姿を、あるものは動物の姿を、あるものは体は人、顔は動物という奇怪な容姿をしたもの、だがどれも禍々しさが漂っていた。

「さあ、始めましょう。リリース。戦争という名の一方的な殺戮を。」  
ニヤリと魔女らしい笑みを浮かべて。

そして、舞台は赤壁へ移っていく。

「流浪様、魏軍動き出しました。」  
諜報が得意な許劭が報告に来ていた。

「そうですか。」

「我々はどうなさいますか?」

徐晃が片膝をつき言う。その背には大きな斧を担いでいる。

「もう少し様子を見ます。それと李通さん、他の方々の準備を。」  
「了解です。」

シュッと指示を受け消え去る。

「劉曄さんも例の準備をお願いします。頼りにしていますよ。」

「はい!!」

優しく微笑む流浪を見て、嬉しそうに作業に取り掛かる劉曄。

「さっ、どう出るのかな。敵さんは。」

流浪は不敵な笑みを浮かべ、川上からきている魏の船を見る。

しばらくして、魏の船に火の手が上がった。

「突撃せよ。祭が作り出してくれた千載一遇の好機、全員見逃すな  
!!! 私に続け!!!」

孫策率いる船が、魏の船に取り付く。

「甘寧隊、呂蒙隊は祭達の救援に向かいなさい。陸遜隊は後曲にて  
支援を。私も姉様の補佐に回る。流浪、あなたも……」  
ピタリと指示を飛ばしていた孫権の声が止まった。

どの部隊も慌ただしく動いている中、流浪たちには一切動きが見えない。

「流浪達はなぜ……動かないのだ?」

「そ、孫権様、流浪殿の部隊がもぬけの殻です。」  
息を切らしながら走ってきた兵が状況を伝える。

「だが、人影はあるではないか!」

「それが、藁でできた人形で細工をしていたようです。」



「裏切りだ!!」

その頃、呉と蜀の境界あたりの船では大混乱に陥っていた。

「そもそも俺の主は曹孟徳殿、ただ一人。」

流浪は船から船へ移りながら走る。右腕には大鎌を持ち、進路を妨害する兵士たちを薙ぎ払っている。

「でえええい。このお方には傷をつけませんので。」

その隣にいる徐晃が大きな斧を振り回し、流浪の取り残した兵士たちを切り裂いていく。

「徐晃さん、背中は任せます。」

「御意。」

「流浪様、藁人形の策成功しました。」

流浪の隣に現れた許劭が言う。その間も流浪は前進を止めない。

「そうですか。それでは許劭さんは劉曄さんと共に華琳を助けてあげてください。あの炎の様子だと困っているはずですから。」

「御意かな。」

タタッと器用に兵士たちの間を潜り抜け、許劭が離れていく。

「このまま、蜀の船に突入します。」

「御意。」

「これで、チェックメイトよ。」

「まだ、まだよ。まだ私は負けていないわぁ!!」  
フロージュの言葉にリリスは憤慨する。

「往生際が悪いわよ、リリス。あなたの大切なお人形さんは、みんな壊れちゃってるわよ。キャハハハハ!!」

シャロンは嘲笑いながら、地面一帯を指さす。

そこには粉々に砕け散った人骨がばら撒かれている。

「うるさいわよ。私は、曹操の首を、隼人様を屈服させるのよお!!  
!こんなところで・・・負けるわけにはいかないのよお・・・!!」  
キツとフロージュを睨み付け、槍と剣を足し合わせたような武器を呼び出し、飛び掛かる。

「・・・あなたの気持ちも分かるけど、もう少し冷静になりなさい。」

フロージュはそう言い、屈強なる兵士たちを呼び寄せ、迎え撃つ。

リリスの槍が3体の兵士を貫くが、残りの兵士たちが、その喉元に剣を突き付ける。

更にその後ろから、シャロン手をかざし、いつでも魔法を放てるようにする。

「ハハ．．．。」

「アハハハハハハ！何なのこれは。何なのあたしは！！」  
乾ききった笑いが響き渡る。それもほんの一瞬のこと、

「殺せ。はやく私を殺しなさいよお！！フロージュ卿、シャロン！」

「それは叶わないわね。私は流浪に殺すなど言われてるもの。」  
「そうそう、彼に感謝しなさい、リリース。」

「それに、流浪には伝言も頼まれていてね。．．．あなたによ、リリース。」

「何をいまさら．．．。」  
さらに鋭くにらみつける。

「いいから、ちゃんと聞きなさいよ。」  
シャロンが珍しく真剣に怒鳴る。

「流浪の言葉、しっかりと聞きなさい。」

「俺のことは許さなくていい。けどもう一度、友達になって欲しい。ですってよ。貴方が一番聞きたかった言葉じゃなくって？」

「えっ．．．嘘よ．．．あんな酷いことをした私を、流浪が．．．許すわけじゃないじゃない。」

「それでも許すのが、あの男だと私はそう思うけどね。」  
フロージュはそう言い、兵士たちを消す。

「まあ、これからどうするかはあなたの自由だけど、流浪、死ぬつ

もりみたいよ。」

「・・・。」

リリースが顔を伏せたまま、歩き出す。

「ちよつとどこに・・・。」

シャロンが慌てるが、それをフロージュが手で制す。

「好きなようにさせてあげなさい。あの子にはあの子なりの答えがあるのよ。」

そう言うフロージュはどこか悲しげだった。

**第39話「裏切りと魔女」**（後書き）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## 第40話「雨と矢」

「止まれ、流浪。」

蜀と呉の兵士たちを薙ぎ払っている流浪の後方から、追ってきた孫権の隊がやってくる。

「俺は忙しいんです。後はお願ひします。皆さん。」

『御意。』

流浪の声を合図に、周辺の兵士たちの中から一斉に声が上がる。

そこには、流浪の部隊の少女達があり、一斉に孫権の隊に飛び掛かる。

それらを止める術は最早なかった。

そして、物語は一気に最終局面へと流れ込んでいく。

「終わりです。流浪さん。」

流浪の目の前にいる北郷一刀は言う。

「もう投降してください。俺も無駄な戦いは避けたい。」

一刀は悲しそうに言う。

「終われないんですよ．．．後には引けないんですよ．．．。」

流浪は呟く。その眼は冷え切っている。

「我が主の、華琳の覇道を拒むのはそこにいる劉備さんでも、向こうで戦っている孫策さんでもない。貴方なんですよ、北郷一刀。」  
徐晃が馬超を払いのけ、流浪の下へ向かおうとする。

「貴方の考えは毒だ。華琳を蝕む毒だ。今回の火計だって、貴方が考えたことなんでしょう？天の御使い。」  
李通も流浪の状況に気づき、趙雲から逃れようと、槍を短剣でさばいていく。

「・・・」

一刀は何も言わない。

「俺は主を守る矛であり、盾です。この身一つで主の覇道を切り開いてあげられるなら命など惜しくない。」  
もとより、この命は華琳に預けたのだから、と。

「負けると分かっているにもかかわらずか？」  
劉備が言葉を発する。すでに流浪の首には張飛の蛇矛が突きつけられており、一刀の前には関羽の姿がある。

完璧に詰みだ。どう動こうが、逆転など不可能。奇跡など起きない。だからせめて、生きて貰いたいと必死に訴える。

でも、それは甘い誘惑。希望に満ちた手が差し出される。  
そして、流浪はその手を取らないと決めていた。だって、その自分の両手は二人の少女の手を握っているのだから。

過去の主の女の子と、今の主の華琳。

だから流浪は、差し出されたその手を決して握らない。

そして、何より、

自分は齒車だから。

カチコチ、カチコチ。

それは、この世界での自分の役割のようなものと思っていた。

カチコチ、カチ・・・コチ、カ・・・チ・・・コ・・・

規則正しく動いていたのに、今はもう不規則だ。この世界には来てはいけなかった齒車だから。必要のない齒車だったから。いずれは動かなくなるだろう。

動かなくなったら、新しいものに取り換えて、そして、古かったものは、捨てられる。

だから、取り換えられる前に、少しでも役目を果たすことが出来るのならば。

動けるうちに出来ることがあるのならば。

「・・・。」

流浪の口元が、ニヤリと弧を描いた。

無理矢理に、何の躊躇いもなく一気に前に出た。

張飛が突き出している蛇矛に喉を食い込ませながらも、前へ進む。



喉が避けて、ヒューヒューと音がして苦しいが、流浪は気にせず進む。

突然の流浪の、劉備たちが流浪と同じ『人』であるからこそ、信じられない行動に一瞬の隙が生まれる。

その隙を流浪が逃すはずが、道理が、意味が、なかった。

曹操救出。

それが彼女たちに与えられた流浪からの『最後』の使命だった。

この計画がどういう結果に終わるかは、全て聞かされていたから、知っていた。

だからこそ、せめて彼の頼みを完璧にこなすため、彼女たちは、許劭と劉曄は走った。

許劭の諜報能力で、曹操の居場所は掴んでいる。

だから、夏侯惇、夏侯淵の2人に知らせて援軍を呼んでもらっている。

そして、彼女たち二人はすでに曹操の傍に駆けつけている。

だけでも、それはまったくもって意味をなさない、ただの悪あがきにしかならなかった。

「こればかりはどうしようもない、かな。」

許劭は額に汗を浮かべ、目の前を見つめている。

眼前には、弓を構えて、曹操の息の根を止めんとする呉の武将、黄蓋。

対して、自分たちの周りは燃え盛る業火で埋め尽くされており、ここからの脱出、そして、援軍がここまでたどり着けるのは一筋縄ではいかないであろう状況。

自分たちが李通や徐晃ならどうにかできたが、ここにいるのは軍師と諜報員、そして、今となっては敗戦間際の魏の王のたった3人。

「これを取り切る策はないね……。」

劉曄も思案を張り巡らせるが、一向に打開策は思い浮かばない。

「曹操、これで詰みじゃな……。」

黄蓋が矢に手を掛ける。

「さらばだ、曹孟徳。」

矢を放とうとしたとき、

ポタ、ポタ、ザアアアアア

「雨?」

突然、空から滴が舞い降りたかと思うと、それは瞬く間に勢いを増していく。

「じゃが、儂の勝ちが変わらん。」

ヒュン、と黄蓋が矢を放ち、曹操の心臓目掛けて、飛んでいく。

曹操も自分の死を悟り、覚悟を決める。

だが、その矢は、曹操に当たる寸前に、向きを変え、曹操の真横を通り抜けていく。

黄蓋も曹操も、流浪隊の二人も一瞬の出来事に呆然とするが、その一瞬で燃え盛る炎が静まるのには十分だった。

「華琳様、ご無事ですか!!」

「祭、生きてる?」

夏侯惇の軍と、孫策の軍の両者が、それぞれの仲間の後方から、現れる。

「ここいらが潮時か……」

絞る弓に力を込めるのを止める黄蓋。

「春蘭、帰るわよ。」

曹操も鎌を降ろす。

「よろしいので?」

「ええ……、もうこの船は持たないわ。孫策、ここはお互いに見逃すことにしましょう。」

曹操は孫策の目を見ている。

「そう、ならお言葉に甘えましょうか。」

お互いに笑いあう。そして、両者ともこの場を離れた。

その帰り道、

「ええ、秋蘭、さっきはありがとう。あなたが助けてくれたんでしょ？」

「？いえ、私は姉者と一緒にいましたが……。」  
そんな二人の会話が謎を呼んだ。

一方、その頃、上空では、

「この雨は流浪、あんたへのささやかなお礼よ。」

漆黒のドレスに身を包んだ魔女、フロージュは眼下に広がる赤壁を見下ろしている。

「それにしても、シャロン、あんたもあの小娘を助けるだなんてね、少しは見直したわ。」

「へっ！？何を言ってるの。私は何もしてないわよ。『私は』ね。」  
同じく、フロージュの隣にいるシャロンもにやにや顔で言う。

「ということは例のあの子かしら。貴方にとっての王子様、それともあの子にとってはシャロンはお姫様のようなものかしら？」

「私はお姫様なんかじゃないわ。それにその席はもう埋まっちゃってるもの。ええ、本当に。」

シャロンは遠い目をして言う。その瞳はどこか寂しげだ。

「そう？私にはそうは見えないけど。」

「お世辞は良いわよ。それにフロージュ卿も心の奥底では気付いているはずよ。私たちが愛されることなんてない。私たちは人の負の感情により、生み出されるのよ。リリースだって、流浪が味わった流華の死という『負』から生まれたのだから。それに私も・・・。そんな私たちは絶対に『善』にはなれない。分かっているはずよ。特にフロージュ卿、あなたはね。」

その表情は何処までも暗い闇の底を見ているようだった。

**第40話「雨と矢」** **（後書き）**

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## 第41話「願いと思い」

全ては順調に回り続けてる。  
この世界にいるべき者たちは。

ニヤリと流浪は笑った。  
そして、何のためらいもなく前へ突き進む。

喉が避けようが、彼を止める者は誰もいなかった。

流浪の大鎌が振り下ろされる。向かう先は北郷一刀。

「なっ!!」

張飛も関羽も、そして、振り下ろされている一刀も皆同じように驚きの表情を浮かべ、動けないでいた。ただ、一人を除いては。

「ご主人様!!」

ぱっと、誰かが飛び出し、一刀の姿が流浪の視界から消えた。

流浪の大鎌は空を切り、地面にぶつかる。

その一瞬が命取りになる。

「でやああああ!!」

我に返った張飛の蛇矛が流浪の背中を切り裂き、流浪は薄れゆく意識の中、一刀を押し倒している劉備の姿と、正面から自分を切り裂こうとする関羽の得物と、

そして、

「ごめんね、隼人様。」

誰かの優しい声と共に、視界が真っ暗になった。

「何者だ。お前？」

関羽は自身の得物が刺さっている『ソレ』に問いかける。

「私はリリス。隼人様の『魔女』。」

その少女は関羽に視線を向けずに、自分に倒れ掛かっている流浪に目を向ける。

「ごめんなさい。ごめんなさい。そして、さようなら。」

ボンと流浪は空気砲にでも弾かれたように、宙を飛んでいく。

刹那、リリスの横を駆け抜ける影があった。



その影に、リリスは言う。

「人の子よ、隼人様に少しばかりの良い夢を。」

「任せてください。」

その影、周泰は宙を舞って落ちてくる流浪をキャッチすると、戦場を駆け抜けた。

リリスはそれを見送ると、ゴボリと血を吐く。

だが、すぐに口元をぬぐうと、キツと正面を睨み付ける。

その瞬間、直線状に暴風が吹き荒れ、兵士たちを吹き飛ばし、道ができる。

「その二人も早く行きなさい。」

李通と徐晃に言う。

「助かりました。」

「ありがとうございます。」

二人は出来た道を通して戦線から離脱する。

「ごぼっ・・・ゲホッ、ゲホッ。」

リリスは柔らかな笑みを浮かべ、見送るが二人の姿が見えなくなると同時に、口から血が零れ落ちる。

その様子に、その場にいた誰も何も声を掛けられずにいた。

「・・・ほんの少しの良い夢を。せめてもの罪滅ぼしに。」

リリスの体が薄れゆく。それはとても儚げで、一瞬のことだった。

「・・・私からのささやかなプレゼント。きっと気に入ってもらえ

るよね……。」

リリースは虚空を見上げ、笑顔で消えていった。

「明命、これはどういうことだ？」

「その男を渡しなさい。」

流浪を抱えた周泰の行く手を遮るように、呉の周瑜と蜀の黄忠の部隊が現れる。

「そ、それは無理です。」

周泰は一步下がりがりながら言う。

「そう、素直に渡す気はないというのだな。弓兵隊構え。」

「弓兵隊、構えなさい。」

数千の弓兵達が弓を構える。

「冥琳様？」

「悪いな、明命。ゴホッ、ゲホッ……。私には……。もう、時間がないのだよ。ゲホッ……。」

口元に一筋の血が零れる。

「呉のため、そして雪蓮のため、この戦は勝たねばならない。それが私の最後の願いだ。だから……。」

周瑜は右手を上空に挙げ、振り下ろす。

そして、残酷だが、理にかなった言葉を吐く。

「射て!!」

一斉に弓兵達が矢を放つ。

迫りくる数千の矢はその勢いを変えぬまま、流浪を抱えた周泰へと向かっていく。

周泰は流浪を庇うように、流浪を抱きしめ、背を矢のほうへ向ける。ズババババと矢が刺さる音がするが、周泰に痛みはない。

「隠密の嬢ちゃん、まだあきらめんほうがええんとちゃうか。」

「えっ？」

頭上で女の声がする。

「そうなのー、私たちが来たからには百人力なのー。」

周泰が顔を上げると、そこには李典、于禁、楽進の3人の武将と矢を防いでいた盾兵たちがずらりと壁を作って、周瑜達と相對している。

「どうして……。」

「ああ、何も言わんでええよ。全部あの子達から聞いている。」

そう言って、李典は周泰たちの背後に目を向ける。

そこには後ろから迫りくる、蜀の兵を食い止めている、流浪隊の面々の姿が。

「周泰殿、流浪殿を早く華琳様のところへ。」  
楽進が周泰の手を取り、起こしながら言う。

「私たちも付いていきたいですが、そういうわけにもいかないようですので。」

そう言って、楽進は手に気を込める。

「ありがとうございます。」

ダツと周泰はその場を後にする。

残された、3人は顔を見合わせニコリと笑う。

「どないするんやゝ、勝手に持ち場を離れて、挙句の果てに「殺せ」と言った華琳様の命令を無視して、どうなるんやろなゝ、うちら。」  
「きつと沙和達、怒られるのゝ。」

「でも、間違つてはないと思う。」

ぼそりと楽進が言った一言に、李典、于禁がぷつと吹き出す。

「な、何だ．．．!?」

顔を赤面させる楽進。

「だって、あの真面目な風がなあ．．．。」

「風ちゃんが悪い子になったのゝ。」

あははと笑いながら二人は言う。

「けど、そやな。風の言う通り、間違つたとは思ってないな。」  
「沙和ものゝ。」

そういつて、敵である周瑜、黄忠に視線を移す。

「どうして、お前たちはあんな死にぞこないをそこまでして護ろうとする？」

呉の軍師、周瑜が言う。

「確かに流浪は、医学の心得のないうちらから見ても分かってしまいうぐらい、助からんやろうけどな・・・。」

「このまま、流浪さんを死なせることだけは駄目なの。それは流浪さんにとっても華琳様にとっても。」

「華琳様の元で別れなければ、たとえこの戦いに勝っても、後悔は残るから。」

「「だから、魏は全力であの方を生きているうちに華琳様の元へ届ける。」」」

「ハア、ハア。」

息を切らしながら、周泰は走る。いくら呉で鍛錬していたとしても、何十万という兵士たちがいるこの戦場を切り抜けるのは相当な体力がいる。それも、流浪を抱えてという悪条件付きである。

「死ねえ!!」

ヒュンと、どこからか飛んできた矢が周泰の左足に刺さる。それでも、痛みを堪えながら、動きを止めない。

「そのあんた、はやく流浪をこっちに渡しなさい。」

周泰が戦場を駆け抜けていると、数百の兵を引き連れた猫耳フードを被った荀？が、声を掛けた。

「早くしなさいよ。私は男が嫌い、そんなやつを連れて行くのは嫌だけど、それ以上に華琳様が悲しまれるのはもっと嫌なのよ。悔しいけど、そいつは華琳様にとって、大切なものになってるのよ。だから、

早くそいつを、流浪を渡しなさいよ!!」

荀？は声を張り上げ叫ぶ。思わず啞然とした周泰だが、すぐに我に返り、流浪を渡す。

「ありがとう。必ず華琳様の元に届けるから。絶対に。」

荀？は自身の服に流浪の血が付くのも気にせず、流浪を抱えて周りを兵に囲ませながら走り抜ける。

それを見送りながら、周泰は最後の力を振り絞り、戦場から少し離れた、森へ身を潜め、手頃な木に体を預ける。

すると驚くほどに、体から力が抜けていき、立てそうにもなかった。周泰はふと頭上を見上げる。

そこには日の出かかった夜空が広がっていた。

#### 第41話「願いと思い」（後書き）

いかがでしたか？

感想アドバイスお待ちしています。

アンケートの途中結果発表

リトルバスターズ

棗恭介 2票

桜野くりむ（生徒会の一存） 2票

杉崎健（生徒会の一存） 2票

立華奏（Angel Beats!） 2票

八九寺まよい（化物語） 1票

三枝ハルカ（リトルバスターズ） 1票

古河渚（CLANNAD） 1票

杉並（D・C・?） 1票

マテリアルゴースト

式見螢 1票

です。

アンケートはまだまだ募集中ですよ。

## 第42話「お別れ」

「華琳様、兵達の方を纏め終わりました。我が軍の被害は少なくともなかったですが、甚大な被害にもなっておりませんでした。なにやら、斥候の話によると蜀の本陣にて一騒動あったとのこと。」

戦鬪の報告を曹操にしている夏侯淵。だが、まだ戦鬪は終わったわけではなく、両軍間での小競り合いが起きている。

「そう、ありがとう。それで主要な武将、文官を集めてといったけど、どうして、風達3人と桂花の姿が見当たらないのかしら。風達には右翼の防衛を任せただけど、その仕事を放棄してどっかに言ったとさきほど聞いたのだけど。」

曹操は怪訝な顔をして言う。

「その通りです。それと桂花のほうは、数名の兵士たちが、数百の兵を率いて、急いでここを出ていったと、言っており、行方はまだ分かっておりません。」

申し訳なさそうに夏侯淵は言う。

「き、きつと桂花様達も何か考えがあって動いてるんですよ。もう少し待ちましょう。」

雰囲気が悪くなったのを察した典韋が提案する。

「そうですよ、華琳様。もう少し待ちましょうよ。そう思うだろう、流浪？」

何気なく言った、夏侯惇の最後の一言に、全員が反応する。それに遅れて夏侯惇も自分の失態に気づき、冷や汗を流す。

「流浪ねえ……。あの男に関する情報は？」



「それにつきましては全て桂花のところに報告が行ってますので・・・」

曹操は少し悲しそうな顔をしたが、すぐに元の覇王としての顔になる。

「そう、ならいいわ。何も報告がないということは、どこかで死んだでしょう。皆、流浪のことは忘れなさい。」

突然のその一言に、魏の将たちが、いつも冷静な夏侯淵でさえ、動揺を隠せないでいた。

「それは本気で言っとるんか、華琳？」

「ええ、本気よ。あの男は忘れなさい。何度も言わせないでくれるかしら。」

張遼の確かめるような声に、声色一つ変えずに曹操は答える。

「ふざけんとんのか、お前は！！」

その一言に怒った張遼は、ずかずかと曹操の元まで歩き、その胸倉を掴む。

「落ち着け、霞。」

「止めるな、春蘭。こいつは一発殴ってやらな、目覚まさへんのや。」

夏侯惇が止めに入ろうとするが張遼の一喝に思わず立ち止まってしまふ。

「・・・何よ。殴りたければ殴ればいいわ。もうあの男はいないのよ。いい加減に引きずるのはやめなさいって言ってるのよ。」

「・・・！！」

バゴオンと鈍い音が響き、曹操の華奢な体が飛んでいく。

「ハアハア・・・これで目覚めたか？」

張遼は頬を抑える曹操を見下ろし、言う。

「春蘭、秋蘭。霞を捕えなさい。彼女はもう使えないわ。」

曹操は顔を上げずに言う。

「それは・・・。」

「貴方達も目を覚ましなさい。私たちの目的は？隼人の願いは？それを考えなさい。魏が天下を取ることによ。それなのに、死んだかもしれない男のことを考えていたら勝てる戦いも勝てなくなるのよ。」曹操は俯いたまま言う。

「それでいいのですか？本当に。」

そんな曹操を見て、ぽつりと典韋が言った。

「・・・。」

ポタ、ポタと滴が零れ落ちる。

「そんな分けないでしょ・・・、私だって隼人のことは心配なのよ！！会えるものなら今すぐ会いたいわよ。でも、私は魏の王なのよ。覇道を歩むと決めたの・・・、隼人と約束したの・・・だから、もう迷ってる暇なんてないのよ！！これ以上、何も失いたくないのよお・・・。」

涙を流しながら、曹操は自分の本心を出して言う。

「もう、次の戦いまで時間はないの。きっとこれが、最後になるわ・・・、だから、早く隼人のことは忘れなさいよ！！」

目先の戦いに集中しなさい、と曹操は自分自身に言い聞かせるように言う。

「霞、すまん。」

夏侯惇が張遼を捕えるため、腕をとるが、張遼は全く反抗せずにした。

「もうええ．．．。」

夏侯惇に連れられようとしたその時、

「失礼いたします。」

一人の兵士が、慌てた様子で入ってくる。

「荀？様が戻られました。それと．．．流浪様も。」

その一言に、その場にいた全員が振り返る。そして、彼女らの視界には、一目散に駆け出していた曹操の姿が映っていた。

「か、華琳様！！」

荀？は、向こうからやってくる曹操の姿を見つけて安堵の声を漏らす。

「流浪、しっかりしなさいよ。華琳様が来たわよ。」

荀？は横になっている流浪に声をかける。

「それは多分、無理な相談よ。」

「駄目だよ、シャロン。そんなこといっちゃ。」

荀？の後ろにいたクリーム色に近い金髪、ショートカットの少女の

一言に、その隣にいた灰色の髪の少年が、口を塞がせる。

「隼人、大丈夫？」

慌ててきた、曹操が隼人に駆け寄る。

「わあ、感動の再開だね。紫蘭君。」

シャロンと呼ばれた少女は目を爛々と輝かせて言う。

「ここは茶化す場面じゃないよ、シャロン。それよりも早く目的を果たしてよ。」

紫蘭は呆れたように、溜息を一つはく。

「と、言うわけで金髪のお嬢さん、ちょっと流浪を貸して。」  
にこにこ屈託のない笑みを浮かべてシャロンは、

「・・・あっ!？」

流浪の唇に自分の唇を重ねた。その行動に思わず、曹操が止めさせようとするが、紫蘭がそれを手で制する。

それを数秒行い、ゆっくりとシャロンは自分の唇を離す。

「・・・う・・・、どうしたのですか？華琳に荀？殿。」

流浪の口から言葉がこぼれる。

「これは『私達』からの大サービスよ。死ぬまでなら喋れるからね。それと、私がしたのはそれだけだから、決して命が助かるなんてことではないからね。私は神様じゃない、ただの『■■■』なんだからね。」

「けど、リリスには感謝しなさい。流浪。あなたが今もこうしてこの世界にいられるのはあの子のおかげよ。もっとも時間には限りが

あるようだけれど。」

そう言って、シャロンは紫蘭のそばに駆け寄り、わいわい騒ぎ始める。

「隼人、あんたどうして私のそばを離れたの？」

「ごめんなさい。」

「ごめんじゃ、分からないわよ。」

「・・・華琳は知らなくていいことです。」

「何で、そんなにボロボロなのよ・・・。隼人は強かったじゃない。」

「俺は強くなんでないですよ。誰も助けられない。流華も、そして多分、華琳も。」

流浪は弱弱い笑みを浮かべていう。

「そんなこと・・・ないわよ。私は充分、あなたに助けられた。」

「・・・はは、そう言ってもらえると嬉しいですよ。」

流浪はゆっくりと自分の右腕を差し出す。

「この腕輪を華琳、あなたに。きっとあなたなら使いこなせます。だって、あなたは俺が■■■た人だから。」

そう言って、流浪は右腕についている腕輪を見る。そこには、栗色の宝玉と黒の宝玉、金色に輝く宝玉の3つが埋め込まれた腕輪があった。

曹操はそれをゆっくりと外してあげる。

その様子を見て、流浪は微笑を浮かべ、そして、

ゴフッ・・・

血を吐いた。真っ赤に染まっていく。

「・・・ハハ・・・、もう時間がないみたい・・・ですね。」  
自分の死が間近に迫っていても、流浪は笑みを絶やさない。

「・・・許さないわよ。隼人にはまだやってもらうことがたくさんあるのよ。・・・まだ魏は天下を取ってないわ。・・・まだ五胡の脅威にさらされているわ。・・・私はまだ何も伝えて・・・いないわ。・・・だから、まだ、そばにいて・・・。」  
流浪の頬に、滴がポタリと落ちてくる。

「・・・どうして、そんなに悲しい顔をするのですか？」  
そんな曹操の様子に流浪は言う。

「ほら、笑ってください。華琳。綺麗なお顔が台無しですよ。あなたは笑顔のほうが可愛い。だから、ね。」  
ニコリと流浪は笑う。それに答えるように、曹操も涙を流しながらも笑みを浮かべる。

それはとてもぎこちない笑いだったけど、どんなものよりも温かい最高の笑いだった。

## 第42話「お別れ」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしています。

次回もお楽しみに。

## 第43話「エピローグ」

「隼人、またここに来てしまったわ。」

許昌から少し離れた、山の中、一人の少女は来ていた。彼女の正面には、小さな墓石が置いてあり、その周りにもさらに小さな石が立ってある。

時折、聞こえる鳥の囀りと小川の水が流れる音のみがこの空間を支配している。そんな中、少女は黙々と、墓石を磨き、そこに花束を置く。

その少女は3か月ほど前までは、魏の霸王として覇道を進んでいたが、今は魏の王ではない。

3か月前・・・後に赤壁の戦いと呼ばれる戦いで、被害を被った魏、蜀呉は最終決戦として、平地での戦いを行った。

互いに全力を尽くしあい、一進一退の攻防を繰り広げたこの戦いは、五胡からの三国への進行という突然の事態により強制終了し、これを危機とした三国の重鎮たちは互いに同盟を結び、五胡との全面対決に突入する。

「あなたなら、こんなところに来るべきじゃないでしょう、って私を諭すのかしらね。」

その少女は懐かしいそうに言う。

「五胡との戦いは激しいわ。戦況もあまり良くないわ。でも、あなたには伝えておかなきゃいけないことがあるの。」  
少女はそう言って、ゆっくりと語り始める。



「魏では、みんな元気よ。春蘭なんてこの間も五胡の軍勢を追い払ったわ。秋蘭も私の下でよくやってくれてるわ。桂花は三国の諸葛亮や陸遜と共に、日々策を練ってくれてる。季衣は相変わらず毎日、元気よ。流琉はまた料理の腕を上げたわ。私をもう少しで追い越すんじゃないかしら。風と稟は三国の町を発展させるために日々頑張ってくれてるのよ。風たち3人はそれぞれの得意分野で、活躍してくれてるわ。霞の率いる騎兵隊は蜀の馬超と張り合うほどに強くなっているわ。張3姉妹は三国中で活動してくれて町に活気を与えてくれる。」

「それとね、隼人が可愛がってた明命は無事よ。あの戦いの後、衰弱していたけど華佗っていう凄腕の医者のおかげで助かったわ。今はまだ、眠っているけど、もうじき目が覚めるそうよ。」

「でもね、貴方の連れてきた子達はみんな自害したわ。私たちの主は流浪様だけですって、言っただけで貴方のことが好きだったみたいよ。多分、隼人は鈍感だから気づいてないかもしれないけど、そっちでは、ちゃんと気づいてあげなさい。」

そう言って、少女はこつんと流浪の眠る墓石をこつんと突く。

「そろそろ時間ね。もう行くわ。多分、ここには戻ってこれないと思う。」

少女は立ち上がりながら、名残惜しそうに墓石を見る。

「私、五胡に行くことになったの、五胡の王の妻として。魏には戻って来れないと思う。私も本当は行きたくないわ。けどね、三国の民のため、私は彼らに安全を保障しなければならぬの。こんなとき隼人がいてくれたら、何とかしてくれたのかもしれないけど、貴方はもういないものね。だから、ごめんなさい……。」

少女はそれだけを言い、その背中徐々になくなくなり、見えなくな

っていく。

残された物言わぬ墓石は何も言わない。

「本当にこれで良かったのですか？」

その墓石の背後から女の声が出た。その女はまだ幼く、その綺麗な亜麻色の髪の毛は、そよ風で揺れている。

その少女の灰色の瞳には墓石が移されており、手には黒色のグローブがはめられている。また、頭につけられているカチューシャの猫耳だけがこの空間においては場違いであるが、それがこの女の普通の格好だから仕方があるまい。

「もう一度、問いかけますよ。本当にこれでよかったの？」

三国は共に手を取り合った。

魏の面々は元気に生きている。

周泰も無事助かった。

――それでいいじゃないですか？

でも、流浪隊の面々はこの世にはいない。

そして何より、あの少女を守ってあげられるあなたがいらない。

あの子は、どこか遠くへ行ってしまう。

「それでもあなたは同じ答えを出すのですか？ 『リリスの遺産』、

これ以上私を失望させないでほしい。」  
寒気がするほど冷徹な笑みを浮かべる。

「始めに言います。私はあなたの味方ではない。その上で、問いかけます。本当にこれで良かったのですか？ やり直したくありませんか？ 私がやり直させてあげます。」

その少女は赤い唐傘を何処からか取り出し広げる。

「さあ、決めてください。あなたは私の言葉を善意と取りますか？ それとも悪意と取りますか？」

ここで諦めますか？

それとも、もう一度、あの日の絶望へ帰りますか？

知らなくてもいい絶望があるかもしれない。

それでもなお、私の善意を受け取りますか？

一一一・・・。

今回の結果であなたは満足したのですか？

一一一嫌だ。嫌なんです。みんながいない。劉曄さんも、許劭さんも、李通さんも、徐晃さんもない。そして、華琳もいなくなってしまう。

無理かもしれませんが。あなたには誰も救えないかもしれない。また、指を咥えていることしかできず失うかもしれない。まあ、答えてください。

信じるべきは・・・

――その善意。華琳には人を疑うことも覚えなさいって、言われるかもしれないけど。

「良いでしょう。その誘い乗らせていただきます。」  
そんな言葉がしっかりと女の耳に届いた。

「それでいいですよ。私がその願い叶えます。流華と隼人の願いを。」

## 第43話「エピローグ」(後書き)

いかがでしたか？

感想・アドバイスお待ちしております。

これで『恋姫無双』全ては我が主のために』は終了となりますが、次回作、本作でも出た紫蘭視点の話、そして、この物語を紐解く3つ目の話を予定しています。

最後に、この物語を最後まで見てくださった皆さん、ありがとうございます。

次回作でまたお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1752q/>

---

恋姫無双～全ては我が主のために～

2011年5月8日13時05分発行